「君は寂しいだけなんだよ。そのくらい知ってるよ、
そんなの全部分かって君に近づいたんだ。軽蔑するだろ？」

「ジェミニとほうき星」

著者	高梨　來
価格	800 円
ジャンル	JUNE
ブース	JUNE 1「午前三時の猫」

伏姫海吏（フセヒメカイリ）、17 歳。双子の姉に不毛な片思い。

双子の姉と留学先に残した同性の恋人との間で揺れる主人公が親友の助けを借りながら自分自身と、他者と向き合い殻を破ろうとするまでのお話。ぬるめの BL 要素ありの青春小説です。男の子同士の過剰ないちゃつき、近親間・同性間の恋愛描写有り。性描写はありません。海吏と親友春馬の出会い、本編終了後の双子のその後のスピンオフを同時収録。

推薦文

「愛し方を学ぶ、あの青い季節の」

主人公の海吏くんが双子の姉の祈吏ちゃんへの恋で悩むのは、近親相姦というよりも、あたたかく安全な巣から飛び立つ雛の苦しみであるように感じた。何があっても味方でいてくれる、家族。それはもちろん大切で必要なものだけれど、生きていくためには、時に攻撃してくる者も現れる、危険な「外の世界」に出て行かないといけない。

外の世界にだって味方になってくれる人がいる。無理やり巣立ちをするように留学したロンドンで出会う、マーティン。けれども同性であるがゆえに、彼は愛し愛されることをためらう。

「君は寂しいだけなんだよ。そのくらい知ってるよ、そんなの全部分かって君に近づいたんだ。軽蔑するだろ？」

このセリフ、切なくて本当に良いですね……　海吏くんとマーティンがキスをしたり体を触りあったりするシーンがとても優しく素敵で、舞台がイギリスであることもあり、映画「モーリス」を思い出しました。

ＢＬは、やるのも良いが、やらないのも良い！！

海吏くんは最終的に、祈吏ちゃんとの適切な距離を見つける。

「愛おしいというその気持ちの在り方を教えてくれたのが祈吏だった」

家族愛も、異性愛も、同性愛も「自分ではない誰かを大事にする」という意味で基本は一緒だ。

海吏くんと祈吏ちゃんはこれからもきっと（それぞれが別の家族を作ったとしても）支え合って生きていけるし、沢山の人に愛を分けてあげられる。

そんな気がした。

——柳屋文芸堂

推薦文

「誰かを好きになること、幸福な追体験」

作者である高梨來さんが、とても大切に愛情深く書かれたのが伝わってきます。BLといえばそうなのだけど、誰かを好きになることや寄り添い合うことのあたたかさが丁寧に描かれた、純度の高い青春ストーリー。キュンとしたりはらはらしたり、もだもだしたり。海吏と一緒に悩み惑うのはいっそ心地よくて、読書の醍醐味だなあなんて思ったり。

海吏のナイーブさ、祈吏のかわいさ（本当にかわいい！　いっそとうとい！）、春馬くんの優しさ。キャラクターがとても魅力的で、一〇万字という長さを感じさせないテンポの良さです。会話のみずみずしさもそうですが、お洋服や食べ物などのディテールがかわいくて、素敵です。

私の最推しはマーティンです……！　シベリアンハスキーのような瞳、という描写でもう好きに決まってるんですけど、ちょっとした会話や仕草にあらわれる優しさ、海吏へのまなざしがもう……！　これ以上は私が言うのも野暮なので、ぜひ読んでください。

続編や掌編、あまぶんではポストカードSSも、彼らの物語はこれからも紡がれていきます。Twitterやブログでも、來さんから彼らのようすを聞かせていただけて、それらをリアルタイムで楽しめるのが読者としてとてもうれしいです。

——オカワダアキナ

推薦文

「ぼくらの皮膚がまだ繋がってたころ、ぼくは、」

思春期の、自意識と人恋しさと気負いと憧憬入り混じるお年頃の、好きな人たちの何が好きなのかどうして好きなのか好きでいていいのか百遍自問しちゃうストイックさ、もういいじゃん触れちゃえよって突っ込んでは決していけない……そのころの記憶……うっ眩暈が

主人公の海吏も親友の春馬も、優しく強がりで大人びているふうだけれど、一皮剥けば溶けかけたバターのように心許ない感情を扱いかねて迷っている。まだまだ感情もからだも分類しきらない時期で、自分と他人の境界線が曖昧で、容易く心ごと差し出しあってしまう彼らの、危なっかしさが愛おしいお話。

——容（@詩架）

推薦文

「ファンタジーという名の薬と癒し」

双子の姉と、留学先のイギリスに残してきた同性の恋人との間で揺れる心を軸に、人間関係で傷ついた心が癒やされ、他者を受け入れられるようになる少年の変化を描く、青春BL小説です。

人に傷つけられたものを回復するのもまた人、海吏は親友の春馬や姉の祈吏、恋人のマーティンとの交流を経て自信を取り戻してゆきます。

描かれる人間関係は箱庭的で温かく、ともすれば結論ありきのファンタジーだと読めるかもしれません。けれど、作者の來さんはそのような読まれ方をされることも含めて、この「ジェミニとほうき星」を執筆されたのではないかと思うのです。

何か疲れたな、しんどいな、そんなときに安心して没頭できる優しい世界を、否定されることのない完全な肯定の世界を。そんなふうな気配りが感じられます。

フィクションの世界で英気を養い、再び現実に帰ってこられるようなひとときの休息。そんな物語です。

——凪野基

推薦文

「悩み続けるということ」

この作品をはじめて読みおわったとき、ツイッターで「読みながら、人を好きになること、「好き」という気持ちそのものがわからなくなった！」と叫んだのですが、そういえば、先日書かせていただきた、にゃんしーさんの「赤ちゃんのいないお腹からは夏の匂いがする」にも同じことを書いてましたな。

同じ「人を好きになることがどういうことかわからなくなった」という言葉でも、この二作品を読んで思ったことはそれぞれ違って（それを同じ言葉でしか表現できなかったのはわたしの語彙力の問題である）、この「ジェミニとほうき星」の主人公伏姫海吏くんが、双子の姉、祈吏のことを好きだと思う気持ちと、その胸のうちの苦しみや、祈吏のことをどんなふうに大切に思っていて、どれほど好きかという心情吐露に、私は途中ですっかり説得されてしまったのだ。

私が、「そうか！！！　そんなに好きか！！！　わかった！！！　双子の姉だろうがなんだろうが関係ない！　一生愛し抜くことをゆるす！！！」と思っても、海吏はまだ悩んでいた、という（笑）

そういうわけなので、それを過ぎてからは、海吏がどうしてこんなに悩むのかわからなくなってきて、この話がどういう結末になるのかもわからなくなって、だんだんはらはらしました。

ボーイズラブの定石として、どのキャラとどのキャラがくっつくか、また攻か受か、というのは表紙やら何やらであらかじめわかっているものなのですが、この作品はそれがわからなくて（もしや春馬ルートに行くのでは…とも思ったり…）、やきもきしたり、ほんわかしたり、一冊の本として、すごく楽しめる作品だなあと思います。ぐいぐい読ませる文章力があり、海吏の結論を知ったら、きっと続編も読みたくなるはず。

——壬生キヨム

推薦文

「吐息が聞こえるようなリアル、両性愛に惑う少年の成長物語」

目立つ名前と男女の双子という理由で、中学時代にいじめを受け、親友の春馬にしか胸のうちを明かせない伏姫海吏（ふせひめかいり・主人公）。その親友にさえ、英国に残してきた「好きな子」が男だと打ち明けられないでいる。双子の姉の祈吏（いのり）にもまた、幼い頃から思慕を抱き、いずれはどちらかを選ばなくてはいけなくて——。

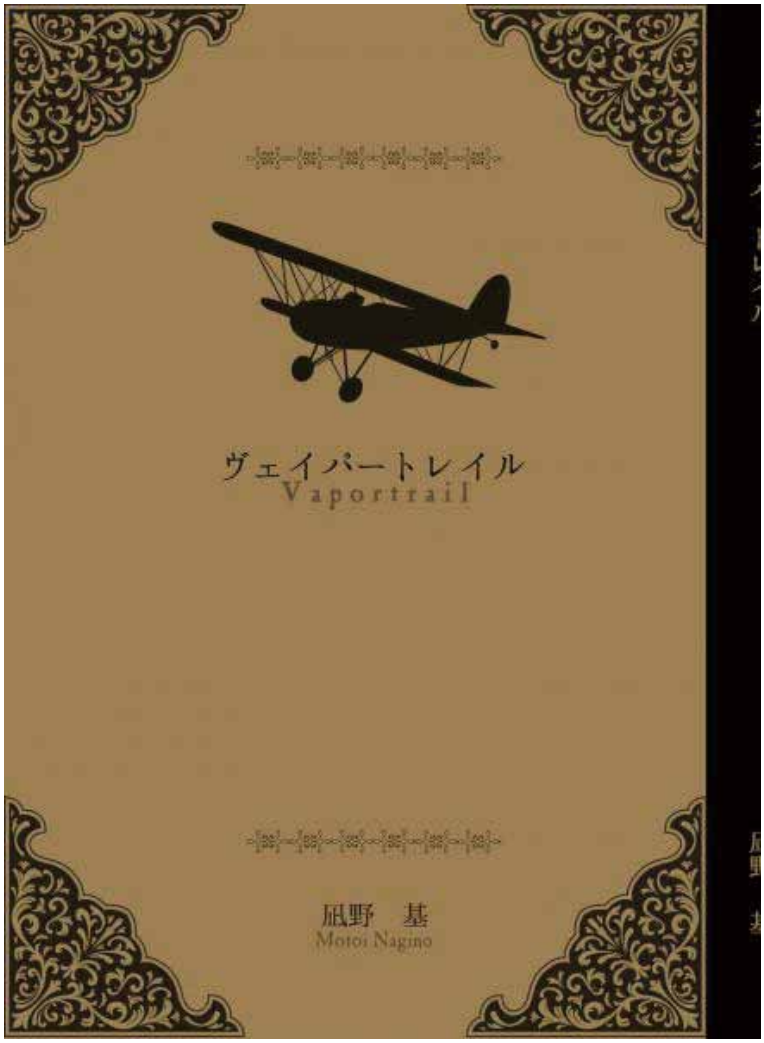
思い詰める海吏の姿がピュアで、思春期独特の切羽詰まった焦燥感が伝わってきます。女子高校生の喋り言葉をそのまま書き写したような台詞、化粧品やお菓子、整髪料がまじった女の子特有の甘ったるい匂い、金切り声のような生徒達の嬌声など「今この日本に存在してそう」なリアルを感じさせる描写が巧み。

なんといっても「彼氏」のマーティンが魅力的。「好きだ」と言う海吏に、「きみは寂しいだけなんだよ」と頑なに拒むストイックさが切ない。

頁数の多さを感じさせないほど、内面描写が濃く、掌編とおまけペーパーが嬉しい一冊です。

後日談的な続編「MY　SHOOTING STAR」・恋愛成就編「あたらしい朝」もオススメです。

——きよにゃ



少年は夢に生き、少女は夢を推進力にかえる。

「ヴェイパートレイル」

著者	凪野基
価格	300円
ジャンル	ファンタジー
ブース	委託販売

――二本の腕も、大地を踏みしめる足も、脆弱な肺も、翼なき背も
空を飛ぶには何の役にも立たなくて
だからこそ想い、希い、祈るのだ　ひとつきりのこの心で

少年少女とヴァイオリンとモラトリアム「いざよいの夏」、猫とアンドロイドをめぐる死と再生の物語「ピートの葬送」、飛行機乗りの心の一線を描く「雲曳きの配達人」、空飛ぶクジラと喋るペンギンのフロンティアSF「宇宙船クジラ号」の4篇を収載した、SF・ファンタジー作品集。空を飛ぶもの、宇宙に生きるもの、奏でるもの、旅するもの。「ここではないどこか」を歩む彼らの一幕をお楽しみください。
ジャンル、人称、作風色々で、「灰青」の小説が初めてという方にもお勧めです。

「飛べるさ、何度だって」

推薦文

思春期のモラトリアム、知性の継承の有り様、飛翔を刻まれた魂の連帯、生きとし生けるものの旅。SFと現実が折り重なる4つの短編集。

ナギノさんの作品は斜陽、時代の変遷がまさに目で見える『今』を生きる登場人物が多い。決断の時間は少なく伸ばした手は容赦なく打ち払われる。けれど目線はとても明るいのだ。それは彼らに寄り添い筆を重ねていくナギノさん自身のつよさと希望が彼ら、そして作品に反映しているからだろう。

この作品群もそうだ。

描かれる人々はみな地に足着けて日々を重ねていく。それは「日々」を知っているからに他ない。

少年少女のモラトリアムと銘打ちつつも、描写は弾けんばかりの夏だ。むっとした熱気よりも木々を渡る風、家庭菜園の夏野菜、蝉時雨、悲壮なほど爽やかに夏は過ぎていく。少年と祖母との暮らしはしっかりと、祖母の教え子の少女との交流は淡くむずむずと。素人が好きなようにと少年が独白するヴァイオリンは二色三色と自在に重なる。そして少女は、少女だけは時を重ねてゆく。力強く、「あの曲」を奏でて。

知性を与えられたマシンの流転とは？　少女の飼い猫ピートと、猫が運び込まれた葬儀センター勤務のアンドロイド。『最後の時』を前に何を思うのか。個人的で蛇足な話だが、友人を亡くしたとき、火力によって変換される物質の流転でヒトは「どこにでもいて」「なににでもなれる」という状態にシフトするのだと自らを説得したことがある。そのことは常に私のなかにあって普段はそっと置いているのだけれど、まさにそこを揺さぶられた。

「彼ら（マシン）」と「我々（ヒト）」の違いはなんだろうか。魂？　感情？　実は系統樹のとても近しい枝に腰掛けているのではなかろうか。

愛機ゾキアを駆る『女神』メグ。アイコンしての彼女はスターだった。けれど求めていた世界と現実のズレ。そしてそのどちらも追えなくなった墜ちた精神と身体。それでも、言うべきでないことをこころにしまっておける（鬱積せずにきちんと消化し収められる）人で、それは彼女の生き方でもあり、自分を駄目にしない方法論を確立しているつよさだ。再び空へ戻るための願いと秘密を抱えながら人は軽やかに進む。重力の軛から解き放たれる瞬間を得に。

少年は夢に生き、少女は夢を推進力にかえる。そんな短編集。

そしてようそろ！　旅はまだまだ続くのだ。

――まるた曜子

推薦文

「やがて飛び立つ、その日の為に」

現在の、そしてかつての。
それぞれの居場所で空を仰ぎ、大地を蹴り、大空へと羽ばたこうとする凛とした強さを感じさせる少年少女たちの紡ぎ出す四編の小さな物語が収録されている。
彼らは自らの居場所を見据え、力強く「今」を生き、遠い空を仰ぎ、そこへと羽ばたく夢を忘れない。
「魔女」と呼ばれる祖母のもとでひっそりとモラトリアムな日々（彼自身がそう自覚しているのである）を過ごす少年と少女の出会いとかけがえのない夏、月世界で生きる人々と彼らと共生するアンドロイドとのある一日を描いた近未来、戦火の降り注ぐ日々の中、戦いの舞台を降りることを余儀なくされた「女神」と飛行機乗りの出会いを捉えたファンタジ――舞台を幾つも乗り換えながら描かれるのは、「生きる」ことと向き合うという彼らのあり方だ。
未来へと進むため、そこで新たな出会いを得るため――彼らは空を仰ぎ、遠い場所を目指す。迷いのない力強い生き方は、読み手であるこちらを揺さぶり、背中をそうっと押してくれるよう。
いまを生き、未来を夢見、「そら」へ希求することをやまない少女ニキとかつての少女メグのきらめきと鮮やかすぎる魂のコントラストが印象的な「いざよいの夏」、「雲曳きの配達人」の二編、世界の成り立ちを過不足無く・かつ説明過剰ではなく噛み砕いた形で描き出しながら「万物の流転・魂はどこからきてどこへ行くのか」を、それぞれに異なった形で与えられた「限りある命」を持った人間とアンドロイドの魂の交流を通して描き出す「ビートの葬送」を経て、魂を運ぶ「宇宙船クジラ号」の軽やかな飛翔により、物語は鮮やかに幕を下ろす。
「魂の飛翔」に触れられるかのような、心を踊らせてくれる一冊。

――高梨來

推薦文

「爽やかな喪失」

シンプルだが凝っている装丁にまずひかれる。
「雲曳きの配達人」の奥行きのある世界観や、
「いざよいの夏」のころりと明らかになる設定が、
いずれも無理なく自然に描かれていて、魅力的だった。
展開する物語の描写も、非常に丁寧で読み進めるのが楽しい。

何かを失った／何かが失われたけれど、
それでもなお続いていくもの、
というのがテーマにあるように感じた。

前へ踏み出す希望を秘めた喪失がとても心地良い一冊でした。

――試し読み会感想

推薦文

「飛べるさ」

「いざよいの夏」「ビートの葬送」「雲曳きの配達人」「宇宙船のクジラ号」の4つの短編からなる一冊。
どれも面白くて、すごく好きで、まとまった推薦文が書きにくいのだけど。
ただ音楽や夏、アンドロイド、飛行機乗りを通じて
見えるのは青い空と、どこまでの伸びる美しい飛行機雲。
「人を飛ばすのは人の想い以外にない。
飛びたいと思う心、飛ばせたいと思う心、飛べるはずだと思う心」
その言葉はそのままどう生きるべきかという操縦桿に他ならない。

――試し読み会感想

推薦文

「宇宙船のクジラ号」がめええっちゃかわいい！！！
そうそう！　そうだよねええ！！！　ペンギンもそうだし、クジラもそうなんだ！
やっぱりそうなんだ！！！
ってなりました（笑）

——壬生キヨム

推薦文

「あの飛行機雲を目指して」

四つのあこがれが形になった作品集。凪野さんの文章は地に足がついていて、力強い。こんな未来もあるかもしれないと思わせてくれる。それは「情熱大陸」という耳なれた曲名であったり、緑の飛行機ゾキアはわたしはゼロ戦を思い浮かべた。

こうしたモチーフたちによって、ファンタジーではあるけれど、知っている世界をかいま見せてくれる。

読み終えたとき、わたしたちにはさわやかな風が吹き抜ける。

あこがれは空をも突き抜ける。それは青い空に一筋走る、飛行機雲そのものだろう。

「決して届かない、だからこそ希んでやまない」

——試し読み会感想

贋オカマと他人の恋愛

※写真はイメージです。っていうかこれ写真じゃない。

読み終わって思うのは、木漏れ日のような優しさだ。

「贋オカマと他人の恋愛」

著者	柳田のり子
価格	無料
ジャンル	純文学
ブース	委託販売

歌舞伎の研究者を目指す七瀬耕一。
村上春樹と同じ勉強がしたい、と演劇専修に進んだ隅田周平。
周平の恋人で、いつも周平と一緒にいる七瀬にやきもちを焼く辻堂克巳。
奇妙なバランスを保ったまま過ぎてゆく、三人の大学生活。
しかし、永遠に変わらない関係などありえない。
これから話すのは、壊れてゆく恋の話だ。
なるべく楽しく語りたいとは思うけれど、何しろ結末が決まっている。
それぞれの立場で出来得る限り足掻きもがいたのに、逃れようがなかった。
俺も、周平も、克巳も。
同性愛　同性愛のように見える異性愛　異性愛のように見える同性愛
様々な形の、痛々しいほど純粋な愛。
BL をファンタジーだと信じているなら、この本は開かない方がいいかもしれない。

推薦文

「BLと言うよりもっと地に足ついた人間ドラマ」

ゲイの周平、性同一性障害らしき克巳。仕事に疲れた客、佐知子。居場所を探し続けたメグ。学び続けるために贋オカマに徹する主人公、七瀬。

真摯な（もしかしたらただ不器用な）七瀬は、他人に関わり、自分のことのように傷ついて、けれど自身の生活をやめることなく。

主人公である七瀬は常に第三者だ。どんなに関わろう、救おうと手を伸ばしても、それは相手も自分も望む形では決してない。仕事とプライベートの境に揺れ。周平と克巳、恋人同士だった友人に振り回され。誠実に向き合いながらけれど一方では裏切り、そして裏切られ。七瀬の気持ちなどかまいもせずに、彼等は勝手に生きている。

そして七瀬自身も、自身の問題と向き合い、決断し……少しばかり予定とは違ったけれど、確かな道を歩いていく。

どうにも出来ない焦燥。なんとかしたいと願う気持ち。空っぽだと自覚するが故の勤勉さが嫌らしくもなく胸に来る。商売よりも人として向き合ってしまうのは、必要とされたいとどこかで願う気持ちの表れであるのかも知れない。

七瀬の真面目さ、真面目故に打算を知り、一歩ずつ前かどうかも解らないけれど確かに進んでいく様も。BLの側面はあるものの、BLの一言では終われずに。TLやBLといった括りを超えて人が人を思うことも。結局他人に対しては何時いかなる時も第三者でしか居られないという現実も。

そこに生まれるのは誇張のない人間ドラマ。どんでん返しも何もなく、今、目の前にあったとしても、何の不思議もない。

だからこそ、その見えない先行きが最後まで気になってしまうのかもしれない。

紀伊国屋本店の煉瓦壁、新宿三丁目の裏路地、歌舞伎座のあたり。七瀬と、周平と、メグと、今にもすれ違っていそうなリアルさ。

重い問題をいくつも抱えつつ、けれど読み終わって思うのは、木漏れ日のような優しさだ。

彼等は、私たちは、確かに今、ここで生きている。一人で、一人ではなく、誰かと。俯いたら寄り添う人がきっといる。目の前に居なくても。きっとどこかに。

直接助けてくれるわけではないけれど、読み終わればきっと少しだけ、心のどこかが軽くなる。

A5二段の文字量は少なくはないけれど、あっという間に読み終わってしまう読みやすさも魅力の一つだ。

拙い推薦文より、まず、開いて文字を追ってみて欲しい。

きっと最初の一文から引き込まれる。

――森村直也

推薦文

「「贋オカマ」だからこそ見える世界」

一組のゲイカップルと、日舞を嗜んでいた男性を中心とした恋模様。「贋オカマ」の七瀬からみたオカマ・ゲイの人たちの人生に釘付けになる一冊。所謂ファンタジーとしてのBLではなく、この現代日本のどこかにいそう、と錯覚してしまうほどリアルな人物描写とお話に感服しました。

昔から、女性として生きてはきたけれど、時折「もし自分が男性だったら」と思う事があった自分。

LGBTの要素があるお話には惹かれ、直球な「贋オカマ」というフレーズを見て買わせていただいた思い出があります（オカマ、という呼称には色々とご意見あるとは思いますが、あくまでこれはフィクションを楽しむものだと思っているのでそのあたりは割愛させてくださいませ）。

ひょんなきっかけから「贋オカマ」になった七瀬の視点を通して、男と女の境界線をフラフラ漂う、そんなお話に感じました。

——服部匠

推薦文

作者の柳田さんから直々に「理系美少年と村上春樹オタクと伝統芸能オタクの男子がイチャイチャする話です」という事前情報を頂いていたので、コメディなんかな、と思っていたのですが、全然コメディじゃなかった（笑）というか、会話は基本、面白いんですが。コメディじゃないよこれ…！

男性同士の大学生の恋愛話から始まり、卒業後も三〇代前半ぐらいまで続く物語なのですが、作中繰り広げられる恋の顛末が…とにかく愛が重くて！　でも、よく考えてみたら、過去に読んだ柳田さんの作品って、恋愛については全部そういう「重さ」を感じたような気もするので、きっと作者さまの持ち味なのかな、と思います。

BLという形を取ってますが、どっちかといえば、社会の中に自分の居場所が持てない人の不安とか、悲しみとか、そういうものをゲイというマイノリティを通して伝えている作品、のように見えました。自分の個性を周囲に認めてもらえないコンプレックスに悩み傷つきつつも、それに負けずに自らの目を通して世の中を見て、自分らしく生きようともがいている人たちの物語、のような気がします。

内容的に明るい恋愛ではなく、辛く重たくはあるんですが、そこに理性的な主人公による鮮やかな突っ込みが合いの手のように入ることで、どん底に陥ることなく、楽しめる内容になっています。その辺りのバランス感覚は、他作品でも見られる柳田さん作品の醍醐味だと思います。あと、以前に読んだ作品とリンクしていたので、そういう点も楽しかったです。前に見たキャラクターにまた会えた、みたいな感覚が好きなので、嬉しくなります。

感情の「重さ」って、年を取れば取るほどつい敬遠したくなってくるのですが、思えば大事な感性ですよね。ボリューム的に長く、しかも綺麗に製本された本だったので、無料にしちゃいかんと思いました。

次からはお金取ってください！　ほんとに！！

——まりも

推薦文

「〝贋〟を一皮剥いてみりゃ　見えるは〝生身〟の悲喜交々」

学者として生きるという大望に邁進する主人公・七瀬耕一の視点から、彼の親友・周平やその恋人・克巳をメインに様々な〝他人の恋愛〟を描いた物語……って、無難にまとめるとただの恋愛小説かよって感じになっちゃうんだけど、なんか、こう、違うんだ……！

キャッキャウフフ要素はまるでなく、あるのはどこまでも生々しいそれぞれの生き様。七瀬の語り口はどこか超然とした風もあり淡々としていながら、折に触れて自身の感情に揺れるその筆致が絶妙で、一気読みをしてしまいました……そして読み終わった後しばらく何も考えられなくなるという…。

七瀬は作中、やむを得ない理由から〝贋オカマ〟として生計を立てていくようになり、そこでも色んな〝他人の恋愛〟を見聞きし、時に仲介者になり、更にまれに当事者になり、日々を過ごしていきます。この、〝贋〟や〝他人の〟という中に、読み手のガードは外されて構えない気持ちで読み進めることができるのですが、どうもそれらの言葉の中にすらのっぴきならない切実さが見えてくる。そして、確かにフィクションを読んでいるはずなのに、何か私たちの生きる現実と何ら変わらない、重たく、どうしようもない世界で彼らがもがいているのが肌で感じられるのです。

七瀬は容姿にも頭脳にも度胸にも恵まれた男性として描かれます。それが嫌味でなく、それどころか如何ともしがたい空虚を抱えていることが垣間見え、そこに痛切に共鳴してしまいました。途中、彼が経験する別離の際に自らの本業を思い出す場面、そして最後を締める言葉には、ガツンと脳天を打たれたような衝撃を受けました。昔彼が師事した日舞の先生から「あなたがまっすぐ育ってくれて、よかった」と言われる場面があるのですが、正しくその通りで、本当に奇跡のようなバランスで成り立っているのが七瀬耕一なのだと思います。そんな彼が、我が道を往きながら他人と関わり合い、またときに世話を焼いている姿は、とても貴く感じるものでした。

七瀬以外の人物も、倦んだり、投げやりになったりしながら、それぞれの道を歩いていきます。彼らの生きざまに加え、作中を彩る細やかな伝統文芸の知識や描写もなんとも味わい深いです。なんと驚いたことに無料配布（またWEBでも公開中！）ですので、ぜひ一度お読みください！

——世津路　章

推薦文

「にせものとからっぽ」

「贋オカマと他人の恋愛」。そっけないタイトルに思えますが、これ以上要約しようがないくらい的確な要約です。

贋オカマ、とは主人公の七瀬耕一。容姿端麗、頭脳明晰、日舞を嗜んでいるからきっと身体を動かすことも得意。そして古典芸能に明るい（ぶっちゃければおたく）。何不自由なく育てられた彼がひょんなことから「没落貴族」となり、大学院進学の学費を稼ぐべく「贋オカマ」としてオカマバーで働きはじめます。

他人の恋愛、とは、七瀬の友人である周平とその恋人・克巳の恋愛模様、そして目の前を通り過ぎるばかりだった誰かのこと。あの時ああしていれば。この時こんなふうに言っていれば。読みつつ抱く「たられば」はまるで我が身を振り返るような近さで迫ってきます。それは、七瀬という青年の人生の一部を体験することに他なりません。私は東京の景色を知りませんが、細やかなディテール描写から街の様子が、登場人物の人となりが立ち上がってくるようです。

語られるのは、いい意味でも悪い意味でも浮世離れした七瀬だからこそ、客観性を最後まで保ちつつ語り得たできごとです。「BLをファンタジーだと信じているなら、この本は開かない方がいいかもしれない」という一文通り、作中で描かれる一連のできごとは、フィクションと銘打たれてはいますが心をぐいぐい抉ってくるような重さを持っています。すっぱり切れるのではなく、錆びた釘が刺さるような痛みを伴います。ここで描かれることはたぶん、現実にも起こりうる、起こっていることなのだと思うし、それでも最後まで読者を引っ張り、全力で書き記された物語を体験したあとの余韻、うわあ大変なもの読んじゃったぞ、という衝撃に酔うことができる、凄い小説です。推薦文で「凄い」なんて書くべきではないのだろうけれど、凄い。読み終わって言葉を見失う、あの頼りなさや喪失感を、そしてこの小説を読めた幸福を、ぜひ味わっていただきたいです。

——凪野基

推薦文

「……人生は苦しくそう単純ではないのだが或いはただ美しいのかもしれず……」

初めタイトルが奇抜で何のことやらさっぱりわからなかったのですが（笑）読み終えてみるとああ、確かにその通りの小説だと納得してくすっと笑ってしまう。

出だしから引っ張り込まれました。そして、喜劇っぽいのに悲劇の予感を初めから醸し出していて、わくわくしながら読み進めつつどこかで不安を感じてもいました。登場人物は皆個性的でそれぞれ魅力的で。だから関係性も単純明快はっきりしてるのかと思えばこの話実はものすごく複雑な人間関係で最後の最後までびっくりさせられました。

主人公は幼少より日舞をしていたマザコンの美男子で、頭を使って上手く生きぬいてるように見せつつ生きることに不器用、そして律儀で真面目過ぎる人だと思う。と、思ったら案外気障で、気障というかあんまりこういう言葉にぴんときたことがなくてそういう表現をしたこともなく正しい使い方かわからないけれど、粋な振る舞いをさらっとしてしまう。びっくりする。絵にキスするシーンとか。それでもやっぱり自分の適性を真剣に考えた上で何故かオカマバーでバイトをしてしまうなんていう突拍子もないことする程不器用で、何故かそれをうまくこなしちゃう程器用でもあって、その上でものすごく純粋な人。彼の「サッちゃん。」の一言にぐっときた。寂しくもあり逞しくもある。孤独でもあり深い友情で人と繋がってもいる。面白い人。

どうも曖昧ではっきりしないまま生きていかざるを得ない終わった話とか、心のどこかにもやもや残ったまま必ずしも嫌な存在ではない人とか事とか、この小説ではそういうものに単純な答えを出さないところにも魅力を感じました。お話の世界観とお別れする寂しさ、読み終わるのがもったいないような感覚はこれまでたくさん感じてきたことが有るけれど、この本に関しては登場人物たちの逞しさのせいか彼らをとても信頼してしまっていて、このまま簡単には完結せず世界は続いていくのだと思わされ、愛着を感じながら私も淡白に自分の日常に帰れる。読後感が全く寂しくなく、その感覚にも面白さを感じました。だけども本当に出会えてよかった小説でした。

それにしても伝統芸能の世界、古典文学の世界、着物の美しさとか、作者様の思い入れや造詣の深さが伝わってくる作品で、江戸文化等まったく知識が無かった私ですがとても魅力的に感じ、能なども一度見てみたいと思いました。本当面白かったです。

——なのり

眠れぬ夜のおともに……したらますます眠れなくなる

「おなかがすいて眠れぬ夜に」

著者	俺のグルメ FESTIVAL アンソロジー
価格	400 円
ジャンル	大衆小説
ブース	委託販売

「これが！　俺の！　グルメだ！」
その想いを詰め込んだ掌編がぎゅっと詰め込まれています。
王道直球勝負の食描写重視系から、
思わず作ってみたくなるレシピつきのお話、
様々な絆を繋ぐグルメ、こだわりの一品、
未知の世界へいざなう一皿など、
バラエティ豊かな物語が揃い、必ずしやあなたのお腹を満たします。

読みやすいよう１作品１ページの紙面構成としました。
またシェフの方々の作品紹介も合わせて掲載し、
読者さんと書き手さんを結ぶガイドとしてもお読み頂けます。

手に馴染む B6 版に角丸加工を施し、末永くお読み頂ける１冊を目指しました。
眠れぬ夜の枕元に、ぜひ！

推薦文

「眠れぬ夜のおともに……したらますます眠れなくなるとのお言葉、
多数↑頂いております！（CV：ジャパ〇ット高田）」

ボブ「今日紹介するのは噂のグルメアンソロ『おなかがすいて眠れぬ夜に』さ！」
ジェシー「まぁボブ素敵！　３００字しばりで『これが！　俺の！　グルメだ！』というテーマのもと、４８名の執筆陣が腕を奮ったのね！」
ボブ「その通り！　これだけあるとネタがかぶると思うだろう？　しかしノープロブレム！　４８通りのバラッバラなグルメが揃っているから安心してくれ！」
ジェシー「なんてことなの！　飽きることなく最後まで読めちゃいそうね！」
ボブ「しかもそれだけじゃないのさ！　直球ストレート勝負の美食話に、思わずこちらが作ってみたくなるレシピ付掌編、グルメでつながる様々な絆を描いた作品に、おこだわりに特化した一品、更には未知の味覚を追求した挑戦作まで、本当に幅広いジャンルの物語が揃っているのさ！」
ジェシー「これは圧巻ね！『えっ、これ主催のいないとこでみんな打合せしてない？？？』って疑心暗鬼に陥ったのも頷けるわ！　でもボブ、３００字って短くてすぐ読み終わっちゃわないか心配だわ」
ボブ「心配☆無用さ、ジェシー！　短いからこそ、執筆陣……シェフたちの縦横無尽な技巧が遺憾なく発揮されているのさ！　試しに読んでごらん！」
ジェシー「……ああ、本当ね！　字数以上の世界観を内包した物語の数々、無限にもぐもぐ咀嚼していられる気分よ！　これは……文芸界の食の博覧会やー！」
ボブ「さあ、そんなグルメアンソロを今回は委託参加でお届け！」
ジェシー「尼崎に初上陸よ！　眠れぬ夜のおともに如何かしら！　お問い合わせは今すぐ……」
ボブ「オーサカゼローロクー♪」
ジェシー「せやから尼崎やゆうてんねん！（ジィッ）」
ボブ＆ジェシー「「どうも！　ありがとうございましたー！」」

――世津路　章

推薦文

「お腹に直撃!? 48名のシェフがお届けする、垂涎のグルメアンソロ」

48名のシェフ（作家様）による、グルメをテーマにしたアンソロジー。ガッツリメニューあり、サッパリメニューあり、甘～いスイーツありの様々なグルメなお話が、300字小説という300字以内で書かれた短い小説で綴られてます。

内容も、一人でしっかり満喫、作り作られ皆で仲良く、故人を思ってしんみりと、遠い未来の世界で、と様々。レシピを書いたお話もあり、そのまま作れるグルメもあります。

さらりと読めるのに、『食べる』という三大欲求の一つ通しているせいか、様々な人間関係や、背景が透けて見えてくるのも面白く、実は深いストーリーばかりです。

ただ、一つ難点を言うなら、本の題名のとおり、読むと食欲中枢を刺激されて、おなかがすいて、眠れなくなるかも。ダイエット中の方は要注意。

表紙のイラストもとても可愛い、良質上質な飯テロ爆弾本です。

――いぐあな

推薦文

「まさに、満漢全席！」

たかが300字、されど300字。

長いようで短い、足りないようで十分な、300字SSの魅力とグルメの誘惑がぎゅっと詰まった掌編アンソロジーです。

ド直球、食欲にガツンと訴えかける作品、爆発しろの呪いも何のその、甘甘の山ボールを思わせるスイ～ツ作品、思い出の一戦、忘れられない味を描いた作品、幻の珍味を追求して取材班が南米へ飛んだ……チャレンジ作品（※イメージです）などなど、「グルメ」だけでなく、それにまつわる人間関係や思い出までが込められた、まさに満漢全席な一冊。

それぞれのシェフの妙技に加え、プロデューサーたる世津路さんのこだわりが随所に感じられるとっておき。

「おかわり！」したくなる作品がきっと見つかるはずです。

――凪野基

推薦文

昨年七月～九月という長期間、世津路さんがツイッターを通して企画してくださった『掌編俺のグルメ FES』の一環で発行された、グルメアンソロジー本です。「俺のグルメ」をテーマに、総勢48名の300字掌編を集めた内容になっています。表紙もすごくかわいいし、中も凝っていて、読みやすくレイアウトしてくれています。そして、たくさんの参加者のグルメストーリーが一度に堪能できる贅沢な本です。

300字小説って、最初は馴染みがなかったのですが、みなさんが書かれた作品が本当に多様で、すごく面白かったです。ただひたすらに美味しそうなもの、とある出来事や風景に溶け込んだ食べ物、SFジャンルでは生きるための「食」とか、「味覚」とか。普通の日常から宇宙規模まで。そんな幅広いグルメの世界を堪能させてもらえます。

この本を読んで、「食」は万人が共有できる普遍的で面白いテーマだなぁと実感しました。「食べ物が美味しい＝幸せ」はすべての人に共通しますもんね…！ これほど楽しく人と共有できるテーマってなかなかないかもしれません。しみじみするものから、ドキッとするもの、くすっと笑えるものまでさまざまな作品が載っています。自分はどんな食べ物が好きかな？と思いながら、ページをめくってみると、楽しいんじゃないかな～、と思います♪

――まりも

推薦文

「ちょこっと「つまみ食い」に最適」

どこから読んでも美味しい本。
食をテーマにこんなにもたくさんの表現と物語があるのだなあとワクワクします。
３００字小説なので、目にも優しく、胸やけならぬ、物語やけ（？）もしません。何か読みたいんだけど、ずっしり重めじゃない物語がつまみ食いしたいな～という時にピッタリ。
おまけに各方面で活躍する書き手さんが詰まっているので、代表さんの言葉通り「書き手と読み手を結ぶガイド」として本当に優秀です。

――服部匠

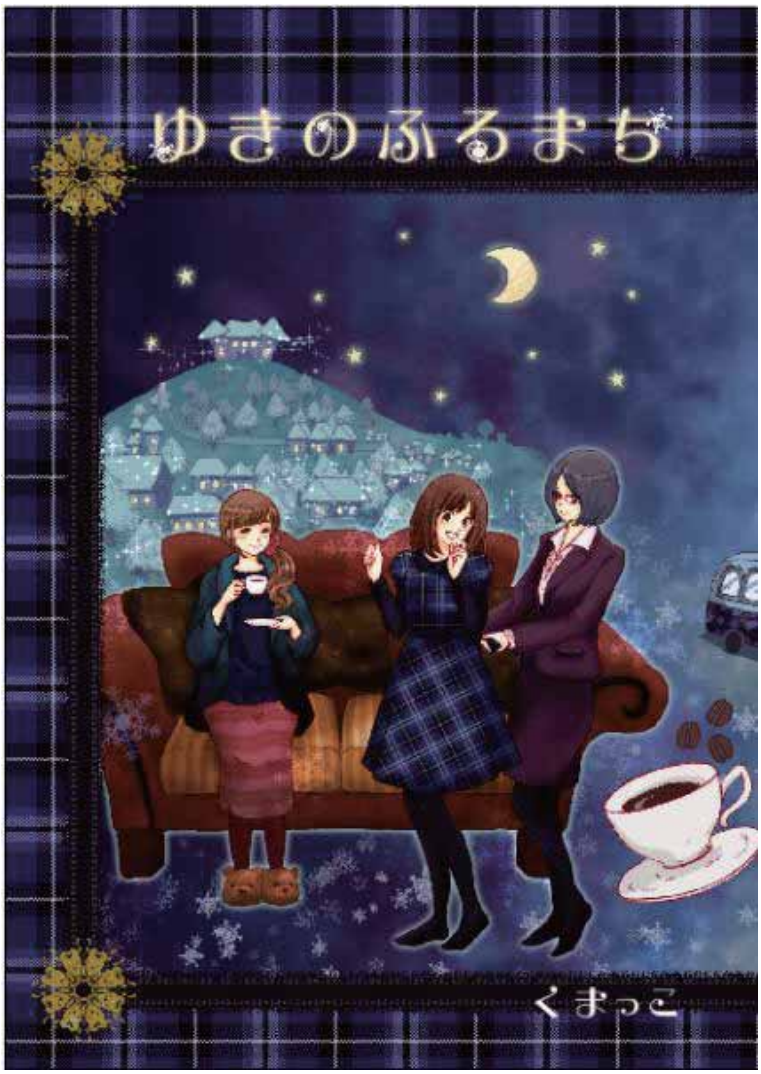
推薦文

「おいしさをかたちにする！」

かわいらしい手触りと装丁を開けば、
現代日本から魅惑の異国食、
過去から未来から異世界から宇宙まで、
たった４８人でどこまでいくの？という食にまつわるエピソード４８話。
想像と味覚を刺激してあなたを空腹にする４８食を召し上がれ。

コンビニに走れば体重増加だけですむケースもありますが
どうにもならない・どこにも売ってない食材も扱ってるので夜中の摂取はご注意！

――まるた曜子



そうだね、生きていくことはかなしいね。

「ゆきのふるまち」

著者	くまっこ
価格	450円
ジャンル	ファンタジー
ブース	白昼社セレクト

『バスはわたしと蒼子ちゃんだけを乗せて、しんしんと雪の重なる夜の坂を登ってゆきます。ギシリギシリと雪を鳴らしながら。』

舞台は年中雪の降りしきる町、雪町。庶民は町外に出ることのできない、完結された町。
町をめぐるバスの終点「丘の上のお屋敷」でともに暮らす三人の女の子たちが、ときに悲しみに出会いながら、誰かの優しさに触れながら、自分に向き合ったり、誰かに頼ってみたり、何かを信じたり、何かに気付いたり。
ひたむきに、前を向いて、日々を暮らしてゆく物語。

パティシエを目指しながら、喫茶店で働く結衣。
幼馴染みに寄せる想いに悩む、ショップ店員の蒼子。
隣町が見渡せるお屋敷の持ち主、香苗。

――彼女たちの物語がそれぞれ、オムニバスで綴られている一冊です。

推薦文

「彼女たちを抱きしめたい」

あたたかな紺色のベルベットで仕立てられた、ワンピースみたいな装幀だ。角が丸く、掌にのる大きさ、頁に控えめに飾られたレース模様がそのまま、その上等なスカートの裾飾り。「ゆきのふるまち」にふさわしい、からだを包む綺麗なやさしいワンピース。そんな印象の文庫本。

けれどもひとたび読み始めてみると、登場人物たちはそのお菓子のような世界だけにとどまっているわけではないと知る。そうだね、生きていくことはかなしいね。作者の文章はそのものがたりを、丁寧に丁寧に、綴ってゆく。ただただスイートでない世界でも、心が消えてしまうことは無い。仕立ての良いワンピースに包まれていた、透明な涙。それを包む著者の穏やかな筆致。

そうだ、やさしさもやわらかさも、かなしみと共に描かれたとき、なおさら尊く、いとおしくなる。彼女たちを大切に抱きしめてあげたい。

――泉由良

推薦文

「心のかけらを手にするような」

出ることが難しい自分の町。
見えるけれども行けない隣の町。
町の話であると同時に「自分」と「他者」の暗喩のようにも感じられる。
空想の中でしかたどり着けない他者。
そこでようやく知ることになる日常の美しさ。
読んでいるうちに自然と目が潤む。
装丁・フォント・本文ページの装飾など、本のデザイン全てがこの物語のために繊細に選ばれており、読み直すたび、心のかけらを手にするような気持ちになる。

――柳屋文芸堂

推薦文

独特のルールのある「町」を舞台に女の子3人の和やかな友情がかわいらしく、それだけにエンドがつらい。
あったかくて切ない。優しい嘘は優しくない……。
装丁の統一感とか、ふわふわで内容のイメージどおりで、凝ってるし丁寧だなあ～と感心します。
かわいいなあもう。

――まるた曜子

推薦文

まず、最初に受ける印象は「めっちゃ可愛い～！」です。くみた柑さまの綺麗なイラストと、ブルーチェック柄の表紙が素敵です。しかも、最後まで読めば分かるのですが、このデザインにもちゃんと意味があったりするのがまた心憎い演出なのです……！　中表紙と奥付に描かれていた観覧車の絵も大好きです。あと、本文ページを飾るレース柄も…！　知っていたつもりではいましたが、くまっこさんのデザイン力の高さに、改めて惚れ惚れさせられる、クオリティの高い美しい本になってます。しかもフォントも文章も、いつものことながらとても読みやすいのです。
…というわけで、内容についてなのですが。まずは作品の舞台となる、雪町、という町の持つ優しい雰囲気に癒されます。出てくるお店やおうちの暖かな雰囲気、そこに住む人たちの優しい思いやりの心が、ささくれ立った現代人（＝私）の心に超滲み入るのであります…！　閉ざされた町のなかをゆっくりと流れる時間に浸る心地よさ。これってとても大事ポイントですよっみなさん…！　渡る世間にささくれ立っているのは私だけではないはずですから！
この作品は5つの掌編で構成されています。主に三人の女の子と一人の男性が登場するのですが、それぞれのお話を読み進めるうちに彼らの個人的事情が少しずつ分かるようになっています。
さっき書いたように、全体的に優しくゆるりとした雰囲気のお話ではあるのですが、後半に行くにつれ、この人たちの抱えているものが色々と明らかになってきて、最後で綺麗にまとまる構成が素晴らしいです…；
5つのお話であると同時に、ひとつの大きなお話でもあるように作られているところがすごく気持ちよかったです。
悲しいような、でも、優しく温かく希望を感じるラストが秀逸でした。ささくれて汚れた現代人（＝私ｗ）の心も、洗われるようでありました…！

――まりも

推薦文

「優しさの雪が降る」

お話はもちろん、表紙イラストや装丁、すべてを含めて一つの物語であり本であり、余すところなく楽しめるようになっている作品で、とにかく大好きです。

辛いことや悲しいことがあっても、むしろあったからこそ、人は優しくなれることがある。誰かの幸せを願うことがある。自分がつかめなかったものを、誰かに託すことがある。自分が辛かったからこそ、誰かには、幸せになってもらいたいと願うことがあるのだと、そう感じた物語。

——なな

推薦文

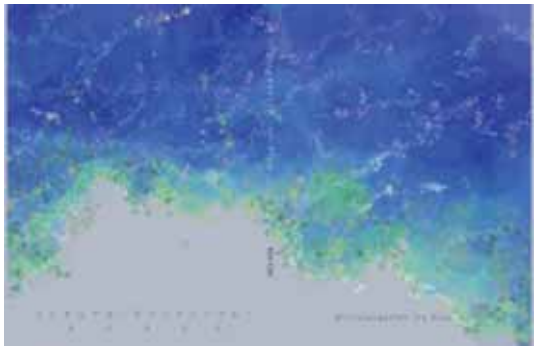
「まるで手帳のようなデザイン本で、読み手をカラフルな世界に連れていってくれるようなストーリー」

題名の通りシンシンと降る冬の中のひっそりとした世界観で、3人の女の子がそれぞれの人生を見つけ歩いてゆく話です。

独特の文体が、乙女の心をくすぐる作品へと変化させている気がします。

ぜひ一度ご賞味あれ（笑）

——試し読み会感想



blue 三部作

「ミニチュアガーデン・イン・ブルー」
「夏火」
「はばたく魚と海の果て」

著者	キリチヒロ
価格	600 円 /800 円 /1000 円
ジャンル	JUNE
ブース	白昼社セレクト

第一部「ミニチュアガーデン・イン・ブルー」
高校１年生の春から初夏にかけて。
人間同士の大きな時間の流れの中で、
ふたりだけの箱庭はゆっくり、しっかり出来上がっていく。

第二部「夏火」
変わらないままでいたい僕、変わっていくことを恐れる君。武器もなく。
今となっては形もなくなってしまった少女の、心の限りの願い事。
きらきら光る。夜。この夜。この夜空。

第三部「はばたく魚と海の果て」
センター試験までのカウントダウンが始まる教室。
そして同時に誰かの死がなすすべもなく彼らへと近づいてくる。
家族とは何か、自分とは何か、そして過去とは、何だったのか。
彼らの未来へはばたいていく春へ向けて　三部作、完結。

推薦文

「深い青で綴られる生と死と、好き」

ブルー三部作とは『ミニチュアガーデン・イン・ブルー』『夏火』『はばたく魚と海の果て』の三冊で構成されるシリーズである。

男子高校生三人の、高校入学から卒業までが描かれた、純文学でジュブナイルでＢＬなお話。

そうやってカテゴライズしたけれども、そんな三言くらいでは表現できないのがこのブルー三部作だ。

海のある、狭い町での話で、世界は極めて狭い。高校時代なんてそんなものだし、当たり前に思うかもしれない。けれど、この物語はスノードームのように閉ざされた空間に粘度のある液体でどこにも気泡なんてないほどの密度がある。

本当は、逃げ場なんて探せばいくらでもあるのに、それを許さない。

どうにもならないことは、往々にしてあって。分かってはいるけれど、涙を止められない。ああ、もう、なんで？　と無意味なことを思うこともある。

今まで読んできたものは、本当に物語でしかなかったのではないかとすら思った。それが悪いわけでは断じてない。読み手は、それを求めているのだから。だから、そう、リアルな理不尽さは、物語の甘さをすべて排除する。ただ、凄惨なまでに青くて綺麗だ。

ジュブナイルにして「死」と「生きること」がどんなことか、刺すような痛みで見せてくる。

ＢＬはこのテーマの中でおまけのようなものかもしれない。けれども、なくてはならないものであるのも確かで「好き」という言葉に支えられている。そして、耽美的に綺麗でもある。

とにかく海の青のように綺麗としか、私の貧相な語彙力では言い表せないのが無念である。

ただただずっと、海の深いところを歩いているような暗さが続くような物語だけれども、いつの間にか、その冷たい海に引きずり込まれるように飲み込まれて、夢中で地上を探している、そんな感覚を覚える。地上を見つけて水面に顔を出した時のような最後は清々しい。物語に終わりなんてない。地上を見つけても、そこからまた歩き出す。そんな、新しく扉が開くような、最後を是非見てもらいたい。

きっと、青ではない表紙を改めて見つめることだろうと思う。

――真乃晴花

第一部・推薦文

「よじれた思いを差し出し合うこと、青春ってそうだった」

高校生の男の子たちの物語。BLといえばそうなのかもしれませんが、かれらがかれらの切実によって求め合うさまが丁寧に描かれており、物語の要請というよりかれらのいのちの帰結としてそうなったという感じ。三人は互いが互いの思いを受け取りあって、生きるための痛みを差し出しあって、戦うことへ向かっていく。三部作とのこと、ここから先を読むのがとても楽しみになる魅力的な人物造形と語りです。

主人公を取り巻く人間関係は、狭い町ゆえか人物の因縁といえるのか、濃く、閉じています。愛憎の絡まり合いはある種、ギリシャ神話的ともいえるかも。しかし登場人物たちはみなきちんと語ろうとし、関わり合おうとします。主人公の親世代たちはそれぞれ方法や発露のしかたは異なるものの、愛情深いと感じました。それこそが傷や痛みを生むのかもしれないけれど、しかし根底にあるのは人を愛したい愛されたいという願い／祈りでしょう。

丁寧に読者を導いてくれる語りは、痛みをともないつつもみずみずしく爽やかです。主人公の智尋は思慮深くナイーブな語り手で、ちょっとした気づきや思いのよじれの描写が巧みです。

読みながら深い水の中を潜り、自分の呼吸についても自覚的にならざるを得ないような、身体に響く読書体験でした。

——オカワダアキナ

第一部・推薦文

「完璧な箱庭」

十代の青年にとって、海は、外界に開かれているもののはずなのに、彼らにとっては、そうではない。むしろ、悲劇と行き止まりの象徴——。

登場人物同士の関係が非常に近く、そして、閉じている。タイトル通り、青い箱庭の世界だ。その調和は美しいが、まるで、世界に他の人間が存在していないかのようだ。

本当なら、彼らのような人間関係は、都会ならともかく、田舎町ではいろいろ取り沙汰されるだろうし、平然と地元の高校に、クラスメートとして通えるようなものでもないだろう。

それでも最後まで読ませてしまうのは、ひとえに書き方のうまさだ。少しずつ明らかになっていく謎。ゆきつもどりつする時間。それに一本の糸を通す、アレックスという犬の存在。学生の時点でこれだけ書ければ、文芸誌の一次予選を通過するのはたやすいと思う。読者が文芸誌に期待するであろうものは、一通りそろっているからだ。おそらく二次を通過しなかったのは、これは私の勝手な想像だけれども、終盤の処理だと思う。キリチヒロという作者でしか描けない、もう一山をもってきていれば、この物語は続きは要らない。にもかかわらず、私たちは続きが読みたくなるはず。

あらゆる意味で、ほんとうにうまいし、書ける人だと思う。卒論が優秀賞？　これだけ書ければ当たり前！　だからこそ、お洒落な感じでまとまらないで、もっと先へ進んで欲しい。そう思える一冊でした。

——鳴原あきら

第一部・推薦文

「青い箱庭から解放されたとして、どこへ行くのだろう」

海というひとの力が及ばない存在のすぐそばで生きる、子どもと大人たちの心の物語。

子どもにはこころがある。誰かを憎むことができ殺意を抱くことがあり思いやり愛することができる。彼らには彼らの世界があり、それは決して何かと比較して劣るものではなく、その価値は大人にははかれない。大人に簡単に壊されてしまう彼らの世界は、けれど決して弱いものでもない。親は親であるまえにひとりの人間で、不完全な部分がありエゴがありときにズルく、ときに子どもを利用することがあり、ときに子どもにつらく当たることもある、でも、それでも子どもを愛している。そんなことを考えさせられた。

キリさんの作品は読みやすい。たぶん大抵の人が読みやすいというと思う。でもキリさんの作品の魅力は読みやすさではないとも思う。この続編の『夏火』の解説（ヒラサキユカさん）に書かれている「人が感じていること、あるいは感じていてもそれに気がつかないことを素早く正確に言語化する能力に長けている～（中略）～感情を掬い上げて言葉に閉じ込める才能は特筆すべきものだと思う」が一番しっくりきた。才能なのかはわからないが、彼女の文章の魅力は確かにそこだろう。掬い上げた感情を、彼女の中で濾過して彼女だけの言葉に、文章にして、それを誰にでもわかりやすく表現している。

最後に、私がこの小説を読んで一番感じたのは「救い」だと思う。たぶんこれは、誰かのための救いの物語なのではないだろうか。子どもたちのための、あるいは大人たちのための、どうしようもなかった、どうすることもできなかった何かへの。

——なな

第二部・推薦文

「苦しさの先にある光を思う」

『ミニチュアガーデン・イン・ブルー』の続編。だけれど、雰囲気が異なる。青い箱庭の中で育まれていた幻想的な雰囲気が薄れ、現実が押し寄せてくる。

高校生活、新しい人間関係、広がっていく世界、閉じたままではいられない自分。それは成長していくことかもしれない。良い変化、と呼べるのかもしれない。けれど、自ら変化を望んでも、変化を強いられても、受け入れても、苦しい。好きな人のためになることをしたい、手を差し伸べたい、その思いを汲みとりたい、でも、そうなれない。自分のエゴに気付きながらも振り回される。感情ばかりが先走って言葉が行き詰まる。自分自身ですら、自分の気持ちがわからない、本当の気持ちがわからない。そんな苦しみを味わいながら、経験しながら、成長していく時間。そして、そんな現実と隣合わせで、過去が揺らめく。過去から逃れられないまま、振り回されながら、それでも、自分にかけられた願いのかけらを手にしていく。いろんな苦しさを乗り越えて、生きていく。未来なんて知らずに、ただひたすら、その時その時の精一杯で、今を生きている。間違えたかもしれない、傷つけたかもしれない、どうにも取り返しがつかないかもしれない、それらを放り出すことなんてできずに、ただ抱えて、抱え続けて、必死にあがく。

とても苦しい物語だったと思う。それだけに、苦しさを乗り越えた先にある輝きにほっとする。終盤、苦しさを乗り越えた少年たちに明るさが戻ることが嬉しかった。『夏火』では、物語の中のいろんなことが、苦しさが、すべて解決するわけではない。けれど、彼らは彼らなりに、成長する。

生きていることを、命があることを、名前があることを、そこに込められた願いを、いろんなものを抱きしめたまま、物語は続く。

——なな

第三部・推薦文

「愛より深い海をみた」

『ミニチュアガーデン・イン・ブルー』『夏火』の続きであり最後。最初の『ミニチュアガーデン・イン・ブルー』の雰囲気はほとんど残っていない。『夏火』の、現実が押し寄せてきた感覚が、そのまま、より明確になって、痛みとして迫ってくる。

高校三年生／進路／受験／別れ

記憶の扉をすり抜けて入り込んでくるキーワード。こんなことが自分にもあった、そんな風に思い浮かべる前に、涙が落ちてくる。

『ミニチュアガーデン・イン・ブルー』が過去の物語で、『夏火』が成長の物語だったとするなら、『はばたく魚と海の果て』は未来へ向かう物語だ。未来へ向かうために、痛みに耐える物語。『夏火』の苦しさは、何に向かうのか、どこへ向かうのかわからない苦しさだったように思う。『はばたく魚と海の果て』は、先が見えている。受験という、そして、別れという、確かな未来へ向かって、その未来へ向かうために痛みに耐えている。詰め込まれていく毎日。一日、一時間、一分一秒、なくなっていく時間に、削り取られていく。渦中の人間も、それを見守る人間も、痛い。そうして、耐えて耐えて耐え切った先にあるものは、なんだろう。慣れ親しんだ箱庭から解放されて、どこへ行くのだろう。

ここまで、『はばたく魚と海の果て』を最後まで読み終えて、三部作『blue』について思った。

高校生の少年たち／高校生を終えて大人になった親たち／高校生を終えることなく海に消えた少女

高校生は、子どもから大人へと向かう時期、大人になりたい時期、子どもでいられなくなる時期。『blue』のことを考えると、どうしても涙腺が緩む。この感想文を書きながら、何回泣いたかしれない。私の高校生は、どう転んでも間違ってもこんな青春っぽい青春ではなかったので共感などとは痴がましくていえない。それでも、痛みがある。刺すような痛みだったり、柔らかい痛みだったり、鈍痛だったり。それは物語がどうのこうのではなくて、その中に散りばめられた感情が、記憶を刺激するのだと思う。そういう、作家なのだ。だから、たくさんの人に、読んで欲しいと思う。読んだ人の人生の中に、痛みがあったことを知ってほしい。そして、その痛みを、許されてほしい。

——なな

第一部・推薦文

「生きることと死ぬこと、僕と世界、愛し合うこと」

「ブルー三部作」第一作。小説すばる一次選考通過作、と紹介すると分かりやすいかもしれない。小説すばるは大衆小説の文芸誌である。（一方、「小説」が付かない方のすばるは、純文学だ）

文章は読みやすく、過度ではない装飾表現が心地よく、魅力的なモチーフも豊富で、読んでいて楽しい。

智尋と陸と椎名、三人の男子高校生が、海沿いの町で過ごす日々を描いた小説。三部作の一作目ということで、彼らは高校一年生。小説の舞台は時々彼らが出会った頃——まだ幼かった頃に巻き戻され、それぞれの視点を紡ぎ合わせるように物語が構成されてゆく。

ジャンルとしてはBLということになっているが、性的表現はあくまで予感させる程度に留められており、BLを要素のひとつとした純愛小説だと思っている。智尋と陸の、ほんのささやかな愛し合い。

アレックスと、早苗。アレックスは三人が飼うことを決めた犬で、物語の中では生の象徴として描かれていると思う。早苗は陸の母で、物語には登場しない。海に姿を消したからだ。死の象徴とでも云えるだろうか。

物語は、生と死の間を揺れ動く。ブルー三部作は「戦い」の小説だと思っている。「ミニチュアガーデン・イン・ブルー」は、その序章。生と死や、愛することの、生々しい本当の痛みを知らなかった頃の、青い箱庭の中の美しい話。

しかし三部作を全て読み終えた後、振り返って見てほしい。例えば陸のお父さんの明貴さんが言う「今このときの俺はお前を愛してたって陸に伝えてくれ」がどれだけの切実さを秘めた言葉であるかを。

——にゃんしー

第二部・推薦文

「生きることと死ぬこと、僕と世界、愛し合うこと」

「ブルー三部作」第二作。第一作「ミニチュアガーデン・イン・ブルー」の推薦文で「これは戦いの序章」と書いた。第二作「夏火」は、戦いだ。

三部作の二作目というのは難しいと思う。起承転結でいえば承と転。それ単体で物語を成り立たせようと思うとき、書くことがないのだ。これはそのまま、高校二年生という中途半端な時期にも当てはまるかもしれい。何処にも行けずに、ただ焼けつくような衝動だけが身体の中を蠢く。

「夏火」は、智尋と陸と椎名と、新たに登場する昴が高校二年生を過ごす物語である。誰しもが必死だった。必死であるが故に自己ばかりが肥大し、相手を傷つける。焦り、迷い、自分を責める。ミニチュアガーデンではもっと簡単でよかった。何処で間違ったのだろう。犬のアレックスがいなくなったから？　陸が早苗に似てくるから？　分からない、ただもがくように、戦う。

三部作の中で、一番身を切るような切実さが表現に出た小説だと思う。あるいは、小説ではないのかもしれない。ただ魂の発露のようなものが、夏火であり、僕は愛おしいと思う。

——にゃんしー

第三部・推薦文

「生きることと死ぬこと、僕と世界、愛し合うこと」

「ブルー三部作」第三作、即ち完結編。第一作は大衆小説寄りだったが、第三作は純文学寄りだと思う。それとは関係なく、三部作の中でこれが一番好き。

智尋と陸と椎名と、二部で登場した昴が高校三年生を過ごす物語。高校三年生、即ち、将来を選び取る時期だ。四人の男子高校生たちは、それぞれが等身大の悩みを抱え、僕たちがそうしてきたようにそれぞれの進路を選んでいく。

僕たちがそうしてきたように——？

三部作の中で、一番手の届くところにある物語だと思う。僕たちも、高校三年生だった。今振り返れば、あの頃悩んでいたことなんてちっぽけなのかもしれない。でもあの時は、それが全てだった。

いま高校生である人に、この物語を読んでほしいと思う。智尋に、陸に、椎名に、昴に、重ねて読んでほしいと思う。それと同じくらいの強さで、あの頃高校生だった人に、この物語を読んでほしいと思う。進路を選び取るその岐路で振り返り、死にゆく家族に「生きてよ」と言える陸のどうしようもない強さを、感じてほしいと思う。

ブルー三部作は、智尋と陸が愛し合うBLだ。完結編の最後、二人は美しい風景の中に消える。でも陸を一番愛していたのは、父である明貴さんなんじゃないか。物語の中で一番弱くだらしない明貴さんが大好きだ。

生と死と、自分と世界と、愛し合うことと、高校三年間を通して描き切ったブルー三部作。読み終えたときに美しい三つの表紙を見返し、ただ思うのは、「物語は終わらない」ということ。僕たちは智尋や、陸や、椎名や、昴と同じように、生きていく。明貴さんのように、人を愛していく。

——にゃんしー

愛情を咀嚼すること

「ほどけない体温」

著者	高梨　來
価格	900 円
ジャンル	JUNE
ブース	JUNE1「午前三時の猫」

創作 BL｜ 文庫｜ 314 頁 ｜ 900 円　｜　16/03/21

どうしてこんな風に、縫いつけられたみたいに無様なこの視線が逸らせないんだろう。

他者を遠ざけるように生きる大学四回生の桐島周はある日、知人を介した呑み会の席でいやに気さくな男、瀧谷忍と出会う。
忍から差し出される無遠慮な温もりにいつしか頑なな心を溶かされていくことに戸惑う周がある日、誰にも明かすつもりのなかった本音を打ち明けたことから、二人の関係は急速な変化を遂げる――

石油王（http://raixxx3am.blog.shinobi.jp/Entry/44/）でお馴染み？周くんと忍の出会い～ふたりだけの信頼関係が生まれるまでのお話。
コンプレックス持ちのツンデレ × うざめげない（リバあり）の大学生BL、商業 BL くらいのガッツリ目の R18 描写を含みます。

「ごはんをかこむ距離、愛情を咀嚼すること」

推薦文

丁寧に紡がれた関係性にあたたかな読後感を得たＢＬ。テンポの良い若者たちの会話のリズムに乗って、すいすい読み進めました。ゲイであるというコンプレックスを抱える周に対し、ぐいぐいと距離を縮める忍。忍くんのまっすぐな愛情、懐にするりと飛び込んでくるさまはとてもチャーミングです。

印象的だったのは食事のシーンです。ふたりは何度も食卓を囲みます。居酒屋で、アパートで。距離をはかりながら、秘密を打ち明けながら、少しずつ互いを受け入れ許すため、あるいはなんでもない朝や晩の営みとして。決して贅沢な食事ではないけれど、とても豊かな日々。とくに周と忍が初めていっしょに食べる朝ごはん、忍がごはんをミネストローネに浸して食べるシーンがとても好き。周が世界に引いていた一線「灰色のゼリー」を、忍がやすやすと越えてくる印象的な描写です。

周の、自分は同性愛者であるという苦悩、それゆえの周囲への不信感もとても丁寧に描かれています。自分のうちにこもりがちな周ですが、じつは周囲の人たちはみんなあたたかい。友だち、バイト先の同僚、忍の友だち海吏くんや春馬くん、きっと周の実家の家族だって（方向性や種類は異なるとしても、周にとっては受け入れがたいとしても、受け入れないことを選択するとしても）愛情深いのではないか。

手を伸ばせば、心を開けば、あたたかな世界が広がっている。ただそれを無理にこじ開けようとするのでなく、周が忍とのやりとりを通して徐々に獲得していくのが素敵だなあと思いました。焦らなくていい、だめでも格好悪くても失敗しながらでもいい、不完全な若者同士が寄り添って、自分たちのペースでふたりだけの〝生活〟を手に入れる。その小さな達成にほろりとしました。

あとがき、後日談的な章、ペーパー、そしてweb等、周と忍の物語は続いていきます。幸せなこともそうでないことも、二人で紡いでいくのでしょう。物語を見届けたあとにそれを味わえるというのは、読者として幸福です。作り手とキャラクターが相思相愛であることが伝わってくる、愛情にあふれた作品です。

――オカワダアキナ

推薦文

「鉄板100パーセント！」

商業BL文庫の棚にささっていたとしても、何の問題もない一冊。最初から最後まで過不足のない鉄板展開で、迷わず読ませる。綿密なプロットと構成がすけて見える。相当のスピードをもって書かれているのがわかる。熱量に圧倒される。「天才というのは、ほんとうにいるものだな」と思う。こなれた文章や造本についても、BLを書き始めてわずかな年数とは思われない。

ただ一つ、後悔していることといえば、「しまった、スピンオフから読んでしまった……！」周くんの葛藤がきっちり描かれているだけに、それを知らない状態で前作を読みたかったという、ワガママな気持ちに。

もし、ひとつだけ注文をつけるとすれば、「忍が周を好きになったきっかけって何なんだろう？」というところ。完全に周くんの視点で話が進んでいるので、忍の気持ちが読者にはわからない。その、わからないところがミソなわけですが、ちょっとした補足エピソードが欲しかった。ささいなことでいいのですが、忍にそこを、告白して欲しかった……。

ただ「タイプだから」「気になるから」というだけで、そこまで人を好きになるものかな？　周くんも、そこが疑問だったのではないのかな、という。人に一方的に踏み込まれるのって、けっこうなストレスなので、私が周くんでも、相手が忍でなくても、うっとおしいと思うんですよね。理由がわかると安心できるというか。

そこがあれば120パーセントの完成度だと思います。

というか、シリーズをさかのぼって、読まなければ……！

——鳴原あきら

推薦文

「ツンデレ好きにはたまらないシリアスBL」

とにかくキャラクターが魅力的！
会話のテンポもよくて、生き生きしてる。
最初はツンツンしてた周が
どんどん忍にハマっていくのがめっちゃツボでした。

——試し読み会感想

推薦文

「肉体を描くことで精神を表現する、深い愛情の物語」

他人に興味がない、と言いつつ他人をものすごく気にする男の子が主人公のBL。他人には理解してもらえない、と絶望しつつ孤独は選ばないので（割とよく大人数で集まってワイワイする場面がある）よりいっそう孤独感を味わうことになる。

自分をよりどころにして生きるのを「地べたを歩く」感覚とすれば、彼の毎日はまるで足のつかない水中をずっと泳いでいるような苦しさだ　この子はちゃんとどこかにたどり着けるのだろうかと心配しながら読み進めると、地べたを見つけないうちに恋に落ちてしまう。

心身ともに深く愛し合っているのに、自信がないからそこに確かにある愛を素直に受け止められない。共にいる喜びより失う恐怖がまさってしまう。当然相手にも不安は感染し、二人を隔てている何かを埋めようと、ひたすらに愛の言葉と行為を重ねてゆく。

一応ハッピーエンドにはなっているけれど、彼らがしっかりと地べたに立てたのかは分からない。ただ、二人の日々がこのまま続けば、いつの間にか地に足がつき、息苦しさや怖さも消えるのかもしれない。

……あんまり推薦文になってないな。困ったな。何度も読み返すくらい好きなんだけど。最初の一回は主人公の不安に引っ張られるように一気読みした。物語全体に満ちる不安感と、それがあるがゆえの性的高揚感。恋にとっても読書にとっても、不安は大事な要素なのだと学んだ。

相手や今ある幸福を信じられない辛さ。信じたい、信じてもらいたいと願い、ゆっくりと信じ合えるようになってゆく時の、あたたかい感触。

一人では生きていけない二人が、恋に溺れてゆく甘やかさを、存分に楽しんで欲しい。

——柳屋文芸堂

推薦文

「やわらかい気持ちになれるBL小説です」

キャラクターの描写がほんとうに達者な作品だと思います。みんな物語のなかの人だとは思えないほど生き生きしているんですよね。全体に流れる生活感だったり（とくにごはんの描写！）、心の動きがストーリーに密接にからんでくる造りだったりがその源だと思うのですが、とにかく、キャラに愛着が湧く！　そのぶんどっぷり肩入れしてしまう！　そんな特徴を持ったお話です。周くんが悩んでいればこっちもなんだか苦しくなってしまうし、忍くんとの関係が深まっていく過程は喜ばしい。優しすぎるがゆえに不器用でいじらしい周くんにほんとうに幸せになってほしいと思ったので、彼の前に現れた忍くんはわたしには天使に見えます。一見軽いんだけどほんとうは頭がよくて、ちょっぴりうざくてあざとい人たらしの天使です（こんなの好きにならないわけがない）（個人の意見です）。

とくに心を動かされたのは終盤、周くんが昔傷つけてしまった男性、タカミさんに対して独白する場面。詳しくは読んで確かめてほしいのでネタバレしないでおきますが、ちょっとしんみりさせられつつもあたたかなカタルシスが待っています。

痛みや苦しみはありつつも、優しい世界の物語です。キャラクターたちに寄り添ってその世界に浸りきったあとは、やわらかい気持ちになれるはず。

――まゆみ亜紀

「不足」を抱えた生存への挑戦

「ともだちの国」

著者	にゃんしー
価格	600円
ジャンル	純文学
ブース	企画本部

その国では異性同士の恋愛は結婚前には認められず
みんな同性との間で愛することを覚えていく。
その同性の恋愛相手は「ともだち」と呼ばれている。

推薦文

「足ることに挑む」

物語は、男女間の婚前の恋愛が認められず、同性間の関係（「ともだち」と呼ばれている）で、愛をおぼえてゆく新興宗教国家が舞台だ。主人公湖東全は男性の肉体を持っているが、「稚児」であるがゆえに男女が共に学ぶことのない国で、女子校舎に入れられる。ああこういう展開あるよなあ、とは思うのだ。だけど、その状況から容易に想像のつく、下品な展開には決してならない。

周りが少女ばかりでは男性の肉体を持っている稚児は「ともだち」をつくれない（稚児は「ともだち」を持ってはいけないのだけれど）。稚児が国のものに崇拝されていることも作用して、全と少女らの関係は「エス」と言ってもいい、きわめて禁欲的なものになる。

しかし、その立場はどこまでいっても「稚児」である。

女子校舎に入れられ、男性という肉体の性を剥奪され、みずから選び取ったパートナーである「ともだち」ではない同性と強制的に肉体関係を結ばねばならない全は少女たちよりもずっと弱く苦しい立場にいる。

男の肉体を持っている、ということが優位ではないのだ。

――この「国」では「不足」は美徳だ。足りていることよりも、足りていないことのほうがとうといという。

その「不足」を体現させられているのが「稚児」なのだ。語弊をおそれずにいうのならば、現代の社会においては一種「足りている」つまり社会的にさだめられた優越種としての男性が、その優越を剥奪された状態。

現代社会でかたられる「男性の肉体を持っている」ことが生存において絶対の優位でないことを物語ははっきりとえがきだす。

ここでは、主人公の全の「稚児」という点についてしか触れることはできなかったが、他の登場人物らもまた、様々な形で「不足」と向きあっている。

不足と折りあうことはない。だれもが苦しみ、どこへもいけず、とどまるようにして、不足と膠着しつづける。

世界に生じたとき、だれもにあらかじめ設定されている肉体という枷の重みと、それにあらがいつづけること。男であろうと女であろうと、わたしたちの肉体はどこかで「不足」であることを。

「不足」を抱えた生存への挑戦を、「ともだちの国」はかたる。

――孤伏澤つたゐ

推薦文

「とにかくすごかった。」

京都の町中の描写、これがまずとてもリアルだった。
出てくる土地の描写ひとつひとつがその土地の空気を醸し出していて、
ぐんぐんと引き込まれた。
とにかく、文章が上手い。
丁寧に淹れた日本茶みたいだった。

「飛鳥国」の設定なんかはファンタジーに思えるのだけど、
語り口も相まって、「神話」と呼ぶのが良いように思う。
（個人的には大江健三郎の作品の構成を思い起こした）
国を出てふたりだけの国を作るという行為、
そういう夢を持てるようになった全に幸あれ。

本当に濃密で、きちんと始まり閉じた、すごい一冊だった。
とりとめない文章だが、多くの人にすすめたい本であると、
最後に今一度お伝えしたい。

——試し読み会感想

推薦文

「選び取る、ということ」

日本と地続きにかつて存在していた架空の独立軍事国家をたったふたりで崩壊させ、そこから生き延びた男女二人の逃避行とその後の愛の軌跡——乱暴な言い方をしてしまえば、そういった切り口で語られる物語なのかもしれない。しかし、この物語は酷く淡々と冷静に、突き放されたかのような温度で進む。

「普通の暮らし」をしたいとしきりにいう全と昴——双子の兄妹だというが、容姿から話口調から似ても似つかない様子で、彼らの暮らしはごっこ遊びのようだ——不穏な気配を漂わせる日常の中で、全が記した「物語」の形をとって、彼らが国で過ごした時間は語られる。

人々を狂わせる肉欲、性行為を堅く取り締まることで自由と節度を守られた「幸せな国」現実の日本と隣り合わせに存在するという国のあり方、いびつさを抱えながらも国を愛し、そこでしか生きられない人たちの生き様を、徹底した緻密さで、読み手の世界に呼び起こすようにありありと描き出す。

主人公である湖東全は男の肉体を持ちながら稚児として僧侶に抱かれ、少女たちを脅かさない存在として、本来出入りを許されないはずの女子校舎で女生徒たちと勉学を学び、彼女らに当然のように慕われる。

誰もに等しく優しく、決して誰のことも傷つけない全は周囲の人間に愛されるが、他者を愛すること・欲望を抱くことを知らないまま、それらを当然のこととして受け入れてきた彼は誰のことも選ぼうとはしない。

そんな全が初めて「選んだ」相手は、同じようにこの国の歪みを「性行為」という形で引き受け、そんな国の成り立ちを自らと同じように憎んでいた巫女・幸妃昴だ。

選びとる、ということは（乱暴な言い方をしてしまえば）選ばなかった方を捨てることだ。憎み続けた国を、そこで共に過ごした、最期まで愛することの出来なかった人たちを——すべてを捨て、愛するたったひとりを選ぶ。それは、ずっと憎んでいた自身を受け入れ、愛することとも繋がっていた。新しい国をふたりで作ろうと決意をし、前を向こうとする二人の姿にはほんとうの意味での「愛すること」のひとつの答えが照らし出されているかのようだ。

全が国での出来事を「物語」として記したように、「物語」の形式を取ってしか描けない、魂の本質を射抜くような衝撃を残す一冊。

——高梨　來

推薦文

「小説に殴られる愉悦」

興奮が、ずっと最後までつづく。書き手の熱量に殴られる。圧倒的な物語の力に唸りました。

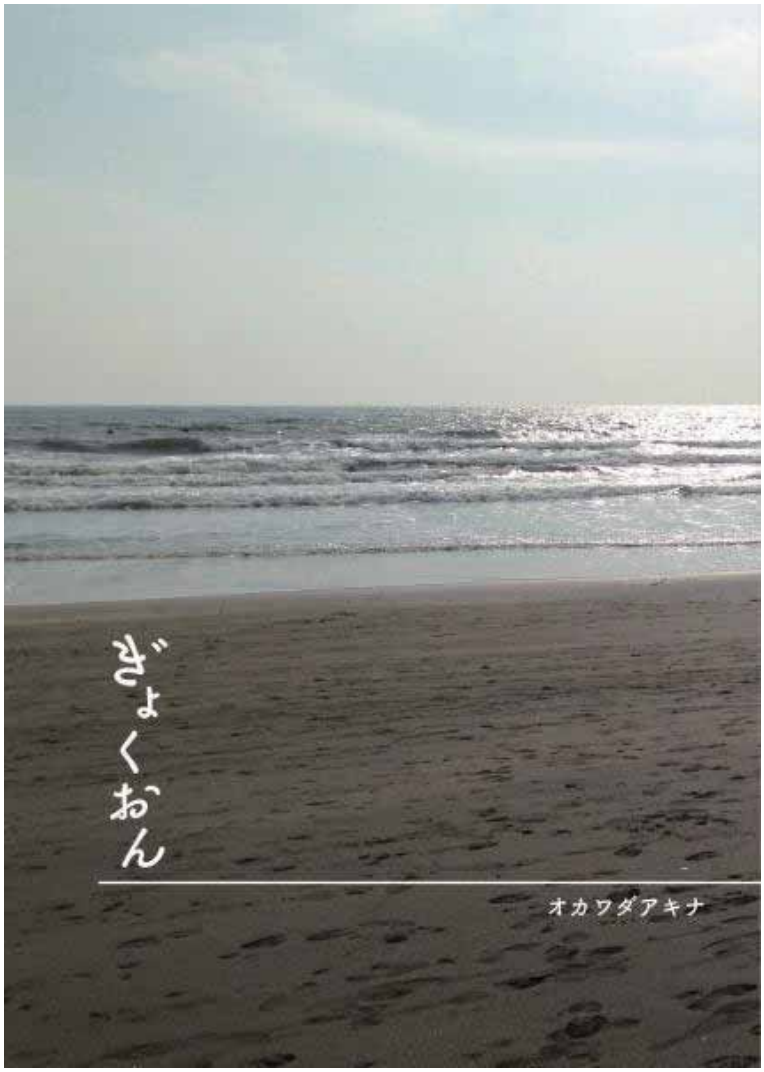
だなんて書くと、腰を据えて読まねば〳〵集中できる時間を作らねばだなんて構えてしまって、買ったものの積ん読になってしまいがちだけど、『ともだちの国』は一度読み始めたら最後まで走り抜けてしまう小説です。物語にパワーがあって、そこに浸らせてもらえるのがただただ恍惚。読んでよかった。

稚児としての役割を負い、男性でありながら女子校舎に入れられた全は、肉体もこころも去勢されたような状態。彼の語る「国」の描写は淡々としてさえいるけれど凄絶です。ずしんと響く。

架空の国「飛鳥国」や超能力の設定はある種ファンタジーなのだけれど、小説の根底に流れ、引っ張っていくのは、どこまでもシンプルな「愛」のありようでしょう。人を愛することとは？　自分を愛することとは？　人と人、手を取り合って生きて行くことって？　他者とかかわりあうことはどういう痛みが？　全と昴の選択、ふたりの駆け抜けた物語をぜひ見届けてほしいです。

あとこんなこと言っていいのかなんですけど、全と昴の関係性、暮らしぶりにどきどきときめいたのです。口調や語り口が好きです。熱と質量ある物語を飽きさせない、愛ある人物造形と描写が、物語にすっとのめり込ませてくれます。至芸。

——オカワダアキナ



小説の形をした演劇作品

「ぎょくおん」

著者	オカワダアキナ
価格	400円
ジャンル	大衆小説
ブース	大衆小説A「ザネリ」

よわいおとこがおっぱいをたらしたり嘔吐したりしながら、“平和”に至るまでの独白。

共依存めいた関係にあった姉から逃げるように東京を離れ、さびれた温泉街の旅館で住み込みの仕事を始めた男・郡司。
いっさいの連絡を絶ち一年になろうとしていたが、心は吹っ切れない。
また、常用している薬の副作用による乳汁分泌に悩まされ、消極的な死に憧れを見出していた。
ある日、姉とそっくりな少女と出会い、郡司はひどく混乱する。
「あれは姉の生霊だ。おれの戦争はまだ終わっていなかった」
妄想を克服しようとするうち、旅館の社長の姪・七美から秘密を打ち明けられたり、同僚・アランと関係したりする。
やがてゲンバクよろしく、郡司に降ってきた圧倒的な痛みとは、彼の到達する“玉音放送”とは――。

推薦文

「Das ist ganz genau ein Theater.」

映画と演劇の違いとは何だろう。あるいは、小説と戯曲の違いとは何だろう。

思うに、発信者と受容者というふたつの対極する立場に焦点を当てて考えるとき、発信者が受容者に対して作品を「差し出す」のか、もしくは発信者が受容者を作品に「引きずり込む」のかという違いではないだろうか。前者が映画・小説、そして後者が演劇・戯曲である。演劇は映画や小説と比べ、役者と観客の距離が近く、そしてリアルタイムで繰り広げられる。一時停止も巻き戻しも早送りもできない。観客は演じる役者たちと同じ瞬間を強制的に共有させられる。また、世界が舞台上で完結するため、人物たちの役割がはっきりしている。

本作品「ぎょくおん」は、小説の形をした演劇作品であると思う。読者は主人公、郡司の独白形式の一人称を追う。それはまるで声に出して語られているかのようだ。また、登場人物の配置からも伺える。演劇には物語の始まりと終わりで人物に何らかの変化を持たせるというセオリーがあり、これは主人公である郡司が負っている。そしてその郡司を取り巻くアランと七美は彼に常に郡司に外部からはたらきかける役割を負っており、それが彼に変化を促している。ゆえに、アランと七美には変化という責務はなく、アランに関してはまるで神の降臨を思わせる（ちなみに私はアラン役にはニールス・シュナイダーがぴったりだと思う。気になった方はグーグル先生に聞いてみてほしい）。読者は郡司の深淵に引きずり込まれていく。私はこの作品を2時間ほどで読み切った。それもまた、限られた時間で勝負する演劇を思わせる。

私だったら、この作品をどう演出するだろうかとずっと考えていた。椅子が置かれた舞台に、役者たちを座らせる。座らせたまま、喋らせる。「姉」だけは観客に背を向けさせる。その周囲を、「死」の概念を表象したダンサーが誰とも目を合わせず、静かに動き回る。時折舞台は暗転し、焦土と化した街がフラッシュバックのように映写され、爆音が轟く。

終章、郡司はようやく、そして初めて「死」と目を合わせる。そのクライマックス、彼がどう「死」と対面するのか、その瞬間をぜひ見届けてほしい。

――きりちひろ

推薦文

「産む性ではない郡司が至る「平和」の姿」

過去にTwitterに感想を流したのですが、改めて考えてみると「郡司が生まれ直す物語」と言えるのでは、と思いました。

姉から逃げるようにして東京を離れ、海辺の鄙びた温泉旅館で働く郡司。射精障害、薬の副作用による乳汁分泌、ポケットの中に入ったままの飴玉、くらげを飼ったこと、メッセージ性のある要素をたくさん持つ魅力的なキャラクターです。

彼の語り口調は丁寧であるけれど徹底した客観の果ての「他人事」のようで、文中にも郡司自身がどう思ったとか、どう感じたとか感情の表現があまりありません。郡司は物語世界における目の役割しかしていないのではないかというほど、透明な存在です。

幼少期から、郡司のおかれた環境はかなり過酷で、自己を守るための客観なのかなとも思います。生への執着が薄く、かといって積極的に死を選ぶでもない、まさに生きるための戦争の最中。逃亡先でも姉に似た「生霊」と呼ぶ少女の出現など、彼の戦いは続いて、そして銀色のゲンバクによって生じたグラウンド・ゼロとラジオによって、終わる。

銀色のナイフ、それが生み出した涙と熱。しにたくないよ、という、生命の本質を口にする郡司。短いながら、クライマックスのシーンは彼が押さえつけ、表に出ないよう閉じ込めていたものすべてが迸り出るようでした。これが「生まれ直す」と感じた理由です。

無駄な要素がなく、全てのピースがあるべき場所にきちんとはまる、そんな爽快な結末へ着々と読ませる力のある物語です。二十章と、ラストを読んで、ああ郡司はちゃんと取り戻せたんだ、と詰めていた息をようやく吐ききれた気分でした。

郡司が辿り着いた「平和」がいかなるものか、ぜひたくさんの方に見ていただきたいです。

海辺とかくらげは生の際、生まれ損なったものを想起させます。それから、産む性ではない郡司がアランに渡し、渡される火＝熱。最後に受け渡された火こそ、ヒトが生み出したものじゃないかと。読み終わって本を持つ手がぶるぶる震えました。すごくすごく良かったし、オカワダさんが舞台化したのを見てみたい。そう思います。

——凪野基

推薦文

「暗喩に満ちた、ダメ男の逃亡記。」

東京から逃げるようにして海辺の温泉街に来た郡司と、彼にまつわる不思議かつ奇妙な出来事。

主人公郡司の視点になりきって一気に読んでしまいました。

BL要素あり、しかも雄っぽいものと聞いていたので、ついついそんな期待をしてしまったけど、淡々と現在を受け止め、不思議な出来事や過去に戸惑う「青年の半生」が描かれているなぁ、というのが第一印象。郡司が作中で吐いてしまった、食べた覚えのない「クラゲ」や、姉の生き霊だと思っていた少女の正体など、暗示的な部分はあるけれど、そういうのが分からないまま読んでも問題無く面白かったです。

ラジカセを捨てるときに「生き物を捨てるような気持ち」になったり、姉に「かわいそうな子」と言われ続け、姉とセックスこそしていないけれど、ほぼ情夫のような（郡司も言っているように、ヒモというのが正しい）ふれ合いをしていたり、薬の副作用でしょっちゅう左胸を気にしなくてはいけなかったり。

郡司は周りを見えなくしよう、鈍感であろうとしているけど、とても繊細な感性の持ち主なんだなぁ、と思います。あと、脇役との絡みも面白かったです。大学生七美や、神父・バンド経験のあるアラン。特にアランとは最後のほう、「乳汁を出さない自分に早晩興味を失うでしょう」と別れを匂わせる文があっただけに、おかさんから今後もこの二人は関係を保つと聞ほっとして嬉しかったです。

BL的な読み方ではアランがヒーローに相当します。

「マジレスされた」と言ったり、郡司が切りつけられた時に神父対応をするアランがお気に入りです。お話しの終わり頃「ホテル行こ」と言ったあと、「あ、言う順番間違えちゃった」というアランもとてもかわいいです。これを言われて堕ちない受けはいないでしょう……！

テキレボアンソロ三冊目「猫」に寄稿された「飴と海鳴り」も郡司が主人公で、少し泣けます。

——きよにゃ

推薦文

「それでも、「戦うこと」からは逃れられない」

共依存状態の関係にあった姉からのゆるやかな支配を逃れ、めまぐるしく時の流れる東京の街から「バクダン」を自ら抱えたままの主人公湯田郡司はあらかじめ時間の流れの滞留したかのような海辺の街へとたどり着く。

欠陥だらけの身体と心を引きずりながら消極的な死に憧れ、怠惰に流れゆく日々の中を生き延びる彼は射精困難と乳汁分泌という男として恥ずべき欠陥を抱え、同僚のアランからは「抱きたい」と性的な誘いを持ちかけられながらも、のらりくらりとそれを交わす日々を過ごす。

「去勢された男」とでも言うべき空虚を抱えた彼は姉との暮らしの中でも「男」でありながらどこか性的に搾取されていた立場であり、そこから逃げ出すために飛び出した先でも「男」としての自身を喪失したままの危うい存在であることが示唆される。

逃げ延びたはずの街でも、かつての姉の姿をした少女の影と、殺してしまったはずの海月の幻影は郡司を捕らえ続ける。

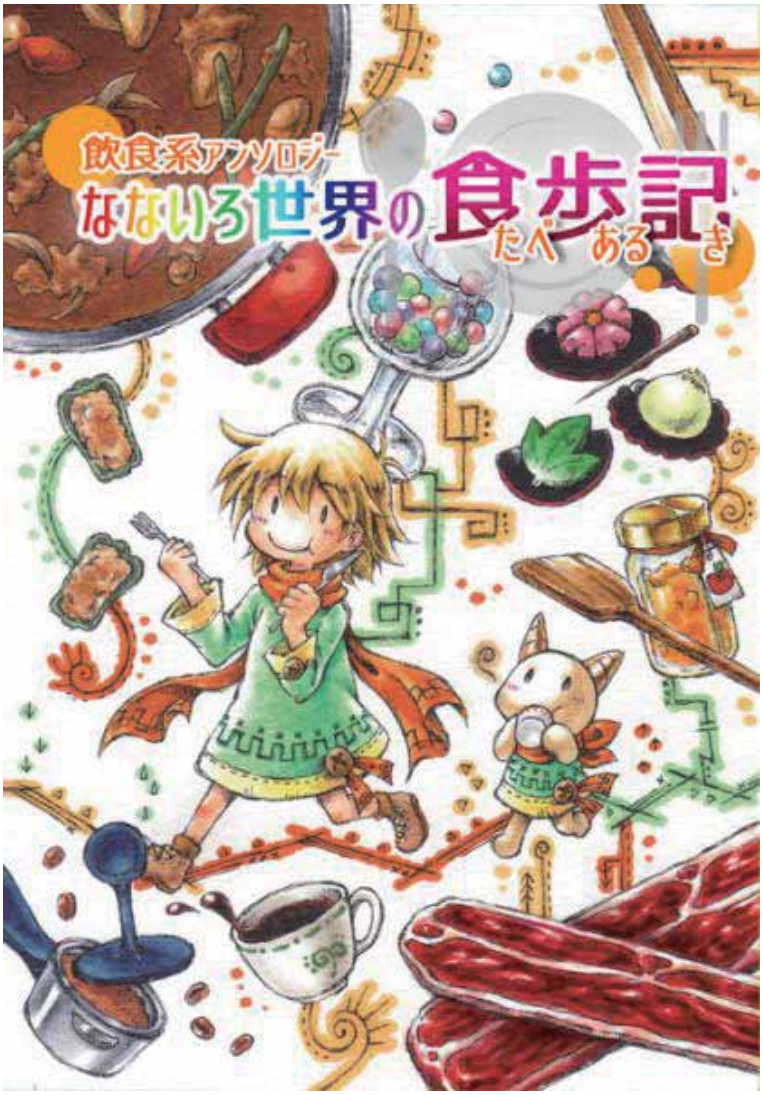
終始停滞した「生」の中を、あやふやに生き延びる郡司を、幻の少女は、七美は、アランは、無理矢理に腕を引っぱるように「生」へと引きずり出す。自らを手放したい、と消極的な死を望みながらも社会から自分を完全に切り離すことも、姉に与えられた携帯電話とコート、そのポケットに持ったままの不発弾——あめ玉を捨てられない郡司は、社会に埋没することを望む空虚な抜け殻のようだ。

『消極的な死』に焦がれていたはずの彼は、その実誰よりもつながりを断ち切られることを恐れ、相反する位置に存在するかのように見えた「生」に執着していたことを気づかされる。凪いだままのように見えた海は荒れ、巻き起こる波は否応なしに郡司をさらおうとする。

生きることを自ら選んだ彼は、自らを淡く捕らえ、追い続けてきた姉を——その偶像すべてを受け入れ、赦すことを決意する。高らかに鳴り響く玉音放送により、戦争は突如終結する。それでも、それは決してすべての終わりではなく、「平坦な戦場」を生き延びなければいけないという新たな始まりに過ぎない。

夢とうつつを行き来し、幾重にも絡められた仕掛けにからめ取られる物語は読み手を現実と物語のあいだに存在するぽっかりとした「隙間」に引きずり込み、手を離してはくれない。読み手に「向き合う」ことを余儀なくさせる強い引力を持った、圧倒的な物語体験を果たさせる一冊。

——高梨來



貴方の空腹を満たす極上の物語を「いただきます！」

「なないろ世界の食歩記」

著者	飲食系アンソロジー
価格	200 円
ジャンル	大衆小説
ブース	委託販売

食べ物・飲み物がテーマの掌編小説アンソロジー。
ファンタジーから現代コメディ、日常ミステリまで、貴方の空腹を満たす極上の物語を「いただきます！」
【うンまいジャムの、その半分】世津路　章
キーワード→ジャム・魔女・木べらでじっくり
【分かれ道はデミグラスソースを入れるか入れないか】柑橘
キーワード→幼なじみ・常に腹ぺこ系バカ男子・ツンツンおかん系男子
【砂糖衣に包まれて】いぐあな
キーワード→死と再生・蛇・ボンボン
【ネロ・バリスタ】服部匠
キーワード→エスプレッソ／ヒーローアクション
【幻獣料理のレシピ】森村直也
キーワード→ジビエ・ジャーキー・ロジカルファンタジー・アクション
【葉桜の頃、桜葉の味】堺屋皆人
キーワード→和菓子・大学生・日常ミステリ
【表紙イラスト・各扉カット・飾り枠】岡亭みゆ（火色星）

推薦文「ファンタジーから現代コメディ、日常ミステリまで、
貴方の空腹を満たす極上の物語を「いただきます！」」

それぞれの書き手さんの個性が現れた「食べ物・飲み物がテーマの掌編作品集」
取り扱いメニューはお菓子から食事、飲み物とバラエティ豊か。そして舞台もファンタジー、現代、コメディ、日常ミステリと幅広く！

【うンまいジャムの、その半分】世津路　章　さん（こんぽた。）
人生誰しも一度は直面しそうな、進路や将来のことに関する世津路式寓話。丁寧に語られる「魔女のジャム作り」そこから見えるのは、何事も一瞬にしては作られず、さまざまな思いや試行錯誤の末に結果があるのだということのようにも思えます。
そして出来上がったジャムのおいしそうなこと！　主人公・クラリッサと共に味わってくださいませ。

【分かれ道はデミグラスソースを入れるか入れないか】柑橘　さん
料理男子ですよ奥さん。しかもツンツンのおかん系男子ですよ。それに対して組み合わされる腹ペコ系おばか男子。これって定職セット並みに定番じゃないかしら。
小気味良い文章のリズム、短い中でも楽しいコメディー。鉄板レベルの美味さ。タイトルの意味も、最後まで読めば納得の一作。

【砂糖衣に包まれて】いぐあな　さん（一服亭）
冥界の神様・ウロボロス様と、死者となった少女のほろりと苦くて甘いファンタジー。
いぐあなさんらしい、優しくも決して容赦しない運命のドラマだからこそ、ラストに胸締め付けられるのだと思います。
ボンボン（砂糖菓子）とのリンクが本当に素敵な物語。

【幻獣料理のレシピ】森村直也　さん（HP製作工房）
読んで爽快感のあるアクション×独特の「術式」（プログラミング言語かしら…？）×ファンタジーな逸品。
個人的には独特の（これ、専門外でなんとなーく分かるくらい、だからなんでしょうね）術式に中二心がくすぐられます。
そして出来上がったもの、私も食べてみたい。

【葉桜の頃、桜葉の味】堺屋皆人　さん（S.Y.S.文学分室）
和菓子屋を軸にした、惚れっぽいワトスン役男子と、安楽椅子系男子の日常ミステリ。
読みやすい文体で語られる和菓子職人の小さな謎。ちょくちょく挿入される和菓子豆知識は、まるで店先にいるような臨場感。
ぜひラストにご注目。

【表紙イラスト・各扉カット・飾り枠】岡亭みゆ　さん（火色星）
岡亭さんはカラーイラストと、フリーハンドで描かれる幾何学的な模様が特徴の描き手さんです。カラフルな表紙と、温かみのあるカット・飾り枠が魅力的。

――服部匠

推薦文

「あっという間に食べ終わるのに、この上ない満足感！」

４０００字ほどの掌編が６篇収録された、《食べ物・飲み物》をテーマにしたアンソロジー！　短編と侮ることなかれ、いずれもガッツリ内容は詰まっていて、なのに決して胃もたれしない絶妙な長さになっています。内容もひとつとして重なることなく、お気に入りの一作が必ず見つけられると思います。

食べ物・飲み物というのは、それを囲みあう相手との様々な関係を映し出すものだなぁと、１冊読み終えて改めて思いました。本作に収録されているのは、いずれも読んでほっこりしたり、くすりときたり、見ていて心があたたかくなるような絆の物語。それを素敵に演出する岡亨さんのイラストも、とても味わい深いです。

即売会イベントに出す度即行売切れ（これマジです、委託受けてたのでわたくし）の本作ですが、今回がラスト頒布とのこと！　あたたかみのある装丁に、お腹をやさしく満たしてくれる実力派ぞろいの作品ばかり。この機会にぜひ！

――世津路　章

推薦文

「お話が食べ歩けるアンソロジー」

「食べ物・飲み物」をテーマにした６つの掌編小説アンソロジーです。

・うンまいジャムの、その半分　世津路章様

優しい文で綴られる、魔女と少女のジャム作りのお話。上手に果物の皮を剥き、丁寧に切り刻む少女、クラリッサ。貧しい農村出身の彼女には、実はここに来るまでに辛い出来事があって…。失敗しても大丈夫。もう一度胸を張ってみよう。そんな気にさせてくれる、優しい暖かなお話です。

・分かれ道はデミグラスソースを入れるか入れないか　柑橘様

腹ペコ系男子が、幼馴染のオカン系男子の家に、夕食をご馳走になるお話。この腹ペコ男子、斑くんが可愛いんです。図体はデカいのに、中身は子犬のように、クンクン鼻を鳴らしそうな男の子。それを見事にあしらう空くんも可愛い。この二人がじゃれ合うと、相乗で更に可愛いです。とにもかくにも、可愛い二人を愛でたいお話。余りの可愛さにニヤニヤ必至です。

・ネロ・バリスタ服部匠様

ヒーローアクションをいつも見事に書き描く作者様の（良い意味で）お約束モノ・ヒーローアクション。ツボを押さえまくった設定、何故かコーヒーに詳しくなりそうな戦闘シーンに、これでもか！！　と作者様の筆が走りまくります。まずは、読んで下さい。きっと読み終わった後、「面白かった！！　続きは！？」となること請け合いです。

・幻獣料理のレシピ　森村直也様

ちょっとすれた少年に連れて来られた、さえない（失礼）男性のモンスターハンティング。唱える呪文はプログラム言語。ということは、この世界は？　志倉さんがひたすら痛そうで可哀想で、でもカッコイイお話。実は作者様のブログに、「禁則小説『闇球生まれる日常の午後 Logical Fantasy』」という志倉さんの、もう一つのお話がありますので、これを読むと、また感じ方が違ってきます。

・葉桜の頃、桜葉の味　堺屋皆人様

「運命の人」（但し数度目）に出会った青年と、それを見守る友人のお話。ひらすら彼女の作る和菓子を買うしか出来なかった淡海くんが、声を掛けた途端、彼女は…。ちょっと切ない、優しいラスト。読み終わると、餡子モノが無性に食べたくなります。

岡亨みゆ様の表紙、挿し絵も本当に素敵で、まさにいろんなお話が食べ歩けるアンソロジーです。

――いぐあな

推薦文

「味を創造する物語集」

美味しそうな食べ物と共に案内される
ちょっと切なかったりする物語。
表紙のワクワク感と
雰囲気の違う
そっと寄り添う美味しい物語達。
完食できます！

――試し読み会感想

Girlfriends Forever

「八奈結び商店街を歩いてみれば -夏やで！-」

著者	世津路　章
価格	800 円
ジャンル	ライトノベル
ブース	委託販売

大阪のどっかにある《八奈結び商店街》は今日も今日とて騒がしい。
熱い日差しをものともせずに
5 人の少年少女は今日も、泣いて、怒って、笑って生きる。

両親がいない繁雄・和希、千十世・美也の兄妹、
そして彼らの幼馴染であるなずなをメインに、
八奈結び商店街で起こる様々な騒動を描きます。

また、本作がオマージュしている《吉本新喜劇》を
（独断と偏見に基づき）解説した、チュートリアル小話も書き下ろしました。
大阪になじみのない方でもバッチこいです！

なにわの人情とお約束をたっぷり詰め込んだ総集編、暑気払いにぜひ！

推薦文

「Girlfriends Forever」

内容盛りだくさんの本なので、一番好きなエピソードについて書きますね。
なずなの友達のユキが、自分をこっぴどく振った男の子、植川に復讐する話。

ユキは商店街の凄腕美容師アキさんに化粧をしてもらい、隣町の美少女「立花優理」に変装する。
その姿で植川とデートし、キスしようと目を瞑ったマヌケ面を写真に撮ってＳＮＳで拡散してやろうというのだ（怖いですね！）

結末がどうなったかは本編を読んでもらうとして、私が泣いたのは、ユキの苦しみを知ったなずなのセリフ。

「ユキもユキやわ！　なんでこんなん、話してくれんのよ！
こんな、こんなかなしいこと…」

学生時代、男の子は憧れで恋は貴重品で、女の子の優しさは身の回りにあふれて当たり前過ぎてその大切さに全然気付かなかった。
友達が自分のために心を砕いてくれること。その真剣な眼差し。美しさ。
ユキもきっと何十年後かに、植川ではなくなずなのことを思い出して切なくなるのだと思う。

美容師のアキさんはそういうことを全部分かった上で、ユキを変装させたり、なずなの頬に猫のヒゲを描いたりするのだろう。
八奈結び商店街に行ったらまず最初にアキさんの美容室に入りたい。

「本場ブロードウェイ仕込みのメイクやで？」

その真偽は誰も知らない……

——柳屋文芸堂

推薦文

この本は、同じ商店街に住む小学生～１０代の若者５人をそれぞれ主人公にした５つの短編と、番外編＋黒猫ちゃんのＳＳ＋吉本新喜劇についての

コラムという豪華編成でできています。どの作品もコミカルで読みやすく、とっても面白かったです！　主人公５人それぞれの個性が際立っていて、どの子もすごく魅力的でした。彼らが商店街のコミュニティの中でそれぞれに役割を持っていて、一人ひとりの存在がみんなを幸せにしている図式がきちんと描かれているので、読んでいて幸せな気分になります。これは、共同体の理想的なカタチだなーと…。今はなかなか、こういう人間関係を結ぶことが難しい世の中になってしまったなぁ…と、懐かしさと、憧れにも似た気持ちになりました。コラムに書かれていた「吉本新喜劇」のような人情の世界や、人との強い繋がりの中に、うまく行かない浮世の怖さや辛さもしっかりと描かれていて、楽しいだけではない日々の厳しさも盛り込まれています。けれど、最後は明るく楽しく締めてもらえるので、読後感がすごくいいです。世津路さんの描く物語には、そういう明るい希望というか、愛が溢れていて、そういうところにすごく元気をもらえます。それは、単にありもしない夢を描くんじゃなくて、色んな暗い面も踏まえつつ書いてくださっているからこそ、心に響くというか。

吉本新喜劇に関するコラムも、すごく面白くて納得でした！　そうそう、気だるい土曜の昼下がりに何となくテレビをつけたらやっているんだよね…そして、やってたら何となくそのまま見ちゃうんだよね…そして長年見続けた結果、いつの間にか、出てる芸人さんが他人とは思えなくなってるんだよね…（笑）

関西の言葉も大好きなので、そういう点でもいっぱい堪能させてもらいました！　次はどんなお話が出てくるのかな。商店街のみんなの今後の成長を、これからもずっと見守りたくなるような作品でした。

――まりも

推薦文

「明るく楽しい正統派人情コメディー」

いつもそうなんだけど、世津路さんの本を読むと、ボリュームたっぷり楽しい本編もそうなんだけど、随所随所に差し込まれた小話のページがとても面白い。まるで「アメちゃんあげる」というナニワのおばちゃんのような、気安い感じの親切心。それがこれでもか、と詰まってるのが、この本だと思う。

子供が活躍する話が大好きな自分。商店街で小学生から高校生までわちゃわちゃやってる。しかも男女様々、おしゃれに、万引き問題に、子供の大きな成長。彼らを温かく見守る大人たち。古き良き児童文学の香りがたまりません。それでいて、ただのノスタルジーだけの物語ではなく、現代らしい悩みがアクセントとして生きている。しっかりとした構成力と、それでいてコメディーとしての楽しさを忘れない世津路さんのサービス精神が発揮された傑作だと思います。

ちょうどあまぶん開催は夏真っ盛り。

夏の読書体験としていかがですか。

――服部匠

推薦文

「これが浪花の人情や！」

ここはあえて関西弁でいかせて貰いますわ。え？　大阪弁ちゃう？　細かい事気にせえへんの！　こちらで描かれているのは浪花の商店街の人情物語。ハートフルストーリーです。まあ、ほのぼの楽しいだけのお話と思いますわな。

ちゃう！　甘い！　グリコより数倍甘い！

じんわりとした登場人物の成長に対する苦みがこれはもーきっちり入ってますんや。流石ですわなあ。

しかもやで、ヤンデレ要素だだアリ！　しかも兄妹ヤンデレ！　これは美味しいでー。　ヤンデレ兄妹と、健全兄妹、両方楽しめるこのお得さ！　コスパ良すぎるやろ！　しかも女子高生の不器用恋心もありや！　相手の男の子は超鈍感や！

どんだけコスパええねんマツモトキヨシか！　いう話ですわ。

さらにさらに、吉本新喜劇の解説がついてます。これがまた「あー、超わかるー」って解説なんや。ほんまハンパないわ世津路さん。それから関西人にとってめっちゃ重要な要素言うとくわな。

この作品、大阪弁が完璧。

これはおっきいやろ。めっちゃおっきいやろ。テレビの「こいつ大阪なんか京都なんかどこ住んでんねや！　って兵庫なんかい！　全然ちゃうやろ！」って関西弁と違います。リアル大阪弁。それがめっちゃ軽快にテンポよく喋ってます。えー、後、なんやろなあ。言いにくい事言っちゃってええかなあ。

ロリコンの方は読んで損無し。

これは絶対。超絶対。小学生女子めっちゃ可愛い。

あー、まずい事言うてもうたかな。自分に正直に生きすぎたかな。

とにかく、老若男女楽しめるコスパの良さです！　よろしゅうおたのもうします（あのＣＭの口調で）

――浮草堂　美奈

あなただけの空想のまちを思い描いてみてください

「ぼくたちのみたそらは きっとつながっている」

著者	くまっこ他
価格	1200 円
ジャンル	ファンタジー
ブース	委託販売

世界は、いくつもの“まち”で作られている。
世界の“決まり”によって、町と町を行き来できるのは、限られた者だけ。
ほとんどの住人は、生涯を生まれた町のなかで終える。

――そんな世界観を共有したシェアワールドで、たくさんの“空想のまち”が生まれました。

１４人の作家が織りなす町は彩り豊かで、様々な住人の暮らしがありありと浮かび上がります。
美しい町、悲しい町、長閑な町、厳しい町、優しい町、緊迫した町。
自らの町でひとつの仕事に打ち込む職人、町の日常を愛するひと、町を出る人生を選んだ者……ｅｔｃ、ｅｔｃ

色とりどりの空想のまちと、そこに生まれる物語を、ぜひご堪能ください。
――あなたなら、どの町で暮らしたいですか？
――あなたなら、どんな“空想のまち”を描きますか？

推薦文

「あなただけの空想のまちを思い描いてみてください」

「世界は幾つもの《まち》でできている」という世界観を共有し、参加者それぞれが独自の《まち》を空想して書いた、シェアワールド的なアンソロジー。

音町、蛍町、箪笥町、砂町、本町、夜町、星町、雨町、星見町、宙町、湯町、墨町、幡町、地理町……登場するまちには、それぞれルールがあります。そのルールは、まちの歴史や在り方と密接に関わっています。その中で生きる人々は、大抵はまちの在り方に沿って生きているのですが、そこからほんのすこし踏み出してしまったり、わざと出ていったりする人もいて、まちと人との在り方・関わり方が、どの物語でもきらきらと光っていました。

そして、本を読み終えて思ったことは、ここに書かれたまち以外にも、まだまだたくさんのまちがあるのだということ。本はここで終わるけれど、まちと同じように、あるいはその数だけ、物語もあるのだということ。

自然と、ほかにもこんなまちがあったらいいなぁという気持ちが浮かんできました。そんな風に、きっと、読んだ人の心に、新たなるまちを思い描かせてくれるアンソロジー。ぜひ読んで、あなただけの空想のまちを思い描いてみてほしいです。

最後に、このアンソロジーには手製のブックケースがついているのですが、本を宝箱にしまうような気持ちにさせてくれる、とても素敵なアイテムです。本を大事にしたい、大切にしたい、そんな気持ちが感じられて、とてもうれしくなります。

――なな

推薦文

「幾重にも　無数にも　つながり、ひろがる　《まち》のおはなし」

人々が、己の生まれた《まち》で生涯を過ごすことを定められた世界を舞台に、それぞれの《まち》の物語が綴られたアンソロジーです。幻想的なテーマもとに、各執筆者様がそれぞれの個性を発揮され、魅力的な物語がたっぷりと詰め込まれています！　そのたっぷりさ加減と言ったら、がっつり厚みに表れています…これ青年誌のコミックスくらいあるね、うん…。

なのにすごく読みやすくて、一週間ほどであっという間に読み終えてしまいました。本編は勿論、可愛らしい装丁や、主宰者・くまっこ様お手製のブックケースと栞がついてくるなど、随所にあたたかな気持ちのこもった一冊です。

自らの《まち》を愛してその中で懸命に生きる人たちがいる一方で、《まち》から出ようと画策する人もいる。《まち》を出ることは叶わないけど、別の《まち》にいる人と掛け替えのない絆を築いてそれを大事にする人もいる。《まち》という制限があるからこそ、そこに暮らす人々の在り方がより如実に描写されています。ぜひお手にとって、お気に入りの《まち》を探してみてください。そしてあなたもぜひ自分だけの《空想のまち》を作ってみてくださいね。

——世津路　章

推薦文

象印社のくまっこさんが主催された、「空想のまち」をテーマにした、アンソロジー本です。本体もすてきなんですが、特筆すべきはやっぱり外箱…！！　手作りの箱がすごいんですっ（感涙）箱が丸くくりぬかれていて、そこから表紙イラストの女子がこっちをチラッと見ている感じが絶妙で！　狙ってたんでしょうか、このデザイン。それとも、できたイラストから箱のデザインを決めたのかな？　どっちにしても、素晴らしいです～！　栞を付けてくださったのもすごくありがたかったです。自立するぐらい分厚い本なので。

この本には「空想のまち」というキーワードに加え、そのまちが存在する「世界」を参加者皆で共有するという、独特のルールがあります。それは、「人々は生まれた町に守られて、その中で生涯を暮らす」「他の町へ行くバスに乗るには、法外なお金がかかる」「限られた少数の人々が町と町を行き来し、それぞれの町は細々と交流をしている」といったものです。このルールの中で、参加者はそれぞれの「まち」を作っています。最初にこの企画を聞いた時にはどんな本に仕上がるのか想像できませんでしたが、蓋を開けてみると、他にはない面白い本になったなぁとびっくりしました。このアンソロジーには一四人の書き手が参加していて、それぞれの町は参加者各人の個性で書かれているのに、全部読んでみると不思議な一体感を感じます。たとえて言うなら、一冊読んでしまうと、まるで一つの世界をぐるっと一回りしたような充実感を得られるというか。それは、この本を作るに当たって決められたルールを皆が共有しているからなのだろうな、と思いました。

それぞれが自由に書いているのに、どこか繋がっている。そこが、ひとつひとつの作品が持つ力の上に、更なる魅力を付与してくれています。くまっこさんが作品タイトルに「ぼくたちのみたそらは　きっとつながっている」という言葉を選ばれたわけが、読んでみてすごく分かるような気がしました。

あっ、ちなみに。

必ずしも掲載順に読む必要はないと思うのですが、一番最後に載っているくまっこさんの作品だけは、最後にお読みになるのをお勧めします。そのほうが絶対に味わい深くなると思いますよ…！

——まりも

推薦文

「もし僕らのことばがウィスキーであったなら」

この本の中には沢山の町が出てきて、とても全ては語れないので、一番大好きな「音町」を紹介します。でもこれ、絶対ネタバレしちゃいけない話なんですよ。見事な結末を持ったストーリーを、結末を隠して説明する。出来るかな（ドキドキ）

まりもさんの「楢の薫り、楓の音」という作品。本の最初に収録されています。

楽器の製作を生業とする「音町」楽器職人であるエレンは「酒町」の人々のためにバイオリンを作っている。音町の人々と違って、酒町の人たちは楽器を大事にしない。外で演奏したり、上にお酒をひっくり返したり。そして酒町の人が求める音色は、音町のそれとはずいぶん違っているらしい。

他の町に行くことは難しいので、彼らの音楽を聴くことは出来ない。楽器を修理する時の注文や、音町と酒町を行き来する運び人の話から、ぼんやりと酒町の音楽が浮かび上がってくる。

賑やかに酒を飲みながら、楽しく早いテンポで踊るのにぴったりな。

美しく上品な音楽こそ素晴らしいと信じている音町の人々は、酒町の人々をあまり良く思っていない。それでもエレンは酒町の人々と音楽に惹かれている。酒町の仕事なんてやめるべきだという忠告も、プロポーズも断って、酒町のためのバイオリンを作り続ける。そして。

思い出すだけで涙がじんわりにじんでくる、あの結末。

決して悲しみの涙ではない、ということくらいは伝えても良いだろう。

直接会うことの出来ない人々を思い、触れることの出来ない何かに憧れる。

「まるで私たちみたい」

そんな風に思いませんか？

——柳屋文芸堂

キャンディと王様・三部作

「野球が大好きな女の子」
「罪と罰」
「あの夏の日」

著者	にゃんしー
価格	1000 円 /1000 円 /1000 円
ジャンル	大衆小説
ブース	企画本部

第一部「野球が大好きな女の子」
高校一年生、尼崎。
好きなものを好きなだけ好きでいればよかった。
それだけで仲良しでいられた。

第二部「罪と罰」
高校二年生、女の子。
野球が出来なくなったことを罰とすれば、罪は何だったのだろう。
分からないから繰り返す。

第三部「あの夏の日」
高校三年生、野球。
もう一度笑ってほしい、そんなサインは決めてない。
でもあの子は、首を振らないと思う。

推薦文

「やきう。」

「野球をする女の子の話」ですが、野球に詳しくなくても、問題なく楽しく読めます、ということをまず伝えたいです。

あ！　でも、野球を知っていたら、プロ野球が好きならより楽しめることは間違いないと思います。でも、プロ野球のことを全く知らない私でも、章のはじめなどでいきなり語られる野球選手のうんちくなど、興味深く読みました。

主人公の「キャンディ」と「王様」の、「キャンディ」がなぜキャンディなのか、「王様」がなぜ王様と呼ばれているのか、何度も作中で語られるその理由がうっとりするほど美しいのです。何度も何度もその理由が出てくるので、だんだん酔ったような気分になってくるほど。

この二人が（バッテリーを組んでるわりにクールな関係の）、笑いあうシーンがとてもいいなあと思いました。おんなのこかわいいいっっ！！！ってなった。

それ以外の登場する女の子たちもとても魅力的。仲がいいのか、わるいのか、よいこなのか、よくないこなのか。家庭環境も、偏差値も、みんなバラバラでまとまっているのかいないのかわからない、けどみんな野球が好きな女の子たち。

いつまでもこんなきらきらした女の子たちを見ていられるとおもったんだ、二巻を読むまでは……。

（二巻の推薦文に続く。笑）

――壬生キヨム

推薦文

（一巻の推薦文の続きです）

というわけで、次はどうなるんだろう、ってわくわくしながら二巻を
読み始めたわけですが、けっこう冒頭の方で、

は！！！！？？？？？

っていうことがあって、

ちょっとまてよにゃんC！！！！！！！！！！！！！

ってなって、それからは三巻までノンストップで読みました。ココスで。

これは不条理文学だったのか……。って思ったし、事件は事件として、
それ以外の人物の生活は進んでいくのが残酷ですらある。
新キャラの弥生も、茜も（↑推し）、自分のことで悩んでいるのが
物語としてすごく強いな、と思いました。
（一巻の推薦文から、キャラのことしか語ってない気がしますが、
キャラクターが魅力的に思えるのは、やっぱり物語と構成の
強さだと思いました）

三巻の推薦文に続く！
（これ推薦文になってますかね）

——壬生キヨム

推薦文

（二巻の推薦文より続きです）

読み終えて、この作品は、「キャンディ」こと乙彼若菜が本当にかわいい
と思える小説だったな！　と思いました。

長いけど、こんなに長い文章すべてかけて、登場する女の子がかわいいと
言っている。

そして、余談というか、この作品には、作者と同じ「にゃんしー」という
名前のストリートパフォーマーの青年が出てきます。ストリートパフォー
マーというところも作者と同じなので、おそらく作者自身がこの作中にゃ
んしーのモデルなんだろうな、と思うのですが、読みながら（いちおう私
は作者にゃんしーさんと何度もお会いしたことがあるのですが）、何故か
まったく作者にゃんしーさんの絵でうかんでこない（笑）。

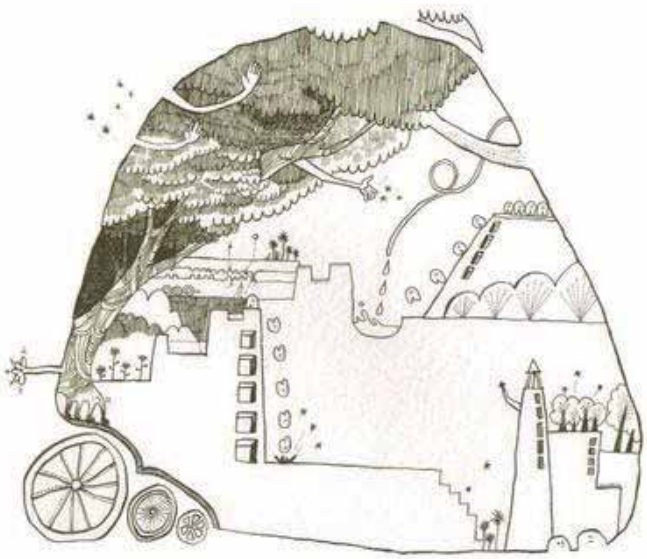
むしろ、作中にゃんしーを実写化するなら、作家にゃんしーさんがツイッ
ターのアイコンにしている（そしてあまぶんマスコットでもある）おとそ
くんが近いのではないか、と思いました。

野球をする女の子たちの小説で、ストリートパフォーマーで高校生ではな
いにゃんしーがどう絡んでくるのか、そこもハートフルで素敵なのでぜひ
読んでいただきたいです。

「コギャル」好き。

——壬生キヨム

「ことわりさん」



ことわりさん

著者	壬生キヨム
価格	200円
ジャンル	詩歌
ブース	白昼社セレクト

ボーイズラブ、幻想、中二風味の短歌集です。

【目次】

ぼくが死ぬとき
殺人幻想
星を殴る
自殺に立ち会う

推薦文

「短歌であそぼう」

「ことわりさんが大好きです！」と著者の壬生キヨムさんに告白すると、
「世の中にはもっといい短歌があるので、たくさん触れたほうがいい……」と
キヨムさんはおごそかにお答えくださいました。

短歌とか俳句。
あれからたくさん読んできてはいるけれど、
やっぱり「ことわりさん」が好きですよ、キヨム氏。

この本の中には、歌の数だけともだちがいる。
そんなに厚い本ではないので人数は少ないのだが、
みんないいやつばかり。
ひとかけものか、いきてもいないのか。
彼ら彼女らと遊んでいるような、ふわふわした歌たちが楽しい。

特に朗読するのが楽しいです。
5 7 5 7 7で読んでもいいし、デタラメに読んでもいいし、
読み方で色が変わって面白い。

この本は、とてもいいやつ。
かばんの奥にしのばせて、待ち合わせとかちょっと退屈なときに開きたい、
大切なともだち。

——にゃんしー

推薦文

「あなたはこのままでいてください」

どこかで読んだはずの言葉。
絶対に読んだことのない言葉。
言葉はそのどちらかしかないはずなのに、ここで組みあげられた言葉は、キヨムさんしか書けないもの。

ここには卑しさがない。下手な共感を呼ぼうとしたり、感傷を煽ったりしない。

ご本人はきっと、この先に行きたい。
それはとてもよくわかる。
けれど、その先を示すことができる誰かは、おそらく降臨しない。
キヨムさんが背中に隠した千本の腕がきっと、いつか答えをさぐりあてるのだろう。

——鳴原あきら

推薦文

「結局、ことわりさんって誰なの？（なんて聞くのはナンセンス！）」

「ふとそこで思いもよらぬ行動が必要となり、フライドポテト。」
のっけからこれである。ビコビコハンマーで通りすがりざまに叩かれたようなインパクトだ。
短歌や俳句とは作者本人のバックグラウンドを踏まえて私小説的に読み解くものだという一説を耳にしたことがある。わたし個人はその伝統（？）に関しては「なんだよそれ、本人がそうだって言ってないんなら作者と作品は切り離してくれよ」と断固反対したい。
「作品は作者から独立しており病気のひつじの栞が落ちる」
キヨムさんも作中でそう仰っていることですし。ね？　そこでこの『ことわりさん』である。
【ぼくが死ぬとき】
歳の離れた恋人との無理心中を試みる歌なのだろうか。旧仮名遣いを交えて綴られ、視点を行き来して描かれる関係性に「この人たちは？」と不可思議な心地にさせられる。
【殺人幻想】
キヨムさんの言う「中二病」を歌った短歌とはこのことだろうか。
ああ失敗をしてしてしまつた死出の山　はき慣れた靴でくればよかった
あくまでも「幻想」なのだ。幻想から抜け出せないどこかふがいなさがつきまとうが、それすらも滑稽でチャーミングだ。
【星を殴る】【自殺に立ち会う】
どこかやんちゃな言葉たちが綺羅星のようにこぼれ落ちる。この主人公は男？　女？　いや、想像上の少年？　呆気にとられるこちらを後目に、キュートに軽やかに言葉は駆け抜け、走り去っていく。
……さて、この歌を詠んだキヨムさんとはどんな人なのか。「ことわりさん」とは誰なのか。はっきり言って、読めば読むほどにわからなくなる。いや、わからなくていいのである。何にだってなれる、どこへだって行ける、言葉は想像力を翼に、こんなにも軽やかに跳躍出来る。それが、三十一文字のリズムの持つ魔法なのだ。短歌はこんなに自由だ。こんなに軽やかだ。こんなに楽しい。短歌の楽しさと可能性に触れられる一冊。
余談ではありますが、筆者であるキヨムさんには以前イベントでお会いしたことがある。Twitterや作品から受けるイメージ通りの、朗らかでかわいらしい方だったということをここに記します。
最後にこの場を借りて私信。キヨムさん、いつになるかわかりませんが、とても楽しい歌がたくさんあったのでそのうち解凍させてください。

——高梨　來

少年たちの蜜月、圧倒的官能

「欲深くうつくしい生きもの」

著者	まゆみ亜紀
価格	500 円
ジャンル	JUNE
ブース	JUNE3「温室」

カバー付き文庫　110 頁　全年齢

【世話焼き × 自堕落の中学生 BL】
真由人の親友・千遥には角が生えている。それは神さまの獣のあかし。希少な種である彼らには次代に子孫を残す義務があった。ふたりの蜜月は、二次性徴を迎えた千遥に嫁取り話が持ち上がったことで終わりを告げる。真由人は千遥への恋心を隠し、身を引こうとするが……。中学生の駆け落ち話。

特設ページ：http://greedy-beauty.tumblr.com/

推薦文
「少年たちの蜜月、圧倒的官能」

温室さまのサークル紹介に「ギムナジウムの壁になりたい」とありますが、まさにそんな気持ちになる一冊。少年たちをこっそり覗き見しているような至福の読書体験です。

美麗なカバーに吸い寄せられるように手に取りました。いつまでも眺めていたい。角の生えた美少年・千遥と、その幼馴染の真由人。中学生の男の子ふたりのあまくかわいらしい物語なのですが、とてもとても美しく官能的で……。読みながらずっとドキドキしていました。

神さまの血筋をひくという小夜井家の嫡男・千遥にはその証として額に角が生えています。「真珠のようにほのじろく光る尖り」「慎ましい貴石のような、隆起」という角。そして自堕落で甘えたがりという千遥の世話焼きをする主人公・真由人。ある日千遥に嫁取り話が持ち上がり、真由人は身を引こうとします。真由人の切実な葛藤を軸に物語は展開されます。

冒頭のお風呂のシーンで一気に引き込まれました。全年齢作品で直接的な性描写／シーンはないのですが、美しい描写はとにかく官能的です。やわらかな筆致のなかに、ずっとたゆたっていたくなります。

少年たちのみずみずしいやりとりと、思いの切実さ。「痛みと軋みをともなう夜を耐え、日毎ちがう自分と出会う」変化のさなかにあるふたりが互いを求めあうさまに酔いしれました。

真由人と千遥、ふたりともが「欲深くうつくしい生きもの」であるのでしょう。それをそっと眺めるような読書体験は、なんだかいけないことをしているようなドキドキを湛えて、とても幸福な時間でした。

――オカワダアキナ

推薦文

「「おれ」という一人称に萌える！　幼なじみ（人外）ＢＬ」

神獣として成長する千遙は、真由人を嫁に欲しいと言うが……！？
普段は一緒に風呂に入れてあげるほど仲の良い「千遙」と「真由人」（真由人＝おれがお世話）。
真由人も千遙も良い子で、幼なじみ・人外・執着などが盛り込まれています。悩み苦しむ攻め目線が好きな私には、とても嬉しい作品でした。
千遙から嫁取りの申し出をいったんは拒絶する真由人だけど、自分しか千遙の世話を焼きたくないと葛藤する姿に共感してしまいます。つき抜けている千遙よりも、中学生らしく悩む真由人が身近に感じました。千遙の首をしめちゃうところなんか、すごく追い詰められてるのがわかります。
あと、千遙が神獣であることを示す「角」がとてもいいアイテム（？）。入浴シーンの角の描写ががエロいです。あちこちからもれ聞いて再読し、確認致しました。「見てはいけないもの」のような種類のいやらしさです。
後半の二人で不思議な隠れ家で住むシーンはとても幸せで、見てて微笑ましいです。くだけた話し言葉と地の文に、若さをひしひしと感じる作品。

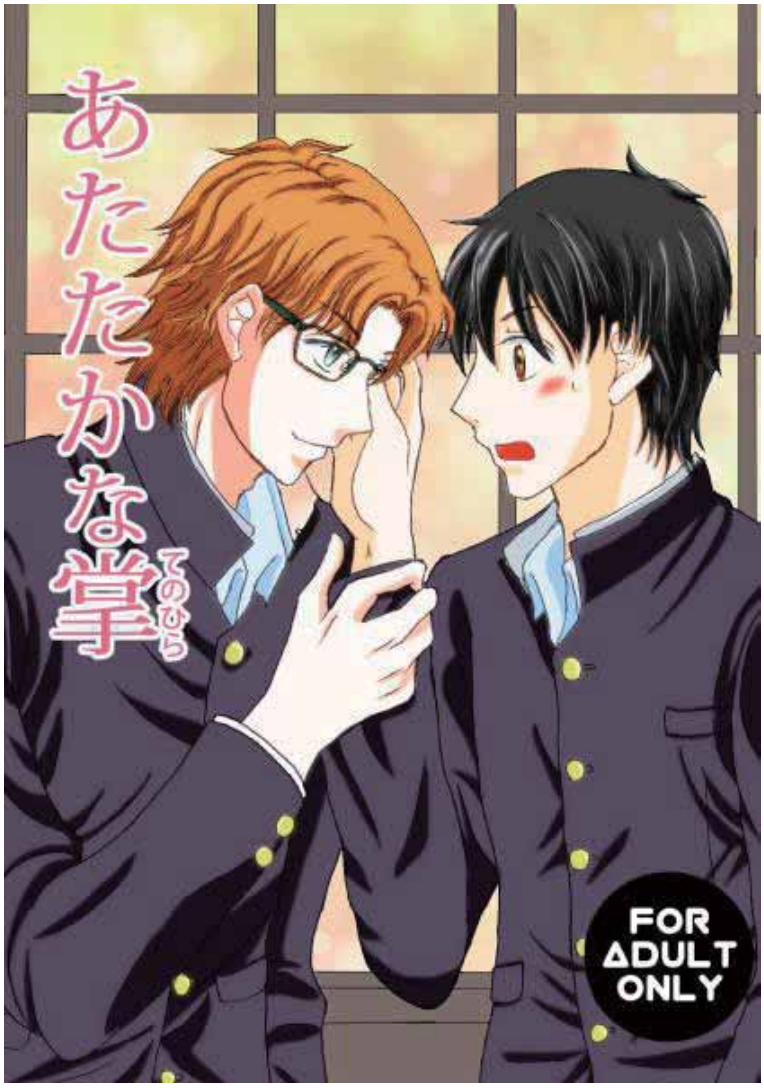
――きよにゃ

推薦文

「あまやかな「絆」が照らし出すものは」

美しいタイトルと、まばゆくきらめく装画の織りなす完成された世界が魅力を放つ一冊。
主人公である「おれ」こと、文原真由人の幼なじみ、小夜井千遙の額にはなめらかで美しい乳白色の角が生えている。どこか畏怖の念すら感じるそれを持つ彼は「神様に愛された子ども」として特別視されているが、真由人から見た彼は自分と同じ成長期の、やや度を超えた自堕落であまえんぼうの幼なじみだ。子どもじゃあるまいし、とあきれながらも、真由人は自らを信頼しきってあまえてくる千遙の面倒を見てやれるのは自分だけだ、と知らず知らずのうちに特別な感情を抱いている。たがいの無自覚な無邪気さの上に成り立つ、不思議な均衡の上に保たれている関係性は、「大人の男」になっていく時期を迎え、変化を余儀なくされる。
「神獣」である千遙は神の子の血筋を絶やさぬために嫁をめとらなければいけない。「男」であり「大切な友達」である真由人は千遙の世話を焼くという役目を降りなければいけないという。
幼い独占欲を自覚し、千遙に課せられた「神様の子ども」としての役割を前に引き裂かれ懊悩する真由人の心の移ろいを切り取った描写のひとつひとつは、切なくなるほどの息苦しさと、むせかえるようなあまやかさが潜められています。
やわらかに開かれた言葉たちでつづられる、真綿でくるむような愛情で千遙を自分だけのもとして閉じこめてしまおうとする狂おしいほどの純粋な思いはただひたすらに甘美で、直接的な表現がほとんど無いながらも、まばゆいほどの恍惚感と官能の気配を忍ばせているかのよう。
「ふたりだけ」で居られる世界に迷い込んだあとも、永遠にここには居られないと苦悩する真由人の迷いを前に、ふたりだけの思い合う絆があればそれを乗り越えられるはずだ、ときっぱりと思いを告げる千遙はただのあまえんぼうの子どもではなく、大切なものを守り通す意志の強さを持っていたのだと真由人と読み手である私たちが気づかされる終盤の展開はただひたすらに尊く、美しい。
目に見えなくとも二人の絆は確かにあり、そしてこれからも変化し続ける。蛹が繭を脱ぐように、身体と心の移ろいと共に。
二次性徴を迎える少年期の身体と心の移ろいに伴う戸惑い、呼応するような軋む痛みと、それらを乗り越えた先のあまやかな絆。清冽な空気の中でそっと切り取られる、きらめきと可能性に満ちあふれた物語。

――高梨　來



初夏のきらめきを感じるBL

「あたたかな掌」

著者	きよにゃ
価格	400円
ジャンル	JUNE
ブース	JUNE1「午前三時の猫」

文庫版 110P/2015.9.20 発行

「僕と一緒にあったまろ？」

冷え症の高一、悠真は美術室の絵にいつも癒されていた。
絵が見たくて美術部に入ると、美しい部長・小鳥遊のモデルに誘われる。
小鳥遊のモデルをし、冷えた手を暖められるうちに意識するようになるが、ある日小鳥遊の夢を見て夢精してしまい……。

憧れの先輩と体の反応に戸惑う、十五の初夏。

推薦文

「初夏のきらめきを感じるBL」

なによりぐっときたのは、悠馬くんのキャラクターです。まじめで素直で育ちがよさそう。いじらしくってかわいくて、手放しでいい子だなあと思える子です。なにより素敵なのは、彼がまだ心身ともにあどけなさを残した高校一年生だということ。悠馬くんは身体の育ちきっていないところを見込まれて、美術部部長の小鳥遊先輩の絵画のためにモデルをつとめることになります。未成熟な身体を美しく優秀な絵描きの前に晒し、写し取ってもらう。おまけに悠馬くんは冷え性なので、モデルの仕事が終わったら先輩に手をあっためてもらう。どきどきしますね。画家とモデルの関係はこうでなくっちゃという気がします。といっても、悠馬くんは純朴なので、わたしのような汚れた読者がにやにや見守っているのをよそに、甘酸っぱく憧れを育てているだけなんですが。爽やかです。でも、なんだか色気のある状況なのに本人は気づいてないって、よけいにやにやしませんか？　とはいえ彼もまるきり子どもじゃありません。十五歳、身体はたしかに大人になろうとしています。彼はある日、小鳥遊先輩の夢を見て身体を昂らせてしまいます。素直で純朴な悠馬くんです。体と心の乖離に大混乱で思い悩んでしまいます……うーん。にやにやします。と、こっちがにやにやし通しているうちに、美しくて優秀でちょっぴり大胆な小鳥遊先輩が、悠馬くんのことを放っておかないでいてくれるのでご安心ください。本書はBLを読みたいという欲を満たしてくれる作品でもあります。

一口にBLといってもいろいろありますが、高校生BLって、いちばんきらきらしていて王道なBLだとわたしは思います。こちらの『あたたかな掌』のきらきらは、作品のなかに流れる季節でもある初夏の印象です。きよにゃさんの文章は堅実で上質なので、悠馬くんのまじめさや素直さ、育ちのよさをより引き立てて伝えてくれて、爽やかな雰囲気を支えています。そして、初夏はこれからよりいっそう熱を帯びていく予感に満ちた季節でもあります。先輩とのおつきあいを経て、少年だった悠馬くんがどんな変化を遂げていくのか期待しながら、わたしはこの本を読み終えました。

——まゆみ亜紀

推薦文

「憧れはいつしか恋に……もどかしい思春期ラブ」

美術部に入部した高一の悠馬はハーフの美形で誰もが認める学園きってのアイドル・小鳥遊にほのかな憧れを抱くようになる。
絵のモデルを頼まれる合間、冷え性の掌を暖められるようになったことから二人の中は急接近し、悠馬はいつしか小鳥遊に特別な感情を抱くようになっている自分に気づくのだが――

男同士でありながら、後輩として慕ってくれているはずの小鳥遊をいつしか性的な目で見ていてしまった自分に気づき、自己嫌悪する悠馬の幼い恋心と戸惑いがいじらしく切なく、はらはらさせられます。
叶わない恋は諦めなければ――身を引こうとする悠馬ですが、このお話はＢＬです！笑　どこか思わせぶりで大胆な先輩の言動はすべて、かわいい後輩・悠馬へのアプローチだったのです。
気持ちを確かめあったのだから体も心もほしい。大胆な告白と共に、戸惑う悠馬を先輩は大胆に攻めまくります。

戸惑いに揺れながらも恋に溺れていく純情な悠馬くん、そんな彼の愛らしさに虜にされていきながら文字通り手取り足取りリードしてくれる小鳥遊先輩の大胆さにどきどきそわそわ、最後はハッピーな結末にニマニマさせられること間違いなし。ばっちり王道なかわゆい男の子たちのラブラブとエッチを堪能出来る、多幸感溢れる一冊です。

――高梨　來

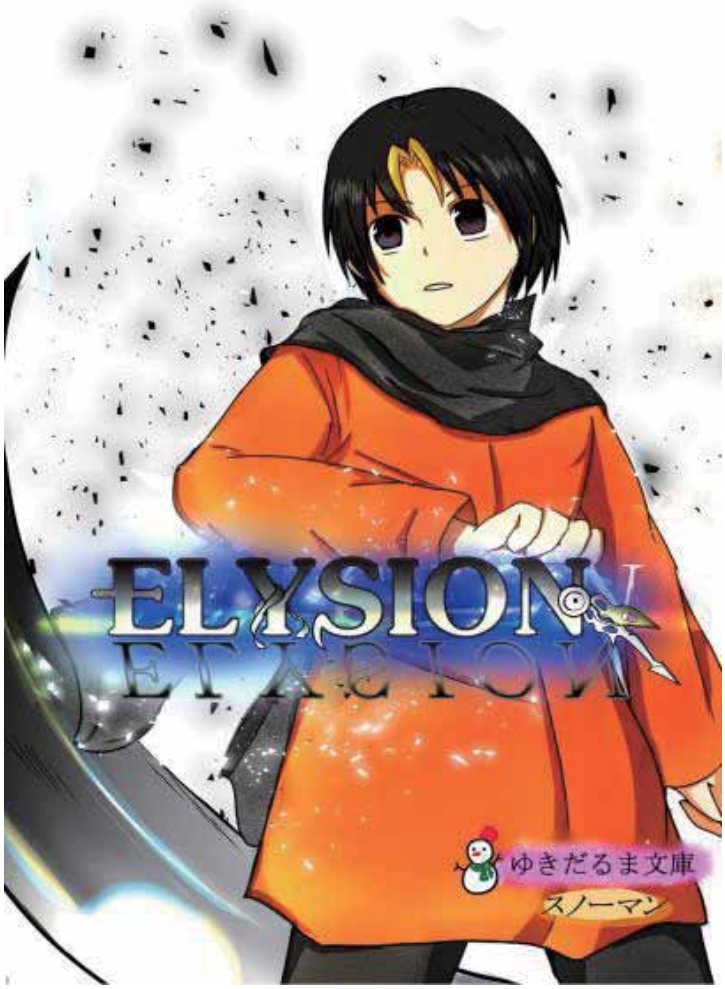
推薦文

高校一年生の悠真が憧れるのは、美術部の小鳥遊先輩。冷え症で体調の悪い悠真の手を、先輩がそっと包んで暖めてくれる。そんな先輩に、絵画モデルを頼まれて……純朴な青少年の甘々ＢＬ！

高スペックな先輩が、手取り足取り、純朴な主人公をエロエロな世界に導いてくれます。上品そうに見えて、先輩の頭の中はエロでいっぱいなのです！とにかくハッピーなＢＬで、ニマニマした若い二人のチュッチュ感を楽しみました！
私の大好きな「体調悪い時に介抱してくれる」場面があったので、そこだけ何回も繰り返し読みました。ごちそうさまでした！！

（注・宇野寧湖さんより頂いた感想を使って自薦させて頂きました）

――自薦



「ELYSION」

著者	スノーマン
価格	400円
ジャンル	ファンタジー
ブース	委託販売

魔物を倒して生活をする傭兵が人気職業となった世界ホワイトランド。

田舎の村から出て来た主人公ジークは、
官僚になるはずが根本的な手違いから
傭兵と魔法使いの養成学校『エリュシオン戦闘専門学校』に
入学してしまう。

個性豊かな仲間達と出会い、明らかになっていく世界の真実と
『人間性』を巡る喪失の物語第一弾！

友情とは、人とは…というのがテーマとなっています。

「キャラが繋がり連鎖する物語」

推薦文

とにかくキャラクターが素敵。
ひとりひとりもさることながら合わさった時の掛け合いや想い合いが最高です。
動きにもリズム感があり、読んでいて楽しいです。
世界観はサバイバルファンタジー。
ワクワクします。
大好きです！

—WSNB

推薦文

「続きが気になる作品」

先の方も書かれていますが、人物の人柄や仲間同士でのかけあいがとても魅力的な作品だと思います。

また、現在発行されている一巻で物語の雰囲気がしっかり伝わりました。主人公は王道の性格をしていますが、作者様の書かれている喪失の物語というのがどうなるのか、二巻以降が楽しみです。

また、文章もわかりやすく深く考えずに読める物語です。

――シオーネ

推薦文

「最高なキャラを、最高なストーリーで楽しもう！」

主人公ジークをとりまく仲間の大切な、何かを、思い出させる
学園モノファンタジー。
何故かジークには人が集まる。
少しずつ信頼関係を築き繋がる絆。
なのに痛快ギャグが満載！！
あなたも「死んだ魚のような目で」読もう。

――試し読み会感想

はやく「おとな」になるために。

「羽化待ちの君」

「Beautiful Days ～碧の日々～」

著者	まるた曜子
価格	400 円／ 200 円
ジャンル	恋愛
ブース	委託販売

わたしたちはゼロ距離で許しあうけれど重力と向心力と孤高を併せれば最適解はいつも遠距離。
あなたと一緒にいたいから、わたしはひとりで翔ける――

「羽化待ちの君」
小学６年生の八重原橙はとある再会から４年前の事件を思いだす。
「子供のまま潰されたくない、誰にも見つからないように『大人』になるんだ」
決意を秘め少女は蛹に籠もる。ただひとり、叔父だけを頼りに。
粗忽で胡乱な昆虫写真家の叔父を手伝う、一見甲斐甲斐しくて男に都合良さげで健気な尽くし系少女の、その本質を磨き上げる恋愛劇。これは、やがて飛ぶための物語。

「Beautiful Days ～碧の日々～」
あいかわらずパーソナルスペース極広の橙と、彼女を取り巻く人々のあたたかで穏やかな交流を綴る日々。要と橙を繋ぐ徴。静謐な巣。物理と心理的距離の最適解を模索しつつふれあう中で、彼女は目指した『大人』になれたのか。

「はやく「おとな」になるために。」

推薦文

まるたさんの作品は、どれも女の子がしなやかでかっこよく、おまけに可愛いのが特徴のひとつですが、この「羽化待ちの君」と続編である「Beautiful Days～碧の日々～」のヒロインをつとめる橙ちゃんはナンバーワンと言っても過言ではないハイスペックヒロインです。一家に一人とは言いませんが、ぜひお友達になりたい。橙ちゃんの手料理で、「僕の真摯な魔女」のすずのんや「花と祝祭」の絢音ちゃん、「淅瀝の森で君を愛す」のまお姉さんと女子会をしたい。そういう女の子です（ステマ）。

既存の恋愛ものジャンルにありがちな、いわゆる「お邪魔系・トラブル体質系・夢見るヒロイン」とは一線を画したヒロイン像は、あまり恋愛ものを読まないという方にこそ読んでいただきたいです。もういっそ、ヒロインと呼ぶのもやめたい。ヒーローです。私の。

本作は叔父さんと姪の、いわゆる歳の差（十八歳！）近親もの。橙が学生の頃から写真家として各国を飛び回っていた要は、橙にとってもっとも身近な「世界を見せてくれるふつうの大人」。身内からはダメのレッテルを貼られつつも、幼い頃に遭遇した事件のせいで、橙が抱く脆く性急な早熟願望をうまく受け止めつつ、日本での事務作業を任せるなど、自分の利益と橙の願望をすりあわせて最善の形に導いていく、みたいな包容力のある人物です。

ふたりとも、行動力の塊みたいな性格で、実務的、実際的。と書くとシステマチックで冷徹な人のようですが、ちゃんとけじめをつけられる人、という意味です。世間的にはおおっぴらにできない関係にあるふたりが、ふたりであるために必要なことをひとつひとつ着実にやり遂げていく。選び取り、あるいは捨ててゆく、その地に足が着いた描写とディテールの圧倒的リアリティで物語をぐいぐい引っ張っていきます。綺麗事だけではありません。苦みも失敗も味わって、それをも糧に成長していく。だからこそ描かれる希望が尊いのです。

いわゆる昼ドラ的な、どろどろした感情の交差ではなく、愛情は（ひとまず）前提、そこからの紆余曲折を楽しみ、寄り添う物語。えっちいシーンはえっちいですけど（R18だけに）、可愛いし祝福気分でいっぱいの、いわばボーナスステージです。お楽しみに。

こちらを好きな方は続編「Beautiful Days～碧の日々～」も間違いなくはまりますのでぜひぜひ。

――凪野基

推薦文

「恋が濃い」

主人公の少女・橙（ともる）が、少女から女性へと成長していく姿を描いたシリーズの第一弾。

序盤からハードな問題が待ち構え、メリハリの効いた展開ですが、シリーズを通じて細かな部分をよく調べて書かれており、情景描写の細かさ×人物の心の揺れがしっかりと描かれている点が特筆すべき作品です。

敢えて言うなら恋が濃い、味わいのある作品として推薦いたします。

——悠川白水

推薦文

「やがて飛び立つふたりの物語」

トラウマ持ちで心を閉ざそうと生きてきたヒロイン橙と、一見チャランポランで自由人なおじさん要。

大っぴらには言えないふたりが年の差・近親の障害をのりこえてしなやかに軽やかに、二人で飛び立つための生き方をもさくする物語。

逞しく力強い絆とちょっとドキドキするえっちな展開に……と、ドラマがずっしりしっかりとあって楽しめました。

——試し読み会感想

あなたの心に口笛の音が染み入り、優しい東風が吹くだろう。

「口笛、東風となりて君を寿ぐ」

著者	紺堂カヤ
価格	1800円
ジャンル	ファンタジー
ブース	委託販売

――喜びを望め。我は、それを与えることを望んでいるのだ――

若くして崙国の四分の一を治める郡主・慶。彼を両側から支えるのは、類稀なる頭脳を持った宰執補佐の女性・葉と、槍の名手にして美貌の元帥補佐・信影。彼らは国の思惑や自分たちの過去に翻弄されながら、大切な人たちが笑い合える未来の為、剣を取り、筆を取って戦う……。

二年半かけて完結した、大河ファンタジー。カラー口絵・作品の舞台となっている大陸地図もついています。

推薦文

「胸が苦しくなるような思いをもって描かれた登場人物たち」

本を読むこと自体はずっと好きなのに、いつしかファンタジーというジャンルからは遠ざかっていた。そんな私を再びファンタジーの世界へと誘ってくれた一冊。それが、紺堂カヤ著『口笛、東風となりて君を寿ぐ』である。

舞台は架空の国、崙国。崙国の郡部の一つ、志知郡の若き郡主・尊慶を主人公に、郡と国との対立、国と国との駆け引き、そして人と人との関わりをダイナミックに描いた力作だ。

読みだすとまず驚くのは、設定の緻密さである。国、郡、政府の機関、役職などが破綻なく組まれている。作中の導入部で解りやすく説明されているが、それでいて説明臭くならず、すんなりとストーリーに入れ、筆力を感じる。「設定が甘いのはイヤ」という人も「説明がくどいのはイヤ」という人も安心して読める。

そしてストーリーに入り込んでしまえばあとは「一気読み」必須！　飽きさせない展開、登場人物たちの葛藤や成長、ときに笑えてときに泣けるシーン描写。語りたいポイントはいくつもあるが、特筆すべきは登場人物の魅力だ。主人公・尊慶。まっすぐな正義感と、周囲を信じる目を持って民のために全力を尽くす。慶を支える女性官吏、玄葉。頭脳明晰、冷静沈着。過去に向き合いながら存在価値を模索し続ける。慶の親友であり盾である、呂信影。軍の重役にあり、精神的に強くもあるが、ある種アンバランスな二面性を持つ。三人の互いを思い合う気持ちが、政治や戦争という大きな波に巻き込まれながらも決して失われず輝いている。三人のほかにも、脇を固める人たちもとても魅力的！イラストも必見である。どの登場人物においても、一人一人が実に生き生きと、そして胸が苦しくなるような思いを持って描かれている。郡主である慶が「みんなを幸せにしたい」と願うその思いが切々と読み手に響いてくるのは、そうやってすべての人に対し作者が手を抜くことなく書ききっているからだろう。

そう。国同士のあれこれが絡むストーリーだが、作者がこの作品で描き出しているのは徹底して「人」だと感じる。誰かを好きになること、自分自身や他人との齟齬に葛藤すること、犯してしまった過ちに対する後悔、どうにもできないことへの悲しみや怒り、そして、大切な人に幸せになってほしいと思うこと、そばにいてほしいと思うこと。それを象徴するラストシーンまで、ぜひ読んでほしい。きっと読み終えたあと、あなたの心に口笛の音が染み入り、優しい東風が吹くだろう。

――伴美砂都

推薦文

「どの人物にもドラマを感じる、作り込まれた世界。」

圧倒的な文章力と、登場人物の魅力にひかれてぐいぐい読むことが出来ました。

とにかく面白い！　愛嬌のある登場人物や、彼らの心境、葛藤。この先どうなるかという期待から、ページをめくる手が止められません。

中華風ファンタジーということで難しそうな印象を受けそうですが、各設定が適材適所で書かれているため、混乱することはありませんでした。主要人物の奥深さもさることながら、脇役扱いになる登場人物ひとりひとりの言動にもドラマを感じ、『ちょい役』によくある『薄っぺらさ』は感じません。読み専の人はもちろん、執筆活動に勤しんでいる方でも納得できる一冊だと思います。

読み終わった後の満足感、そして、書き手特有の「負けてられない！」という執筆意欲が得られる貴重な一冊です。

――氷梨　えりか

推薦文

普段小説などを読まない私。友人に薦められ、読んでみると、その手が止まらない！！　主要人物だけでなく、脇役の皆さんまでも魅力的で、一気に世界観に惹き込まれます！　難しそうな世界観ではありますが、そんなことはなく、むしろ読みやすいです！　作者の思いもこもってますし、伝わってきます。私のお気に入りの一冊で、ぜひ皆様にも読んでいただきたい一冊です。

――桜うさぎ

夜な夜なプロレスやってる妖怪たちのBL

「よくないおしらせ」

著者	壬生キヨム
価格	800円
ジャンル	JUNE
ブース	JUNE 1「午前三時の猫」委託販売

絆を再確認する恋物語。
イケメンでファッションモデルでもある大学生　朝雛雅人と、気弱で流されやすいサラリーマン　白鳥七生がちゃんとくっつくまでのボーイズラブ小説。18歳未満の方は購入をご遠慮ください。

思いを確認しあった二人が、恋人同士になる前にちょっと間を開けたら、七生の前にハイスペック好青年朝雛誠人（雅人のにーちゃん）が現れて二人の間に割り込んできて……。

キーワード：複雑な血縁関係　家庭事情　遠距離恋愛　夜間の研究室　ショタ　媚薬　寝取られ　三角関係（解説より）

以上のイメージを裏切るほのぼの感です（？

「このお話でしか味わえない面白さがある」

推薦文

キヨムさんのBL小説はほかに『あくだま』を拝読しているのですが、ほんとうにふしぎなんですよね。

京都の町で夜な夜なプロレスやってる妖怪たちのBL、って聞くとちょっとびっくりすると思うんですけど、そこに「受けがオークションにかけられて攻めが落札する」って展開があったり、かと思えば思わぬ方向に話が転んだり。そんなストーリーを描き出す文章は味があったり美しかったり色気があったりで、それ自体に魅力がある。こんな話を書けるのはキヨムさんしかいないなあとごく自然に思います。

この『よくないおしらせ』もそんなお話です。「受けが媚薬と間違えて妙な薬を飲んでショタ化」なんてBLらしい展開があったかと思えば、ほのぼの。三角関係のお話だけどほのぼの。攻めはかわいいカモを飼っていたり魔法の鏡を持っていたりおとぎ話のようなのに、主人公たちの恋路にちょっかいかけてきたお兄さんはいい男だし恋人たちの睦みあいにはドキドキさせられるし色気むんむんなお話でもあって、翻弄されっぱなしです。

とにかく請けあいたいのは、このお話でしか味わえない面白さがあるってことです。読んでみてほしいなあ。

——まゆみ亜紀

推薦文

「一巻では足りない！」

この本は、昨年の文学フリマ東京の会場で手に入れて真っ先に読んだ。夢中になって読んで、スペースに来てくれたお客さんへの返答もおろそかになって、「すみません」と声をかけられるまで没頭してしまっていた。

朝雛きょうだいと白鳥さん（なぜか白鳥さんは白鳥さんと呼びたい）の、ちょっとむずかゆい三角関係。きっとキヨムさんだから、落ち着くべきところに落ち着かせてくれるはず…そういう信用はあるのに、「白鳥さん…！だめだよ、白鳥さん！」って服の袖をひっぱりたくなるような危なっかしさ。

その危なっかしさは、口下手というか無口というか、あまりおしゃべりの得意でなさそうな朝雛雅人くんにこんなことを言わせてしまうほど。

「あんたが、まだ、自分が全部自分のものだと思ってるなら、認識を改めたほうがいい。あんたには、今、自分の意思で勝手にできないことがある。あんたなりに俺を大切にして、俺に心配をかけるようなことをしてはだめだ」

夜の研究室・媚薬・ショタ、そして現実にすこしだけ混じりこむ、怪異のような「ひとにちかいけれどよくよく考えたら人じゃないよな？」っていう登場人物。

夢中になって時間を忘れて、本を閉じてから「もっと読みたい！　こんなところで終わらせるなんてご無体だわ…！」と身もだえしてしまう、そしてその悶絶を誰かと共有したくなる本なのです。

絶対おすすめ！！

——孤伏澤つたゐ

推薦文

「笑いと萌えがぎゅうぎゅうに詰まっている、BL展開ありのコメディ。」

晴れて付き合うことになった七生と雅人。だが、ダブリンで短期留学中に雅人が買った媚薬のせいで、七生が子供の姿に戻ってしまい——！？

「体は子ども、頭脳はおとな、か」

「事件が起きないといいんですが……」

「すでに起こっているから問題ない」

「出会い編」は現在売り切れとのことですが、登場人物紹介や後書きなどで補完できますし「七生と雅人は付き合う寸前だった」と覚えておけばOKです。主人公の七生は大学職員で鴨や猫とナチュラルに話せる特技がある26歳。誰に対しても敬語で（動物にも！）、七生がいるとその場が和んでしまうという癒し的な存在。頬を摘まれて「ふええ」と、およそ26歳とは思えない泣き声を出すけれど、そんなところも含めてかわいらしい。一方、七生の恋人・ツンデレ気質の雅人は、モデルをしている外見と裏腹につっぱっている感じ。（でも七生のことがかわいいと思って、要所要所で七生に迫ります）。ふたりの「出会い編」に続くこのお話は、雅人の兄・朝雛誠人（まこと）が七生に言い寄る男として出現。さらに媚薬を飲んでしまった時に泣きつく魔法使い「ことわりさん」や、彼の使い魔の黒猫・ねこきちさんなど、新キャラが数多く登場します。

このキャラたちの個性的なことといったらありません。仕事の付き合いでは礼儀正しく紳士的な態度だったのに、七生に貸しを作るや否や「じゃあ、一回ヤらせて？」と柄悪く豹変する誠人。普段は七生を「あんた」呼びしているけれど、誠人にちょっかいを出されたと知って「誰にも見せないように」車を走らせる雅人（このシーンは、男の嫉妬を表現してていいなぁ！　ときゅんきゅんきました）。ちいさくなった七生に「ずいぶん可愛くなったね、きみ」とことわりさんが言う時にも雅人は嫉妬していて、七生は皆に好かれて可愛がられています。家の内装なども「無印良品で買いそろえたようなシンプルさ」と想像しやすい表現で描かれていて、想像力があまりない私にも分かりやすかったです。

ほかにも、肩から落ちるシャツ姿の七生がかわいい！　二人の男から同時に求愛される受けが美味しすぎる！　ねこきちさんの毛に、七生と同じように埋まりたい！　……などなど、笑いと萌えが満載のキヨムさんワールドへぜひ一度、足を運んでみてはいかがでしょうか。

楽しい時間をお約束しますよ！

——きよにゃ

セキララ

「自費出版体験記 〜夢・現実・次の夢〜」

著者	病氏
価格	300円
ジャンル	そのほか
ブース	委託販売

大手自費出版会社から自作の短編集を出版した実体験一部始終をまとめました！　何も知らずに舞い上がり、疑問も持たずに突っ走る著者。

しかし時が経つに連れ、違和感を感じつつも見ないふりをする著者。そしてある日、現実を突きつけられて絶望に落ちる著者。というか本人なんですがね（笑）

若かりし痛々しい思い出ですが、創作活動をされる方にはぜひとも知ってほしいと思い、綴りました。ぜひ自費出版について生の声で知ってもらいたいです！

推薦文

「セキララ」

自分の失敗ネタをエッセイに昇華するケースは多いが、この界隈にいる人間なら目を留めたことが一度は必ずあるだろう「自費出版」。

ときに首を捻りながらも（そして熟考していながらも！）つい相手の言葉にのってしまう「人間（己）」を省みながら綴られる一冊。

端からみればね、「なんでそれ受けるの！」「そんなの常套句じゃん！」と言いたくなるわけですよ。でも渦中の人間の判断力ってきっとこんな。あなたもわたしも。

「自費出版」がどういうものか知っているから近づかない、という人も、一読するとよいですよ。

——まるた曜子

推薦文

「これでも自費出版したいなら出せ」

結論。
自費出版の魔の手。おごるな、思い上がるな。
振り返れ。
そういう言葉を我身にしみこませてから出版するか
考察出来る作品。
「ちょっとどうかな?」と甘い考えがよぎる人に
必ず読んだ方がいい本です。

——試し読み会感想

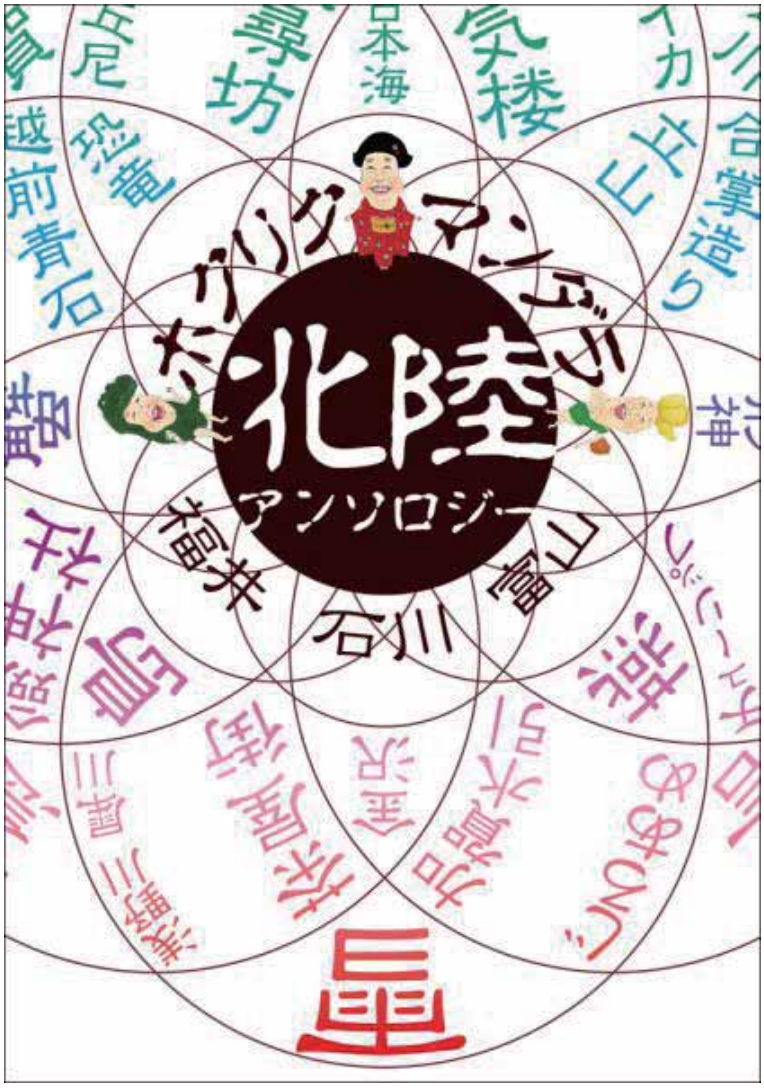
推薦文

「創作好きな人へ是非伝えたい！　美味い話しに気を付けて！」

著者が若かりし頃に無知であるがゆえに、某大手自費出版社と契約し、自作の短編集を全国販売したその末路を、当時の本人のブログを見返しながら綴っている体験記です。

自分の作品が認められたという喜び、作品を作る楽しみ、現実を突きつけられた怒り、自らの愚かさを気づかされて苦しみと、創作活動をしているかたがたにはぜひ読んでいただいて同じ思いをしないでほしいという思いです。興味があればぜひ読んでみてください！

——自薦



えっ、なにもないよ？ ただの田舎だよ？

「ホクリクマンダラ」

著者	北陸アンソロジー
価格	800 円
ジャンル	大衆小説
ブース	企画本部

福井・石川・富山をテーマにした文章メインのアンソロジー。
小説を中心に、短歌・紀行文・エッセイなど 26 作品を掲載しました。

北陸が故郷だったり、住んだことがあったり、今暮らしてる場所であったり、関わりがあったり、憧れがあったり、行ったことがあったり、興味があったり……
27 人の執筆者の、北陸への思いが詰まった作品集です。

推薦文

「北陸の魅力をあなたにも」

北陸三県をテーマにしたアンソロジーが発行される。このことを知ったとき、富山県のとある町、まさに北陸出身の私はまず、思った。

えっ、なにもないよ？　ただの田舎だよ？　需要、あるの？

たいへんに失礼なやつである。跳び蹴りを食らわされても何も文句は言えない。

しかし、ご縁があって寄稿させていただくことになり、故郷をテーマにみんなで作品を作るということはこんなにも楽しいものなのかというものを身をもって知った。同じように北陸をテーマに作品を書く方――それは北陸に縁のある方、北陸に関心がある方である――がこんなにたくさんいる！　ということは、ひたすらに故郷を心の底でディスり倒してきた私には新鮮な発見であり、不思議でもあり、なにより、とても嬉しかった。どんなものが読めるのだろう、どんな景色が見えるのだろうとお目見えがずっと待ち遠しかった。

そして、満を持して発行されたこの『ホクリクマンダラ』。主宰から一冊受け取り、電車の中で夢中で読んだ。本を閉じたとき、私は北陸三県がいかに、いかに多種多様で魅力あふれる場所なのか全く理解していなかったということに気づいたのである。寄稿された方々それぞれの中に、それぞれの想いでもって北陸という地が息づいている。それは小説、エッセイ、紀行文、短歌、イラストという形で、私たちに北陸の魅力を語りかけてくる。海へ向かってドライブしたり、ふらりと旅行に来てみたり、真夜中にホタルイカを見に行ったり、川や列車が擬人化されたり、ここに列挙するだけでもバリエーションが豊富で、もちろん、それだけではない。珠玉の作品たちが集まっている。ぜひ、お気に入りの作品を見つけていただきたいと同時に、ぜひ、北陸の地への旅のお供にこの本を連れて行ってほしいと思う。

――きりちひろ

推薦文「北陸三県の文学の曼荼羅」

北陸三県、福井、石川、富山を描いたアンソロジーです。
読むと三県それぞれに雰囲気が違うのが不思議。故郷の良い話から、思春期、青春、恋愛、SF、オカルト、擬人化と様々なジャンルの話が詰まっているのも魅力です。
作品に自分が感じたことを書かせて頂きました。（自作は除いてあります）

つばめかみぶくろ…自由過ぎるつばめが可愛いです。
旅のきっかけは…こんなふうに北陸のお酒を楽しみたいです。
私と彼女の過ごした季節…電車の駅のホームの博士に挨拶したくなりました。
そして春を待つ…北陸の冬の家族の暖かさにほっこりしました。
ちょTONTTU旅～福井県敦賀市～…県民も心惹かれる紀行文です。
海へ行く…お姉さん、おっとこ前です！
雪と明神…恋する乙女は逞しく、強くですよ！
青と白の町…地域ディスとピアSF。雪のような静かな情感。
海石榴…夢の話の中に小浜の海の匂いを感じました。
ロードムービー…まさに美しく流れる風景が見えるようでした。
古都隠恋慕…三鷹さんが良い味してます（笑）
海を飛ぶ…思春期の狭い世界に息苦しさを感じました。
ザ・ファースト・トラベル…男二人のじゃれあい二人旅が可愛いです。
橋の下で眠る影…北陸の小雨と、冷たい湿気にぴったりのほの暗さにゾクリと。
台風と運休と餃子の話…可愛くて仲の良い列車達。餃子と豚汁が食べたいです！
おばあちゃんとじろあめ…おばあちゃんの優しさに飴の甘さがしっくりきます。
金色の雪…鮮やかで情緒たっぷりの石川の風景。
青い光をつなぐと星座になる気がした…じゃりじゃりするんだ…。三人の関係が面白いです。
富山河川擬人化・少し遠出の高岡美術館編…最後の神通さんの言葉が藤子ファンとしてとても嬉しかったです。
そして、私は地獄へと来た…地域密着オカルトアクション。センポク様好き。
たまに帰る田舎のこと…お母さんの家の不思議な「お宮さん」の話が面白いです。
蜃気楼…富山の四季の景色が様々な思いと共に。最後の句が好きです。
Memory of The Gate…複雑に時の流れが変わるのに、面白くて、すいすい読めました。
さよならミラージュ…「三年間、ありがとう」良い言葉ですね。

——いぐあな

推薦文「北陸の新しい面を見せてくれるアンソロジー」

あなたは北陸ときいて、何を思い浮かべますか？

この本の中には作家さんたちの思う北陸が詰まっています。

ある人にとっては遠い行ってみたい土地であったり、
ある人にとっては懐かしいふるさとであったり、
ある人にとっては身近な生活圏であったり、

また、ある人にとっては次々と興味が尽きぬ魅力ある場所であったり。

行ったことがある知っていると思っていた北陸のまったく別の姿が隠れています。

縁あって関わらせていただきましたが、作者さんごとに感じる北陸がさまざまな形で表現されていて、
一つ読み終えるたびにこんな北陸もあったんだと楽しい気持ちになります。
本を読み終えるとき、読者さんの中で北陸がどんな場所になっているのか。
そう思わせてくれるような素敵なアンソロジーです。

——ごん

気高き光を放つ浪漫革命譚

「七都」

全巻無料 Sample
1～4巻

著者	桜沢麗奈
価格	無料 /700 円 /1000 円
ジャンル	ファンタジー
ブース	委託販売

＊2009 年度アルファポリス ファンタジーノベル大賞最終選考作品＊

動乱の時代に生まれ、革命に身を投じた少女達の友情、恋愛、成長を描く、架空革命少女小説。

戦渦の中で母を失い、葛藤を抱えながら反政府勢力のレジスタンスと関わりを深めてゆく十六歳の少女七都は、戦場で強引な誘惑を続ける敵の将軍煌に、反発しながらも惹かれてゆく。

そして秘密を抱えながらも、七都のそばにいたいと願う聖羅との深い友情。その絆はせつないほどに強く、けれど決して明かせぬ罪を負うがゆえに、何処までも儚い。

七都に想いを寄せる異国の青年。

第一都の男に攫われて囚われの身となった美しい姉。

まったく隙を見せなかった聖羅の、表面に見える強さとは裏腹な脆さを見抜いてしまった男。

戦乱の渦中に、いくつもの想いが交錯する。

推薦文

「《少女》を胸に秘める貴女へ　気高き光を放つ浪漫革命譚」

恥ずかしながら、これまで《少女小説》のなんたるかを私は存じ上げませんでした。少女、と呼ばれるような時期に触れる機会を持たなかったのです。それがあるご縁でこの『七都』を拝読した時、鮮烈に理解しました。苛酷で、熾烈な運命を気高く生きる少女たちの生き様――これぞまさしく、《少女小説》であると。

舞台は厳粛たる身分制度の敷かれた世界。第七都と銘打たれたその街は最下層の民が住まう場所と定められ、支配者たちの領域・第一都を始めとする上位階級者たちから奴隷のような扱いを受けています。その第七都を解放しようと立ち上がる革命軍――レジスタンスと第一都の軍が争いを繰り広げる、そういう時代に生を受けた英七都(はなぶさ　ななと)がこの物語の主人公です。

七都の母はレジスタンスを導く勝利の女神・英凛々子。しかし凛々子は第一都の残酷なる赤将軍の手により、戦場に命を散らします。父も既に亡く、唯一残された家族である姉の優花も第一都の男にかどわかされ、七都は天涯孤独の身に。相次ぎ家族を喪った悲歎と、自らより革命に命を捧げた母に対する激憤、相克する情動に心身を苛まれた七都に手を差し伸べたのは、謎多きシスター・聖羅でした。ふたりは次第に心深く絆を結び合うのですが、その間に存在した因果は彼女たちを非情な運命に誘うのです。

繊細な心情描写、幾重にも絡み合う人間関係、その中で交わされる恋情、慈愛、思慕、嫉妬、憐憫、絶望、希望――数えきれないほどの生の心情。激動の時代に生まれ、その中を駆け抜けなければならなかった彼女たちの生命が、ありありと目に浮かぶほどの現実味を持って描かれています。

母への複雑な想いを昇華させ、自らもレジスタンスの一員となることを選ぶ七都。その彼女を護ることを存在意義と定めながら、秘めた過去の重責に葛藤する聖羅。身分のために受ける屈辱に晒されながらも、凛然と生きる優花。少女たちの意志と覚悟、その生き様は息を呑むほど凄絶です。その周囲を彩る男性陣も個性的で、魅力に輝いています。

戦乱の世に力強く生きる彼女たちの姿に自然と感情移入し、そのしあわせを切に願わずにはいられない――そんな熱量を持った圧巻の《少女小説》、それが『七都』です。

全五巻中第四巻までが発行済み、最終巻が今秋リリースの予定。このドラマチックな少女浪漫革命譚の結末を、ぜひお見逃しなく！

――世津路　章

一巻の推薦文

架空世界を舞台に、レジスタンスの英雄の娘・七都が成長していく物語。第一巻では七都が母と姉を失い孤独に苦しみながら、戦場に赴いて剣を手に取って戦う決意をするまでを描く。幼いが母親のカリスマ性を持つ七都が、危うくも可愛らしく魅力的。

もう一人のヒロインとも言える聖羅は、拭い去れないような重い過去を持つ。神に仕え微笑みながら、自己意思を殺そうとする。第一巻最終部での百合子との対決は見応えがあった。とにかく強く清廉な印象を持つ女性で、七都との対比が鮮やか。

サイドで進む月華の残酷なエピソード、颯爽とした赤将軍の格好よさ、群青の七都を見守る優しい視線も、物語世界の彩りを豊かにしている。圧政、虐殺、貧困などの厳しいテーマを中心に置きながら、牧歌的な場面も散りばめられており、読み進めやすい。

何より平易で過不足のない文章が読みやすい。粗もないわけではないが、手垢のつかない同人ならではの小説としてはベストの文体だと思う。新書サイズで２００ページをこえるが、あっという間に読み終わり、ぜひ第二巻も読みたいと思った。

私が愛読していた頃の少女小説の持ち味をよく出していると思った。少女の家族関係を乗り越え、社会意識が目覚めるさまを描こうしている。同時に聖羅や月華といった「大人にならざるを得なかった女性」が登場するのも好感を持つ。これから三人がどう関係していくのか気になる。

——宇野寧湖

二巻の推薦文

「大人には言えない綺麗事を吐くのが少女という生き物」

私はどうしてこの作品にこんなに弱いのか。七都が「私は守りたい」と叫ぶたびに涙腺がゆるむ。いつの間にか、七都ではなく聖羅に近い立場にかったのだなあと今更思った。社会運動に関わったことがあると、純粋さが眩しすぎて泣けます。もうこんなこと言えない大人になっちゃったと思いました。

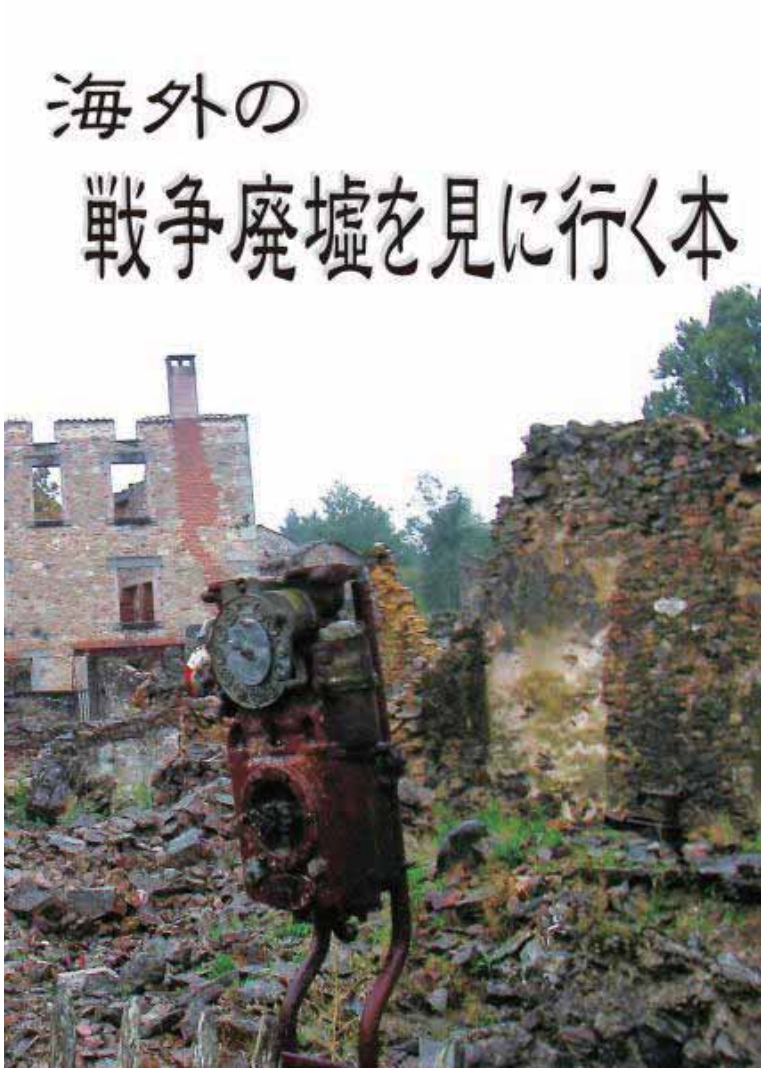
そしてこの作品は母娘の物語なのです。「母に愛された娘」の七都から、「母に愛されなかった聖羅」は期せずして母を奪うことになり、その母に成り代わるように、七都を愛することで、自分を満たそうとする。この母娘の繋がりの環は、愛というか呪いというか……。

母娘は個人を超えて、何代も続く因縁や社会構造の中で、囚われてなんとか愛を探そうとする。私なんかは「でもな、悪いのは大将軍やろ？　ものわかりいい父親ヅラしやがって」と怒るわけですが、聖羅は「父の娘」だったわけで、そこから「娘の母」になろうとする。これえぐい話です。

私が「七都」を愛読するのは、社会と繋がりのある作品だからです。個人の想いを超えた、歴史や社会構造のの中でもがく人間の姿が、私は好きです。矛盾や解決不能な問題があるからこそ、答えのない問いを小説は突きつけると思います。

その反面、出てくる男性キャラが、みんな強くてチートなところが、正しく少女小説だと思いました（笑）。これはね、お約束ですよね。そこがないと、ただの辛い小説になります。きちんと萌えや甘さやゆるさも残してあるところが、読者にページをめくるモチベーションになっていて、良かったと思います。

——宇野寧湖



「海外の戦争廃墟を見に行く本」

著者	りりあ
価格	500 円
ジャンル	評論
ブース	評論A「Re.set」

ポーランド フランス シリアの知られざる (?) 戦争廃墟を見に行くためのガイド本。

お気楽観光気分で行ける初心者向けの物件をチョイス (ただし、シリアを除く) これであなたも廃墟探索デビュー！

【気軽に行ける、とか紹介したな。あれは嘘だ】

これを作ったあと、程なくして情勢不安により、シリアには気軽に行けなくなってしまいましたが、忘備録として懐かしんでいただけたら幸いです。

また当時のシリアから周辺地域（ヨルダン・イラク）の国境越え情報と、行けなくなってしまったオマケでイスラエルのパレスチナ自治区のミニガイドを追加して、誰得感が２０％ほど増量してます。

推薦文

「レッツ廃墟！」

実はわたしも戦跡めぐりが大好きで、この本を見つけたときには「これは！　わたしのための本！」と思ってしまった。

いそいそと手に取って読み始めると、期待を上回る情報量の多さであふれる魅力にくらくらした。わたしも学生時代留学していたこともあって、ドイツの強制収容所などいくつか訪れたりしたのだが、ここに書かれている場所にはどこも行ったことがなくて、何故！　あのとき行っておかなかったのか！！　と悔やまれるばかりであった（アウシュビッツにくらい行っておけ……）。

それにしても、すごい行動力である。わたしだったら（というか、ふつうの人だったら）ビビってとても行けないような場所に身ひとつで飛びこんでいくガッツ。まじで見習いたい。この人はどこに行っても生きていけると思う。

地球の歩き方よりもある意味かゆいところに手が届く。戦跡が好きな方も、あまり意識したことない人も、ぜひ。

——試し読み会感想

推薦文

「参考にして廃墟を楽しみましょう。」

3ヵ国の廃墟の話や治安の話
小ネタなんかが楽しい語り口調で
書かれていて、とても楽しめます。
個人的には、クリストファー・クロスがいそう。の
一文、めっちゃ惹かれました。

——試し読み会感想

赤ちゃんのいないお腹からは夏の匂いがする

夏海はここだ

「赤ちゃんのいないお腹からは夏の匂いがする」

著者	にゃんしー
価格	500円
ジャンル	純文学
ブース	企画本部

鉄道に区切られた閉鎖された村、夏水（なつみ）。
モクモクとコビールを窓際に供えて夜這いを待つという昔からの風習も、
子どもを生んでいない女性が持つ穢名という制度も、
都会のドラッグストア「エデン」の流入によって薄れてきたはずだった。

年に一度の海祭りで妹のヒカリが巫女である「カミサマ」に選ばれたことによって、
生み生まれることを強く望む夏水の呪いを知る。

命の形を問う純文学。
群像新人文学賞一次通過作。

推薦文

「夏海はここだ」

ここで見て読みたいと思った。文フリで自ブース空けて買いに行った。引きずり込まれて一気に読んだ。電車移動中に片手に鞄を掛けると腕が重い。でも読んだ。旅先だったがホテルの湯船でも読んだ。スターブックスの製本がやけにカッチリ、ノドが開きにくく読みづらかった。関係ない。左右に傾けながら走り抜けた。

普段私は読書をしない。地元に好きな書店もない。フィクションを読むのは久しぶりだと思う。よい本に出会った。おもしろかった。

おもしろかったけど、今開いて部分的に読み返すと、痛い。今度は読み進められなくなった。

そして夏海はここだと思った。鉄道は最寄り駅が最寄っていないし架線がないから電車じゃなくて汽車だ。子を産むことへのプレッシャーが強いが夜ばいの習慣はない。ただしセックスするのは恥ずかしいこと、だったら結婚して子づくりしなさいという空気。瀬戸内の海に面した孤島で、引き潮でつながる島がある。子供が冒険心で渡る島。私も渡って、満ち潮になる前に戻ってきた。危ない遊びはしていないが、ここまで情景が揃えば十分だ。

夏海はここだと思った。そして私はババアだと思った。理由は言いたくない。自分や身の回りを投影する作品にはそうそう出会わない。

それが余計に、痛い。

——正岡紗季

推薦文

「タイトル・章タイトルがヤバい（語彙力。」

読んでいくうちに、（人を）好きと言う気持ち、子作り、セックスの意味や内容がわからなくなってくる。

読書とは、こういうことだったなあ。自分だけでは考えもつかない人の行動を見たり、知識を得たりできる。

閉鎖的な村が舞台で、その場所にしかないものや風習があっておもしろいなあと思いました。にゃんしーさんの作品では、「ともだちの国」も閉鎖的な場所を舞台にしているけど、その登場人物たちが作中であっけなく一度はその村を電車に乗って、あるいは車で、出て行くのがすごい。電車は（本数は少ないけど）あるし、道路も通っているから、物理的に、出て行くことは何にも難しくないことなのだ。

あと章タイトルがとても衝撃的で、思わずその内容を読みたくなってしまうので、ここに紹介させてください。

一、夏水の少年はババアで童貞を捨てる
二、カミサマは子どもを作ってはいけない
三、気持ちいいことは全てタモリが教えてくれた
四、カミサマの子宮は命で満たされる
五、エデンでは子作りができない
六、夏水の生理は命より重い
七、生まれてくる子どもはカミサマの血に塗れている

これだけ読んでも通じる文章と、内容を読んでから「ああ、これはこういう意味だったのか……！」とわかる章タイトルが素晴らしいと思いました。

あ、私はババアと小夏の作った関係がとても好きです！

——壬生キヨム

不思議な世界に取り込まれます。

「猫を飼う」

著者	オカワダアキナ
価格	300円
ジャンル	大衆小説
ブース	大衆小説A「ザネリ」

「誰かが勝手におれの名前と住所を使って猫探しをしている！」
池袋～雑司が谷～早稲田周辺、夢とうつつをさまよいながら、猫を追いかける個人的な冒険。

鶴森ハルオ・30歳、作家志望。ある日見知らぬ女が訪ねてきて、猫を差し出される。
女は迷子の猫を探すチラシを見てきたと言うが、ハルオは猫を飼っておらず身に覚えがない。
どうやら誰かが勝手にハルオの名前と住所を使ってチラシをつくり、雑司が谷じゅうにばらまいているらしい。
なし崩しに猫を預かるはめになるハルオ。犯人探しの探偵ごっこをしながら、猫に手を焼き、無職になり、女と距離を縮めていく。
そんな日々を過ごすうち、預かった猫がいなくなってしまい…。

墓と猫の町、雑司が谷を舞台とする日常不可思議物語！

推薦文

「不思議な世界に取り込まれます。」

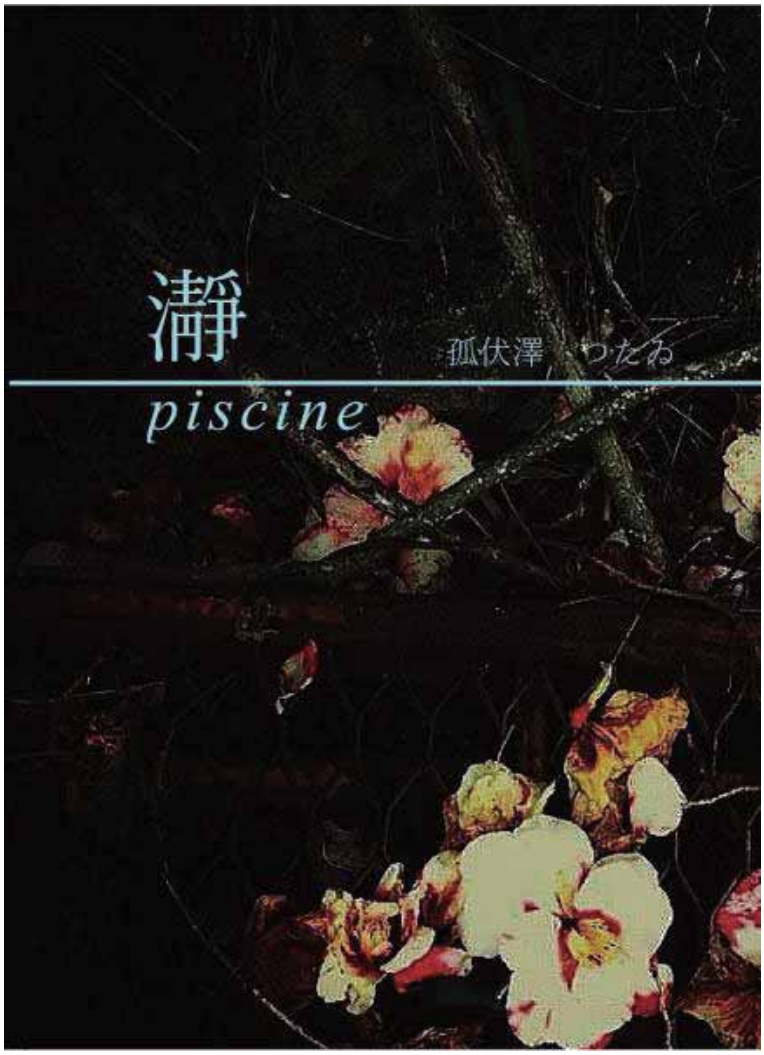
変わった形の本。
不思議な流れの物語。
化かされたように進む一連の話は
最後に向かって集束していきます。
読後感も不思議なのに少し気持ちが晴れるような、
良い作品です。

――試し読み会感想

推薦文

現実が乖離していく中でのささやかな希望。猫はかくも異界の生き物かと。飼われてやってる感が見え隠れしてにやり。
その後の彼の収入が若干心配ですが、ふたりとも仲よく暮らしていくっぽいところがなんとかなるさ感があってよいエンド！
傍らに猫がいれば。

――まるた曜子



芸術。

「瀞」

著者	孤伏澤つたゐ
価格	500 円
ジャンル	JUNE
ブース	JUNE 2 「ヨモツヘグイニナ」

水と水辺をめぐる三篇の物語

山村の怪異譚「ネムノタキツボ」
砂漠を旅する青の民とらくだの幻想文学「らくだ」
魔女と水辺のおとめの妖精譚「ローレライ」

人ならざるものとの交歓のきろく

★ヨモツヘグイニナの本がお初のかたにもおすすめです

推薦文

「ひとときが〝今も〟私の中で終りをむかえていない理由」

3作品が収録されている中でとりわけ〝ネムノタキツボ〟が心に残る。
私と〝サキ〟の少しの時間ひとときが長くみじかい。
静かに流れる時間を味わってもらえればおもしろいと思います。
伝承と物語がからみ、結末にはおどろいた。
交差しているかいないのか、私と〝サキ〟の気持ち。

——試し読み会感想

推薦文

「わたしはいいらくだ。」

「ネムノタキツボ」「らくだ」「ローレライ」からなる短編集。
特に推したいのは「らくだ」。構想ゼロ秒、初稿30分というのはすごい……。一番目を惹かれるのはティエニヴとらくだの関係なのだけど、それはいいところのひとつで、つまるところ、すごく好きなのだけど何が好きなのか分からない……。
これは文学ではなく芸術だと思う。
意味もなく中にたゆたい触れていたい。

——試し読み会感想

恐い夜、開きたい気分になる本

「あの夏の話をしよう」

著者	実駒
価格	100 円
ジャンル	詩歌
ブース	詩歌１「夜間飛行惑星」

とても短いお話
と
散文詩
と
俳句っぽいもの
と
短歌っぽいもの
に
パセリ程度の写真
を
添えてお届け

A6 変形（ほぼ正方形）24 ページ
フルカラー

推薦文

「煌めきの欠片に包まれた「誰か」のいた夏の記憶」

「あの夏の話をしよう」

印象的なタイトルと、抜けるような青空と海のまぶしいほどのコントラストが焼き付くような印象を与える、掌サイズの美しい一冊だ。

手にとって開けば、そこからあふれ出すのは美しい写真と、きらきらとまばゆくあふれ出す言葉たち（余談ではありますが、著者である実駒さんをモデルとした「みこまさん」の登場するまんが「みこまさんの理想的就職」の中で、みこまさんがキーボードを叩くのにつれて、水晶のようにきらめく言葉があふれ出す一場面を思い起こさせます）。

閉じこめられたいくつもの言葉たちにはどれも喪失の気配、戻らない「あの夏」の美しくも儚い永遠の日々が刻み込まれているかのようだ。

時は過ぎ、感じた想いも、過ごした時間もすべては流れるままに過ぎていく。すべてと共に、永遠に生き続けることは出来ない。だからこそ、わたしたちは「言葉」を、そこで得た想いを刻みつけるのだろうか。静けさの中で感じるいくつもの気配は、どこかもの悲しくも凛と美しい。

この小さな本の中に閉じこめられているのは幾人もの気配、「誰か」が見たもの、得たもの、失ったものの記憶だ。

入れ替わり立ち替わり現れる人たちとのほんの一瞬の出会いと別れ、切り取られた心象風景はポツンと胸に落ちた滴のようにいくつもの感情の色を落とし、目の前を過ぎ去っていく。

「言葉」の中ではわたしたちは何にだってなれる。どこへでも行ける。それは、こんなにも自由だ。

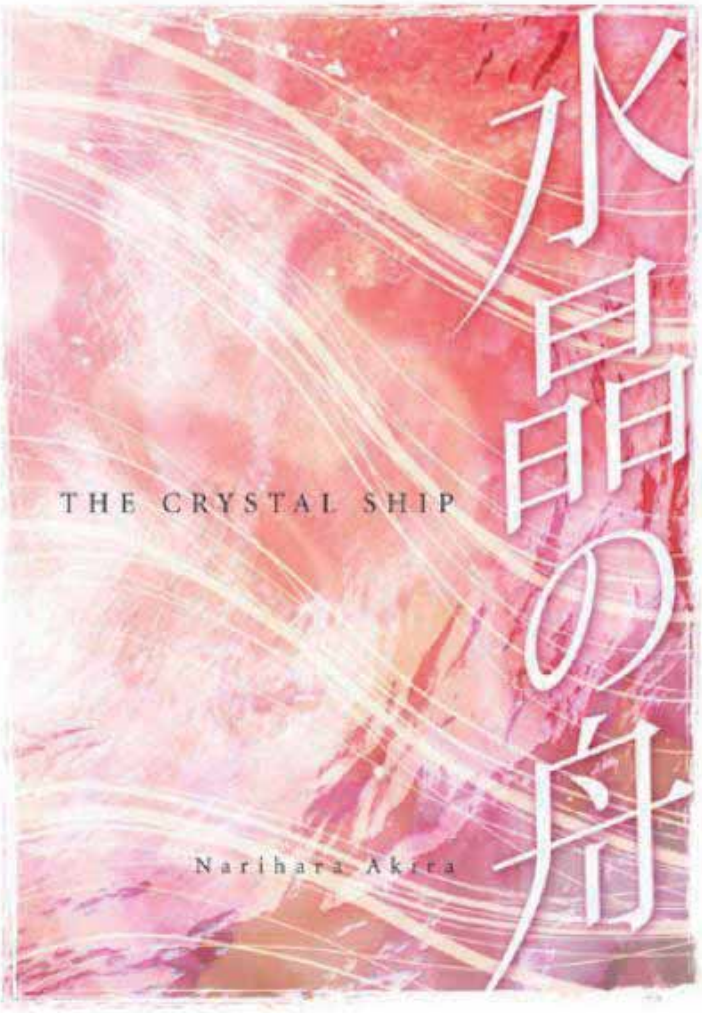
——高梨　來

推薦文

「カバンにしのばせて開きたい小さな世界」

写真も文も本のつくりも
この作品をひとつの世界にしている要素です。
物語部も写真詩も
ひとつの小さな全てで、ふとした待ち時間、
恐い夜、何もしたくない昼下がりに
開きたい気分になる本です。

——試し読み会感想



死という名のカードを、幾度となく裏返す。

「水晶の舟」

著者	鳴原あきら
価格	500 円
ジャンル	恋愛
ブース	委託販売

死の淵に立つ人たちに、強くひかれてしまうデラ。
そんな彼女が運命のひと、ドロシーと出会ったが、
それは至福であるとともに、破滅への第一歩だった。

解説は、幻想文学作家・津原泰水。

あなたの知らなかった「欲望」がここに！

推薦文「Narihara Akira と『水晶の舟』」

◆Narihara Akira（以下Nとする）と出会ったのは十年以上前のことで、その最初の印象を思い出そうとしているのだけど、僕自身、二十歳（はたち）の混沌のさなかに居たせいもあって、記憶の、とりわけ前後関係が曖昧模糊としている。やがて冬が訪れて、Nが白いとっくりセーターの愛用者であることを意識した瞬間や、会話の断片――Nの口から発せられたその偏愛する作家、音楽家や音楽家らしき人々の名前、Nの筆跡が奇妙に僕のそれに似ていて、走り書きを解読するのが僕の役目だったことなどが、切り刻んで繋ぎ合わせたテープを聴くような調子で面白おかしく現れては消え、また現れ、消えていく。

◆当時からNの書く小説には、ある種の読みづらさが付きまとっていた。それがNの思索の忠実な引き移しであるがゆえなのか、あるいは意図的な撹乱だったのか、じつは未だ判断がつかずにいる。チェスタトンの軽妙や中井英夫の律儀さを引き合いに出すのはたやすいが、それらを経過したからと言うより、べつの多くを経過しそこねたゆえの作風に思えた。僕のような無節操な小説読者にはいささかもどかしい面もあった。つくづく、読者とは身勝手なものだ。

◆『水晶の舟』はそのNがふと、普段とは違う楽器を爪弾いて見せたような作品だ。旋律はNのものに他ならないが音色が違うので、一瞬とまどう。僕にとりNの資質を理解しなおす好機だった。相変わらず衒学的だし、物語が論理の軽業に牽引されていくのもいつものこと。しかし語り口が――楽器とすれば、発音までの物理的構造が、決定的に違う。

◆『水晶の舟』はたぶん、現在のNの自信の現れなのだ。どういった素材をどう調理しようと結局Nの味になる。小手先のレシピではない、とNがほくそ笑んでいるのが見える。

◆『水晶の舟』でNは、死という名のカードを、幾度となく裏返す。最後の一行まで裏返し続け、そのたびに新らしい唐草模様が現れる。いかにもといえばいかにもなラストで、放り出された読者は、模様の冬枯れた最後の姿を探し求めるのだが、じつのところNは冒頭でそれを提示している。安っぽいオルガンとギブソンのSGとジャジィなドラムを従えた、モリスンの歌に託して。（Feb 9,1997）

――津原泰水

推薦文

「死への欲望が、心を揺さぶる」

「死」に対する欲望を秘め、揺らぎの中にいた
二人の女性の出会いとそれから――
心と肉体のひきさかれるような痛みとさけびが痛烈です。
「欲望」のふちを覗きこんでしまったかのようなスリル

――試し読み会感想

。この物語は、「どうしようもない関係」の先にある

「淅瀝の森で君を愛す」

著者	まるた曜子
価格	500 円
ジャンル	恋愛
ブース	委託販売

懐こい笑顔で周囲を魅了し、ぼやんと暮らす義姉の連れ子《弟》なあ。
彼の養育を一手に引き受けて真っ当にすべく奮起する《新米姉》まお。
仔猫がじゃれ合うような姉弟のまじらい、あたたかでおだやかな家族の営み。
しかし幸福は好意に崩れる———

惑う子供達の 20 年の漂泊。
ふたりの密やかな戦いの日々の先にあるものは———

推薦文

「人を愛することの尊さ」

この物語は、子どもの性的虐待を大きいテーマとして取り扱っている作品である。が、テーマとは別に、この物語の魅力は主人公〈まお〉の愛情だと思う。

〈まお〉は、幼児期に性的虐待を受けていた子ども〈なあ〉を、そうとは知らず、弟のように愛す。結果としてそれは〈まお〉にとっては悲劇だったのかもしれない。彼女はそれによってたくさん傷つき、苦しんでいく。彼女自身も、大切に思う〈なあ〉を傷つける。お互いにお互いを傷つけて苦しんで、それでも〈まお〉は〈なあ〉の手を放すことができない。逃げても逃げきれない。〈なあ〉が手を伸ばせば、彼女はそれを突き放すことができないのだ。それは良い結果を生まないかもしれない、余計にお互いを傷つけるだけかもしれない。けれど、何度も何度も選択を迫られるたび、自分自身が傷つけられる可能性を天秤にかけて、それでも最終的に〈なあ〉を選び続ける彼女を、私はとても尊いと感じた。自己犠牲とはまた違う。傷つきたくないという恐れと怯えを抱えながら、間違った結果を生むかもしれないと思いながら、それでも愛した人を信じようとする〈まお〉の心は、抱きしめいほど愛おしい。

「なあは、あたしが育てたんだから！」

この言葉に込められた思いを、読んでみてほしい。

——なな

推薦文「苦しみの先にあるものは？」

「性的虐待を受けた子ども」をテーマにした作品はたくさんある。「淅瀝の森で君を愛す」もその一つだ。幼少時に大きな性のトラウマを持つ少年〈なあ〉は、美しい容姿と「社会に適応しにくい不安定な精神」を併せ持つ。十四歳の少女〈まお〉は、兄の結婚によって〈なあ〉と暮らし始めた。世話焼きの〈まお〉は、常識知らずの甥っ子の面倒を甲斐甲斐しくみる。家族的な絆の中で、〈なあ〉は腹を空かせた子どもが食べ物を貪るように、愛を得ようと〈まお〉を求める。その結果、〈なあ〉は大人になっていく中で、決定的な間違いを犯し、事態は急転する。

この物語は、虐待を受けた〈なあ〉自身ではなく、彼を救おうとする〈まお〉の視点から描かれている。可愛い天使のような〈なあ〉。そして、相手を愛する方法を知らない〈なあ〉。〈まお〉は、そんな〈なあ〉のありのままの姿を、受け入れようとしながらも、彼の病んだ世界に巻き込まれて傷ついていく。この物語の主人公は虐待の「被害者」ではなく、「その周りの人」である。

〈まお〉は〈なあ〉との依存関係に苦しみながら、徹底的に「〈他者〉を救おうとする〈自己〉」と向き合うことになる。〈まお〉はその過程の中で、自分もまた、世間一般とは異なる「人の愛し方」をすることに気づく。〈なあ〉との関係があったからこそ、〈まお〉は「人の愛し方」という問題から逃げることができなかった。その結果として〈自己〉のあり方を捉えなおし、相対化していくことができた。この小説は、14歳の少女が、「理解できない〈他者〉」の存在に悩み、葛藤することを通じて、大人の女性として成長し、自立していく道筋を描いているのだ。

「誰かを愛する」ということは、普遍化して定式化できるものではない。十人十色の愛し方がある。私たちは、それを「当たり前」だと思っている。なのに、日常生活では、ぼんやりと「恋愛」や「家族」のあるべき姿を、勝手に前提にしてしまう。だから、そんな日常生活が壊れて、「当たり前」が通用しない相手と取っ組み合って付き合ううちに、初めてその「人の愛し方」の規範は姿を現す。穏やかな生活を失うのと引き換えに、規範から解放され「愛すること」の自由を手にすることができるのだ。この物語は、「どうしようもない関係」の先にある、いや、あって欲しいと願うような「希望」を描こうとしている、と私は思った。

——宇野寧湖

すこしだけずれた異世界にいるみたい

「白黒川柳」

白黒川柳

著者	小出マワル。
価格	200 円
ジャンル	詩歌
ブース	委託販売

小出マワル

私が撮った路上のモノクロ写真に、川柳を詠んだ歌集（コピー本）になります。

写真は大阪の小さな街で撮ったものが中心で、写っているのはささやかな日常です。それは一般的に認識される、美麗な写真とは違うかもしれません。そういった 街のモノ、コト、ヒトをとらえた少し固い写真に、ゆるい川柳を詠んで合わせてみました。写真だけでは分かりづらいことに、補助線を引くような川柳にしたつもりです。

ひとつひとつの写真と川柳に、技巧的な上手さはないかもしれませんが、通して読んでいただいて、感じ取っていただけるものがあったら、うれしいです。

推薦文

白黒の写真に川柳がひとつずつ付けられている
写真集。どれもすこしだけずれた異世界にいるみたい
で、川柳が写真に時間を遡っているような奥ゆきを出して
いる。
「案内は直進ですＢＡＤでも」という川柳がとくに好き。
どんな写真に寄せられたものかは、ぜひ実物で
御確認ください。

――試し読み会感想

推薦文

「ソリッドな写真とゆるい言葉」

自分で撮影した路上のモノクロ写真にあわせて詠んだ川柳
を、コピー本にまとめた３２ページの白黒世界。
ちょっと固い目の写真に、ゆるい言葉を合わせてあります。
写真と川柳を合わせて楽しんでいただくもよし、写真だけ見
ていただくもよしです。

――自薦

竜をめぐる愛憎劇

「輝く瞳に夜の色」

著者	木村凌和
価格	100円
ジャンル	ファンタジー
ブース	委託販売

その夜、竜は恋をした。
竜を召喚する女と、召喚される竜をめぐる情念。
第70回～84回フリーワンライ作品集短編連作。

推薦文

「竜をめぐる愛憎劇」

少女たちに竜を召喚させるための施設を舞台に、それぞれの登場人物たちのプライドや、愛や、陰謀が絡み合い、大きなうねりとなって収束していきます。

人と竜。誰もが強い想いを持ち、皆がただ、自らの信念感情に従ってまっすぐにぶつかり合う。そんな登場人物たちには否応なしに惹き込まれますし、彼ら彼女らが巻き起こす激しい展開には胸を揺さぶられます。

ファンタジー世界で繰り広げられる激情のぶつかり合い。一読の価値があると思います。

――試し読み会感想

推薦文

オフィーリアが竜を召喚したらしい。

修道院を騙り、女魔術師だけを集めた施設の目的は竜の召喚だった。女たちの焦りと嫉妬、疑念と熱情が渦巻く中、ある噂が流れる。『オフィーリアが竜を召喚したらしい』噂をきっかけに動きを始める陰謀と三つの愛憎。

ファンタジーでありながら、登場人物の感情を描くことに重点をおき、感情のみせるみにくさとうつくしさを伝えることを目指した。

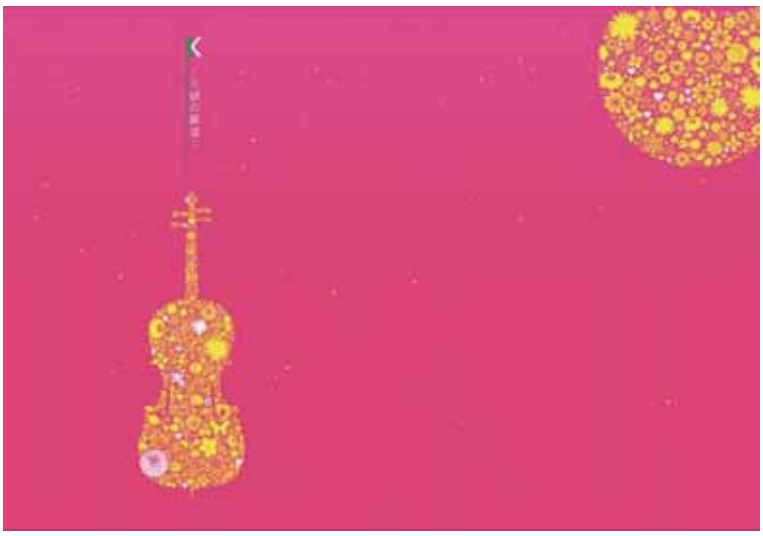
14編の短編連作。フリーワンライ作品集。

――自薦

あなたはご存知ですか？　《長女》の中に潜む怪物を――

「K～天獄の厳霊～」

著者	浮草堂美奈
価格	200円
ジャンル	ファンタジー
ブース	ファンタジー3「浮草堂」



ヘンデル「オラトリオ「ソロモン」シバの女王の入城」―。
バイオリンの音と共に、私は殺人鬼に誘拐された。
見せつけられる残酷な殺戮。
何故、こんな目に遭わないといけないの？
その理由を、音色が教えてくれた。

推薦文

「あなたはご存知ですか？《長女》の中に潜む怪物を――」

全国の長女に捧ぐ衝撃作…日常から非日常へ急転直下、なのに目が離せずのめり込んでしまうのは、物語の中核である〝彼女〟の感情と経験に少なからず共感してしまうから。壮大な長女あるあるきたでェ…！

そりゃね、長男も次男も次女もそれぞれに大変なのは、わかってるんです。でもね、長女だって辛いんです！　この話くらいの鬼を心に棲まわせているんです…。各所で「女の子でよかったわね」という言葉を聞いたときに感じる気持ちの悪さの正体が、この作品を読んで見えたような気がします。

〝長女だから〟という呪縛は、戦争屋の力を以てしてでないと断ち切れないものなのか……〝長女〟のなかに渦巻く残虐性を、容赦なく描き出されていたことに、ただただ感嘆でした。うん、でも、戦争屋さんのお世話になる前に話しあいして解決しよ？　針は嫌だもんね？

駆け抜けるような勢いで進む物語ですが、叙述的な仕掛けもあって思わず何度も読み返してしまいます。決して戻ることのない道を選んだ〝彼女〟に敬礼を。

『K』シリーズはWEBで掲載されている長編シリーズに絡みがあるとのことですが、同人誌版はいずれも独立していてどこからでも読めるとのこと。容赦ない展開を求めるあなたはぜひ！

――世津路　章

推薦文

スピード感のある強烈な展開。抑圧と解放。
その中にある、家族という檻。
『長女』にかける拘りをひしひしと。

――まるた曜子

共感はけふよりポルノと成り果てる　まくらに青き蜜柑を飾れ

「デミウルゴスと光暈」

著者	かかり真魚
価格	200円
ジャンル	詩歌
ブース	詩歌B「ゲラサ」

「不毛さに引き攣るほどに苦しめられつつ、私を現世に生かし、また私が真に愛せるものは不毛さしかないような気がしている。嗚呼、充足の微睡みの間延びしたつまらなさ！　絶え間ない希求と結果の裏切り、常に何かが足りていないという確信と求めずにはいられない呼吸器の叫びを、私は深く愛する。――さあ、私はすべてに火をつけよう。」神学や哲学を基盤とした世界観で詠まれた歌集です。日常と聖なるものとの交わりの温度、速度、連れて行かれる枯野のこと。「神の沈黙」「聖愚者」等をテーマにした短歌連作などが載っています。

推薦文

「短歌に持てるかぎりの怒濤」

短歌は一抹のさびしさを摘む詩型と考えていました。『デミウルゴスと光暈』はそのような内気なものではありません。怒濤のごとく景色と感情が押しよせ、読む私を飲みこみます。ひとつひとつの歌がシャウトのよう。

共感はけふよりポルノと成り果てる　まくらに青き蜜柑を飾れ

立ってゐる其の背微かに反りて嗚呼！　きみを見るときいつも泣きたし

どうかこの眩暈をあなたにも。

――へそ

推薦文

「「夜の海」の底にたゆたうもの」

稲光のように貫かれる鋭い言葉がこの身を容赦なく突き刺す。行間から立ち上るのは、燃えさかるような熱だ。身を焦がすようなその熱さは強烈な渇きをこちらへと伝える。

強烈なまでの光と闇とのコントラストはまるで、宗教絵画を思い起こさせる。

共感はけふよりポルノと成り果てる　まくらに青き蜜柑を飾れ

夜はきみ、紺きわまれるくらがりに哀しみいろの向日葵燃えよ

（放火）

かみさまが入れ忘れたのだ一切をうつくしいきみ泣きもしないで

いつからか眼がよくなったきみのこと神さまみたいにならないでいて

（白痴、或いは僕の友達）

ふらここの軋みだらうか違ひますあなたが軋み沈んでゆくのだ

悲しみで蛾化したひとおびただし彼らの影でつくる鉛筆

（イヴァン）

旧漢字、仮名遣い、ひらがな。言葉のリズムと呼吸を意のままに操りながら綴られる三十一文字の短詩の中から浮かび上がるのは、「何者か」に必死にあらがうかのような狂おしいほどの魂のありようだ。

それはきっと、真魚さんが言葉の世界で潜りながら波に呑み込まれまいとあらがう「夜の海」の底から引きずりあげてきた物なのだろう。

――高梨　來

彼らが自由に飛ぶときは、きっと、すべてを失ったとき。

「羽人物語」

著者	咲祈
価格	900 円
ジャンル	ファンタジー
ブース	委託販売

いつか、地上に棲めなくなった人々は、
《方舟》をつくり、空へと逃れた。
滅びをもたらす《かみさま》の影に怯えながら、
雲に隠れて、空を往く。
飛べるこどもは雲の外で、かみさまと戦い、方舟を守る。
飛べないこどもは夜の中で、からだを拓き、おとなを迎える。
そして、飛べなくなったこどもは、やがて次のおとなになってゆく。
空という檻の中で。
失って、喪って、うしなって、それでも彼らは願いつづけた。祈りつづけた。
生きるという、罪と、贖罪と、希みを。

推薦文

「彼らが自由に飛ぶときは、きっと、すべてを失ったとき。」

空を飛べるからといって、自由だとは限らない。大切にしているものが、同時に彼らを縛るものでもある。空を飛べる子供たちと、飛べない子供たち、そして、かつて子供だった大人たちが、空を飛ぶ「方舟」を舞台に繰り広げる和風ファンタジー小説。

登場するのは、方舟の外を飛び、時に命をかけて戦う「羽人」と呼ばれる子供たち、体を売る少年少女、飛べなくなった大人たちといった人々。地上を追われた彼らにとって、この「方舟」だけが残された世界で、この小さく脆い人工の世界を維持するために、あらゆるものが犠牲となり、あらゆる自由は奪われ、彼らはこの「方舟」という世界の一部として機能し続けている。そんな中にあっても、彼らがそれぞれ大切なものを守ろうとする姿が描かれている。

誰しも特別なもので在り続けることはできず、大切なものを守れるほどの強さには及ばず、捧げられるものには限りがあり、結局のところすべてを失うしかないのかもしれない。そんな悲しい予感が、物語全体に霧雨のように降りかかっているのだけれど、一方で、物語を未来に繋ごうとする登場人物たちの意志が随所に感じられて、それが真ん中にすっと通る芯のように心強い。そして、丁寧に選び取られた言葉、春先の清流のような文章が、この物語を優しく彩っている。

この物語の中で、何人かの登場人物は、名を変え、姿を変え、己の在り方を変えていく。それが、とても美しい。自分の身ひとつ自由にはならない世界に生きる彼らが、あらゆるものを失いながら自分の在り方を選び取っていく様を、見てほしいと思う。

（ところでこれは思い切り心の声なのだけれど、登場人物の中では「大人」に分類される「柊」さんを全力で推させてほしいんだ…咲祈さんの御本はどれも素敵なのだけれど、この1冊を選んだのは彼がいたからです。なんかこう、ずっしりとめんどくさいもの色々抱えたややこしい大人が好きなんだ…）

——佐々木海月

推薦文

「世界に没頭出来る作品」

咲祈さんの物語は、幸福と絶望と空虚のクッションが、まるで囲むように置いてある箱庭のような世界だと、勝手に思っている。

愛情と執着、搾取される子供、欲にまみれた大人、そんな中でたった一つ信じられる魂の片割れ。モラトリアム、和の世界観。

上の言葉にぴんと来た方にぜひ、読んでほしい。きっと満足できる世界がその本の中に詰まっているから。

——服部匠

すべての「生存者」たちへの贈り物

「白蜥蜴の夢」

著者	宇野寧湖
価格	800 円
ジャンル	恋愛
ブース	恋愛 1「ヤミークラブ」

文庫フルカラーカバー（オフセット印刷）、本文モノクロ 282 頁（オンデマンド印刷）。

【小説】高校で英語教師をしている聖羅は 30 歳の誕生日を迎えた。友人も恋人もいない孤独な日々を穴蔵のような古アパートで過ごしている。「自分を変えたい」と決意して、「処女を捨てる」ことにした。春の陽気の中、SM バーに迷い込んだ聖羅は、同じ学校に勤務する「保健室の先生」に遭遇。彼との一夜を迎えることになり……「取り返しのつかない過去」を抱えながら生きる女性の「回復」と「赦し」の物語。

【長めの本文サンプル】http://www.pixiv.net/novel/show.php?id=6482849。

推薦文

「すべての「生存者」たちへの贈り物」

大人とはある一定の年齢となれば、何か特定の経験を積めば自ずとなれるものではなく、みな不完全で危うい子どもの自分を覆い隠す仮面を付けて演じているだけなのかもしれない。成長過程の危うい体と心を持て余した思春期の少女たちを保護者から一時的に預かる「学校」という場を主に舞台としていることから、受けたのはそんな印象でした。自分を変えよう、と踏み出した聖羅はひょんなことからサディストだという保険医の先生、秋人と恋人になるのですが、凝り固まった聖羅の体と心を文字通りほぐしてくれた秋人もまた、表の顔である「保険医」と裏の顔である「サディスト」の仮面の下で、癒えない傷を抱えた子どもであることが示されます。大人とは結局は幾つもの傷を抱え、時にそれをやり過ごして、それでも生き延びることを諦めなかった生存者であり、今現在もがき苦しむ子どもたちに出来ることがあるとすれば、彼らに真摯に向き合い、寄り添うことなのだろうか。問題を抱えた生徒たちと向き合うことは、かつての少女だった自分と共に生き続ける聖羅への問いかけのように重くのしかかります。

重いテーマを扱ってはいますが、空想と現実の世界を行き来しながら、初めての恋人や友達との関係性の築き方、はたまた自分らしいスタイルの見つけ方に四苦八苦し、時に空回りする聖羅はとてもチャーミング。起伏のある展開と個々のキャラクターの魅力を軸に、どんどん読ませる力に溢れています。

逃れられない過去を受け入れ、赦すこと。本当に大切な物を選ぶこと。不完全な思いを預けあい、時に傷つけあいながらそれでも「誰か」と共に生きることを通して、聖羅は自身の生きる道を見つけ、自分を守ってくれた空想の世界を手放す決意を決めます。自分の居場所を、手に入れられるかもしれない安寧を手放してでもすべきことを追い求め、旅立とうとする聖羅の姿はどこか、物語の虚構の世界を通して違う人生を生き、そこからまた現実へと戻っていく私たちにも重なるよう。全ての「生存者」たちへの優しいまなざしに心を掬われるかのような、とても優しい物語でした。

——高梨　來

推薦文

大人というのは子供に見栄張ってがんばる生き物でなければならないというのが第一の感想。先生群と生徒群。まだ未知のものとかつてそうだったものの対話。現実と幻想の対話。本音と建て前。

聖羅は自分の事がわからない、他人のこともわからない。わからないなりになんとかなってきてしまっている。けれどそれを平穏だと自分を騙せず、ついに一歩踏み出す。踏み出し方がふるってる上にナナメ上で、着地がうまくいったのは本当にラッキーとしか言いようが無いけれど期待は確信になる。ここから彼女の再生はスタートするのだと。幻覚と（自覚あるまま）話し、何度も内省を促される聖羅。けれど、それまでずっと同じ職場だったはずの職員室には友人ができ、学内の保健室には恋人がいる。同じ世界のままなのに、歩を進めれば違う様相が見えてくる。合縁奇縁といわれるもの。生真面目すぎる聖羅の、周囲との斜めな問答は、彼女を応援したくなる仕掛けであり、テーマの割に明るく読めるのはコミカルな会話劇があるからこそ。そして幻覚も夢も最初のおどろおどろしい対話から滑らかに戯画化され、決着のシーンはむしろ童話のよう。聖羅の内面の変化は聖羅の視覚の中でも姿を変えていく。もちろん一直線にうまく行ったわけではない。行きつ戻りつ、そして外を向いたことによって友人の、恋人の、生徒の、上司の、苦しみや間違いも流れる風景から本流の中へと身を置くこととなり聖羅も傷つく。けれどそれも聖羅の糧となる。教師として大人であり、内面に子供を引き摺ったままの聖羅という女性の、選択と成長がとても清々しい物語。R18ですがその辺りの場面はそんなに多くないですし描写も短めなので気になる方はぜひ。

ところで（ここから素）、サディストって触れ込みだった保健室の先生はエー、むしろMだよねこの人……。あと、個人的に《初めての友達》牧野先生にはがんばって欲しいです。応援。共依存の気持ちよさから抜け出すの、すごい決意だと思う。これも大人が子供に見せたい虚勢。空威張りでも、心は震えていても、子供に安心をあげたい気持ちは本物。聖羅さん、友達大事にしてね。

——まるた曜子

Ａ－Ｚで何が紡がれる？

「地獄に落ちる為の 26 のメソッド！」

著者	弐杏
価格	400 円
ジャンル	詩歌
ブース	企画本部

はいぶりっどぽえむの登場だ！

はいぶりっど [hybrid]……なんか混じってること
ぽえむ [poem]……たのしいこと
（おとそ大学国語辞典より）

ＡからＺまでの２６のアルファベットにまつわる詩を読んで
たのしくなってね。

[注意]
牛乳を口に含んだまま読むことを推奨しません。

本作について読者の方からたくさんの反響をいただきました。
ありがとうございました。
http://togetter.com/li/723369

推薦文

「Ａ―Ｚで何が紡がれる？」

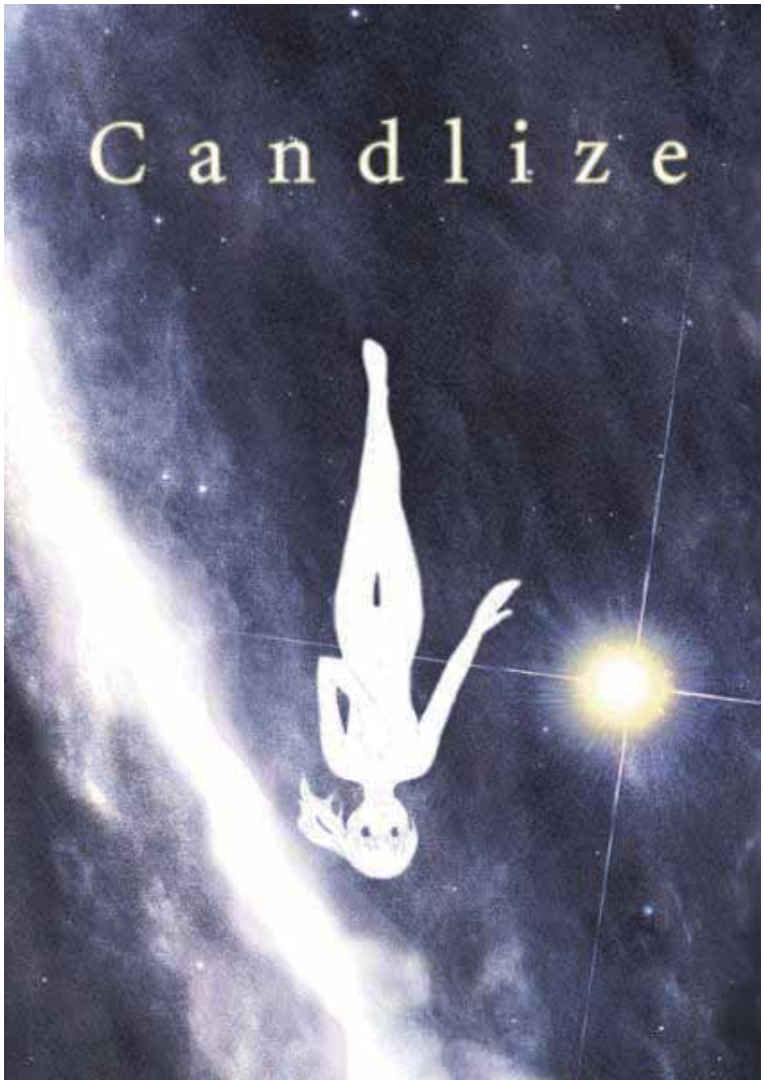
独特のリズムで紡がれる
２６種の詩、のような不思議世界。
意味が分かるか？　と言われれば
そうでもなかったり。
ただ声に出したいものもあったり
何度も読むとその度に新しかったり。

――試し読み会感想

推薦文

しゅわっと溶ける。ぜんぜん違うんだけど、中高生の頃大好
きだった稲垣足穂を思い出した。

――まるた曜子



宇宙をのぞむあなたに贈る物語

「Candlize」

著者	凪野 基
価格	500 円
ジャンル	そのほか
ブース	委託販売

――ミネラルとアミノ酸をシェイクした水。それはあたしたちに、ひどく近い。
あたしたちは、海から生まれた、ちいさな海だ。

宇宙時代。地球を文字通りの「水の星」に変えてしまった大災害の後、人類は月や火星、小惑星帯で暮らしている。
本書は月都市で生まれ育った蛍の視点から、未来に生きる人々の日常を描いた（あまぶん唯一となるかもしれない）ＳＦです。サイエンス・フィクションを名乗れるほどではないので、サイエンス・ファンタジーくらいに思って頂けるとちょうどよいかと思われます。

幼馴染みにして相棒のユーリ、同期のロジーとヤン。宇宙での仕事や、地球を知らない世代が見上げる地球。ヒトとマシン。あなたとわたし。
蛍にとって身近なテーマを連作形式で綴りました。

近未来、それは現代から着々と歩みを進めたどこか。

推薦文「宇宙をのぞむあなたに贈る物語」

当たり前に宇宙で暮らし、泣いて笑って恋をする、『月の日常』がここにあります。

この物語は、宇宙ＳＦであり、ひとりの女の子の物語です。全地球が海に沈み、人々が月や火星などの宇宙空間に生活の本拠を移した時代。月面都市ネクタリス・シティを舞台に、そこで暮らす女の子、蛍の日常と葛藤を描いています。

カノープス・スペーステクニカ社の船内・船外作業員として働く蛍の悩みは、幼なじみであり、仕事の相棒でもある男の子ユーリのことだったり、あるいは自分の過去から続く個人的なものだったり。語られるのは、だれもが心の隅のどこかに抱いたかもしれない葛藤であり、描かれるのは、仲間とそれなりに楽しく毎日を過ごし、あるときにまた不意に壁にぶつかる。そんな普通の女の子の日々です。けれども、この作品を印象的なものとしているのは、それらの日常が宇宙、月面という過酷な環境でテクノロジーとともに生きる風景の中に描かれているからにほかなりません。当たり前に宇宙で生まれ育った蛍の目を通して見える世界は、夢のテクノロジーの数々が実用化された風景であり、死と隣り合わせの過酷な環境でもあり。けれどもそれら全てをひっくるめて『日常』である、としてあるがままの人間が普通に暮らす場所として描かれています。一歩外に出れば死の宇宙であるネクタリス・シティ。けれども蛍たちにとっては、素敵なショッピングモールがあり、地球が見える小洒落た美味しいレストランがあり、会社があって、仲間とともに暮らす街なのです。そんな、折にふれて本編の端々で描かれる『宇宙にいながら地に足の着いた』未来感と生活感の同居する情景には、ただただ惹き込まれるばかり。この点だけでも宇宙好きの方は手に取る価値があると思います。

楽しいばかりではない。悪いことばかりでもない。なにもかもごちゃまぜになって、けれどそれゆえにすてきな世界。自分たちのいる地球と何もかもが違う月の上での物語だけれども、そこに人間が生きるのならば根っこは決して大きくは変わらないんだろうな、と。そんなことに思いを馳せながら、ありえるかもしれない宇宙での暮らしを追体験できる。自分にとってこの本はそんな一冊です。

余談ですが、作者である凪野さんの短編集『ヴェイパートレイル』収録の『ビートの葬送』は、本作と世界観を同じくしています。是非あわせて読んでみてください。

――夕凪悠弥

推薦文

ライトＳＦお仕事物。宇宙の常識で育った人間が地球を外から眺めるお話。軽いタッチで描かれる近未来。重力は見えなくても、作用する。

なんだけど。

なにこれラヴィ。雑破で奥手な女の子が幼なじみにゆっくり押し倒されてく話でした。

――まるた曜子

降ってくる

「沈黙のために」

著者	正井
価格	600 円
ジャンル	純文学
ブース	白昼社セレクト

死者の言葉が文字になる町、
異形の人間とアンドロイド、
おばあちゃんと孫が手をつないで団地から逃げ出す話…。

SF 風味の短編集です。

推薦文

「言葉が分子である世界」

当たりまえの口ぶりで語り出される、「ここ」と隔絶した世界の短編集。

冒頭「フォスフォレッセンス」で示されるように、本著では言葉が世界そのものだ。表題作「沈黙のために」の街は、語られるだけで私を取り囲んで息苦しく追い詰めるし、「冬の群れ、馬数ある中の」では文字がそのまま存在だから、冬が馬に混じっている（このあたりまで来ると、読み手も、漢字一文字だから同じね、なんてすんなり納得してしまう）。巻末まで辿り着けば概念的ナニカが紙面の「向こう側」にいる私たちを歓迎してくれ、快活に言葉について喋りだす。読み終えて本を閉じても、本の中で出会った言葉たちが、泡のように私に、あなたに、まとわりついて、少しだけ日常を塗り替える。

黙してただ読んでほしい。目から聴こえる世界のために。

——容（@詩架）

推薦文

「降ってくる」

冬の凍える日。つめたい風が吹きすさぶなかに、あなたはひとりで立っているとしよう。頬にあたる空気は痛く、指先は凍りついたように悴んでいる。限界まで体が冷え切ったとき、あなたはその指先を水に浸す。すると、同じく冬の日にあってつめたいはずのその水が、その指にとってはあたたかく感じられることがある。冷えた体に牙を剥くかと思われた水は、あなたに、やさしく寄り添ってくれる。

全6作の少し不思議な短編が集まった本作『沈黙のために』は、そんな本であるような気がする。正井さんの文章は、季節にたとえるなら冬だと思う。ぴいんと張り詰めた、細い糸が集まったような空気、ぱらぱらと降る雪、白く霧のように一瞬生まれては消える息。そんな世界を、わたしは感じる。それに加えて、少しほほえんで、手を伸ばしてくる死のにおいがある。だけど、死は、眠りのようで、深くて、おだやかで、やさしい。さみしいのに、ひとりじゃない。寒いのに、あたたかい。悲しいのに、おだやか。そして沈黙しているのに、とても雄弁。そんなやさしい二面性が、正井さんの文章にはあるような気がする。

また、言葉が持つ密度もとても濃い。選び抜かれた言葉たちである。彼らは自らの意識を持ち、文字という形から自由になって、解体されて、わたしに降ってくる。それは最初に収録された「フォスフォレッセンス」の世界であるかのように。

この本の物語たちは、Twitter に投稿されたものがもとになっていることにもたいへん驚いた。わたし自身 Twitter はよく利用するけれど、この物語を紡げるような連続性をわたしは持たせることができない。しかし、前述したようにこの本の言葉たちは自らの意思を持って、ぽつりぽつりと降ってくる。それはまさに、Twitter から生まれたものだからなのかもしれない。正井さんはこのツールを使うことによって、この物語たちを「ことばそのものを楽しむ」ものに昇華したのではないだろうか。

ちなみにわたしは、本作のなかでは「E」と「冬の群れ、馬数ある中の」がとても好きで、何度も読み返した。これらも Twitter がもとになっている物語だ。

ぜひ、この本に耳を傾けてほしい。沈黙してほしい、彼らの声がよく聞こえるように。

——きりちひろ

静穏にふるまいながら、
胸の奥底に溶岩のような渇望を湛えた少女たちの物語

「グロリア・リリィの庭」

著者	世津路　章
価格	300 円
ジャンル	大衆小説
ブース	委託販売

「“王子様”は“お姫様”の前で泣くことが出来ない。
だって“王子様”は完全で、無敵で、すべてを護るものでないといけないから。
だから、わたしは“王子様”が泣くことができる、その居場所になる――」

自身の内面を隠匿し続けてきた女子高生・鮎川砂奈は、
《グロリア・リリィ》と揶揄される同級生、立花優理のある秘密を知る。

優理の歪な実態に翻弄されながらもカメラを手にし、彼女の裸体をファインダーに収め続ける砂奈。

誰からも忘れられた旧校舎で重ねられるふたりの逢瀬のその先に、
待つのは破綻か諦観か、それとも――。

これは“王子様”も“お姫様”もいない、その庭の秘め事。

推薦文「静穏にふるまいながら、
胸の奥底に溶岩のような渇望を湛えた少女たちの物語。」

『王子様』にも『お姫様』にもなれない。そうならなきゃいけないと誰もが言うのに、自分はなれない――。世界からの拒絶に遭い、本当の自分を見て受け入れて、そう叫ぶ勇気は削がれて、本当の気持ちを守るために、自分を偽った姿を人に見せ続けてきた。他人と距離を取り、なにごともドライに割り切ってさめた心で日々を過ごす砂奈。不思議な魅力を持ちながら、見た目の美しさで同級生の嫉妬を買い、校内でも浮いた存在の優理。ある日砂奈はクラスメートの優理が男とホテルに入って行くところを目撃し、その姿をカメラに収める。砂奈は優理の弱みを握ったことで優位な立場を得たと思い、自分が見たことを広められたくなければ自分の前で服を脱げと脅すが、優理はどうでもいいことのようにためらいなく砂奈に裸身を晒す。そんな優理の裸を砂奈は写真に収め続ける。自分のことに執着を持たない優理が言う。「私は、〝王子様〟が泣く場所になる」と。そんな優理の体に日増しに増えてゆく傷。それは彼女の言う「王子様」の仕業に他ならず。そのことに憤りを覚える砂奈。今まで大して何事にも興味を持たなかった筈の砂奈が、優理に執着し、彼女を追い詰め傷つけたいと希む。歪んだ執着、それ自体は愛情でも何でもない。その筈だったが、やがて彼女に向かう感情は堰が切れ決壊する。少女たちが抱く、自己存在に対する不安。砂奈の、他者を必要としない乾いた距離感と、優理の、求められただけ無限に与え続けようとする距離感、それはどちらも等しく、求める方向を間違えた、強い愛情への渇望。求めた愛は、本当の私を見て、知って、その上で受け入れて、という願い。

「私たちはこの世界の中に、私たちだけの庭を創っていかなくちゃいけない」

ふたりの逢瀬、その記憶が刻まれた庭は壊されて、王子様もお姫様もいない世界に、砂奈と優理は戻ってくる。痛みの果てに。灰色に乾いていた少女たちの世界が、ふたたび色と光に彩られる。それはまるで、大地に落ちた種が、重たく積もる雪の下、固い殻の中で長く厳しい冬を耐え、漸く春を迎えて芽吹く瞬間を見たようだった。少女たちの感情が蘇るそのさまに、胸が締め付けられる。おそらく成長の過程で多くの人が通る、または見かける道。懐かしさと愛おしさに涙が出る、そんな作品でした。

――桜沢　麗奈

推薦文
「硬派な現代百合文学」

これだけ、思春期の少女たちの心を丁寧に描写できている物語があるだろうか。

しかも「社会に向いてないな」と感じている思春期の子供の心情を、こんなに丁寧に描いている。学生特有の正義感、その集団の中で生活する息苦しさ。

そこで見つけた一輪の花（と表現したい）の受けている現実に直面して、主人公の砂奈の気持ちが変化する。

百合だけど、イチャイチャラブラブの百合ファンタジーというより、どちらかといえば硬派な百合文学。オススメです。

――服部匠

真摯に愛し、前向きに生きる、それは運命への凄絶な挑戦

「僕の真摯な魔女」

著者	まるた曜子
価格	200 円
ジャンル	恋愛
ブース	委託本部

魔女に恋した。
———僕は未来を可能性を諦めない———

《魔女》という万能ワードからは遠い、縛られた世界。
それでも心は自由だし選択肢はまだ 0 でなく、
僕と君は共に歩いて行けると笑うひとがいる世界。

前向き尊大男前男子の揺るぎない想い。
世界のえぐみを飲み干しながら。

R15 オムニバス形式

推薦文

「魔法は万能ではない、けれど」

万難を排し、想いを貫くための検討と奮闘。運命をねじ伏せ、愛を勝ち取る物語。

前提として、愛がある。形や濃淡は違えど、ここには確かな愛がある。恋愛感情だけではなくて、友情や思慕、信頼までも含めての愛。登場人物の、であるとともに、作者のまるたさんの眼差し、筆致にもそれは現れている。

主人公、圭は魔女の涼乃に恋をする。だが、魔女を縛るルールは残酷だ。どうしてこの世に魔女を存在させるのかというほどに。圭は言う、「僕は君を諦めない」。この一言に込められた、狂おしいほどの愛情と覚悟。ただびとである自身と、魔女である涼乃、互いを尊重し共に在るために何をすべきか、有言実行の人である圭の一途さと、涼乃のしなやかさが小気味よく、友達を応援しているように物語に没頭してしまう。

また、二人の友人たちや「運命」であるところの彼もまた、確立された人物像でもって物語に厚みを持たせ、彩る。

物語との心理的な近さは、こなれた地の文と会話文、違和感のないスムーズな運びによる。実際的で現実的、それゆえの説得力。恋愛ジャンルだからと一歩退いてしまう方にこそお勧めしたい。

——というのが文フリガイド9号に寄せた推薦文。がちがちに固いですが、つまるところ、すずのん可愛い！　圭ちゃんがんばれ！　ディテール描写大好き！　結婚式呼んで！ということです。

序盤のえちぃ展開すら可愛く思える、まるたさんワールドにぜひ！

——凪野基

推薦文

「真摯に愛し、前向きに生きる、それは運命への凄絶な挑戦」

魔女である少女・涼乃と彼女に恋をした委員長・圭。高校生の甘酸っぱい恋愛物語が始まるのかと思いきや、ひたむきな愛を以て静かに壮絶に運命と戦う人々の物語でありました。

とにかく魔女という存在に課せられた宿命があまりにも過酷で、それでいて涼乃自身は健気で心優しい普通の少女なので、読んでいて可哀想でたまりません。好きな人の子どもを産むこともできない。好きな人に好きになってもらうことも許されない。あまりにも幼くして、望まぬかたちで処女を喪わなくてはいけない……。

魔女として生きるために固く封印されていた涼乃の本当の心が、とにかく前向きで一途な圭によって解放されていく、その変化の過程が非常に可愛らしく、儀式の場面の二人の交合は一種の神聖ささえ感じさせるほどです。

周りで見守る友人たちもキャラが立っていて、彼女たちに感情移入して二人の人生を応援したくなってしまうこと請け合いです。

最終話「僕らの幸福論」がわけても素晴らしく、個人的には圭と、涼乃の「運命」大橋との間に芽生えていく不思議な絆にとても魅力を感じました。

どうしようもなく襲い来る未来のことを考えて、ともすれば悲しくなりそうな読後感も、圭のポジティブシンキングのお陰で「きっとなんとかなるんだ」と信じることができる。そうでなくても、二人が幸福に生きた時間は確かに存在したことを読者はわかっている。

本を閉じるとき、「これで良かったんだ」という何とも言えない充足感が心に残ります。

——並木陽

約束の場所に咲く花の香と

「キスとレモネード」

著者	彩村
価格	500 円
ジャンル	純文学
ブース	純文学２「キスとレモネード」

推薦文

「約束の場所に咲く花の香と」

見つめることすらためらわれるようなうつくしい表紙をひらき、繊細に紡がれてゆく言葉のひとつひとつをひろう行為もおそるおそるだった。草葉の隙間から咲き誇る花を覗き込むようにしてしか物語をひもとけない。しげみをかきわけるような無粋をしてしまえば、花は散ってしまうだろう。そんな緊張感でもって、四篇の物語として切りとられた瞬間の永遠を、細心の注意をはらってページをくってゆく。ふれれば壊れてしまいそうな、という言葉がまったくもってふさわしい短篇集だ。

なんの本だったか、おさないころに読んだ本で、タイトルを思い出すこともできないが、そこにあった「花うずみ」という言葉だけをおぼえている。地面に穴を掘って、花を入れ、ガラス片で蓋をして埋めなおす。そうすると地中でその花は、永遠に咲きつづけるのだという。この本を読んだとき、真っ先に、その「花うずみ」を思い出した。はかなく壊れやすい恋や、少年たちの一瞬や、少女たちの決して永遠にはなりきらない関係を、自分だけのたからものとしてそうっと隠す。

誰のためでもなく咲いた花を、すこしの我欲と、花へのあこがれを込めて永遠に咲きつづけますようにと祈りながら。

「蓮は蕾が開くとき音を出すんだ。なんとも言えない清らかな音を発するそうだよ」

「蓮の音を聞くまでは、一緒にいてもいいよ」

「くちなしの花はね、天国に咲くのよ」

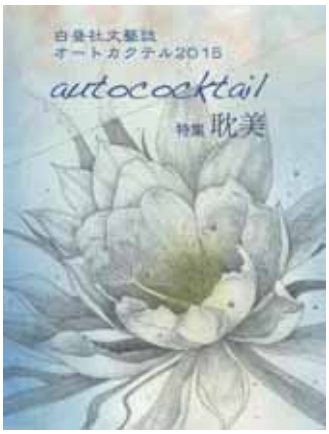
蓮の蕾が開くとき音をたてるのかを私は知らない、そして、くちなしが天国で咲き誇っているのかも。けれど、その遠くまだたどり着いたことのない約束の地でかれらが咲いているということを、信じることと祈ることはできるのだ。ガラス片に花を閉じ込めるように本を閉じる。ものがたりにえがかれた一瞬が永遠にみずみずしくありますようにと願う。

――そしていつか、もういちど、この本を開くとき、ささやかな願いの成就されていることを、きっとわたしは発見する。

――孤伏澤つたゐ

「美しいとは？」を問いかける "純文学 "

「文藝誌オートカクテル 2015- 耽美 -」



著者	アンソロジー
価格	1000 円
ジャンル	純文学
ブース	純文学 A「白昼社」

推薦文

「「美しいとは?」を問いかける〝純文学〟」

創作文芸の人気カテゴリのひとつである純文学。その定義はおそらく多くあって、あるいはそれは読者の数だけ存在するのかもしれません。

もし純文学の定義を

「ストーリーは皆無でも文章・文体がひたむきに美しいこと」

に与えるとすれば、この耽美アンソロジー、極めて純度の高い純文学と云えると思います。とにかく、よく分からない作品が多い。分かられることを拒む、分かろうとしてはいけないと語りかける。

テーマ〝が耽美〟ということですから、谷崎潤一郎のような作品が揃っているかといえば、そうでもない。これは耽美そのものというより、各人の思う耽美を追いかけようとしたアンソロジーなのだと思います。

だから必然的に読者にも投げかけられる。

「耽美ってなんだろう?」

例えば深夜、強めのお酒を減らしながら、よるべない読後感に浸ることをお勧めします。

――にゃんしー

普通の世界の、普通ではない瞬間。

「ミーティングは三〇二で」

著者	紺堂カヤ × 伴美砂都
価格	400 円
ジャンル	大衆小説
ブース	委託販売

推薦文

「普通の世界の、普通ではない瞬間。」

本作は、とある大学を舞台に、著者二名が交互にストーリーを紡いだ「リレー小説形式」の作品である。六本ずつ、計十二本の物語を一年に渡って繋ぎ、作中でもちょうど一年の時の流れを経る、というスタイルだ。

私は大学を経験したことがない。だが、日常のざわめきが非常にリアルに伝わってくる、伝えようとしている作品であると感じた。学校生活の中にある喜び、戸惑い、葛藤、さまざまなものが、受け止めやすい速度で飛んでくる。そうしたいたって普通の世界の中に「普通ではない瞬間」がフッと出てくる。現実にはこんなことはないだろう、でももしかしたら……と思いながら彼らの季節を追った。ストーリーの中に、カメラで写したような、「写真」のような風景を感じることもあった。……などと書いていると非常に難しい内容のように思えるが、軽快な速度で進んでいくため読みやすかった。作者が変わるとストーリーを先導する視点人物も切り替わる形式であったため、バランスの良い区切り方になっていた。このことも読み進める速度を上げた一因だろう。一緒に学校生活を送ってみたい、そう思えるような登場人物たちが一年を巡る。後味の良い作品である。特別編が収録されている別冊もセットになっており、こちらには作者インタビューもついているなど、ボリュームも満点である。是非、オススメしたい。

——月慈稀羅

生命のように刹那的、断罪のように端的——
死後の世界にて World War Final、勃発！

「ヘヴンズ・ドアー（上）」

著者	浮草堂美奈
価格	800 円
ジャンル	ファンタジー
ブース	ファンタジー３「浮草堂」

推薦文「生命のように刹那的、断罪のように端的——
死後の世界にて World War Final、勃発！」

倫理を諭す御託など無粋。慈悲を集る涙など幼稚。ただ奪え。ただ騙せ。ただ殺せ！

死してなお暴虐を尽くすことを欲した、イカれたヤツらのイカれた戦場を描いた長編、それが『ヘブンズ・ドアー』です！

舞台は死後の世界《ヴァルハラ》。ある資格を持つ魂が誘われるこの世界では、やがて来る終焉の後、新たに生まれ出でる世界での覇権を握るべく、各国家戦力が日々闘争を繰り広げています。争いあうのは現世に実在したアメリカ、ソ連、イギリス、フランス、ドイツ、中国、韓国、日本——辿りついた兵士たちの魂は、死してなお母国へ帰従し、ヴァルハラでの版図を広げんとその猛威を奮います。

殺戮のための異能を携えたナショナリティ豊かな戦士たちの群像劇、その中心にいるのは三人の少女。あの世とこの世の橋渡しの場である《ヘブンズ・ドアー》、その看板娘である依子・紅玉・エミリーは、可憐ながらも強靭に戦場を駆け回ります。殺伐とした世界の中にある彼女たちの純粋な友情は清涼剤のように爽やかです。が、その絆を彩るのが銃撃と剣戟というのが、またなんとも本作らしい点であります。

彼女たちを軸に、KGBの不死身の大尉、イタリアン・マフィアの豪傑なる女頭領、ドイツ騎士団を統べる勇壮な姉弟、真意の読めぬ日本武士——一癖も二癖もある戦士たちが所構わず暴れまくる物語は、シンプルで荒々しい筆致で綴られ、故に戦場の只中のような臨場感を持って描かれます。彼女等の狂騒に満ちた哄笑が聞こえるようで、気づけば夢中で読み進めてしまうのが恐ろしいです。

登場人物の操る異能もさることながら、彼や彼女が巻き込み巻き込まれる争いの数々もなんともエキセントリック。英国を震撼させたジャック・ザ・リッパーの正体。化け物じみた戦闘力を持つメイドと執事の秘密。各国に争奪戦をもたらした人魚の願い。それらに対峙したとき三人娘が迎える結末は、当然綺麗事では済まされません。そこに一切の慈悲はなく、一片の躊躇もない。しかしすべてが終わった後、気づけば心に透明なかなしみが結晶している——そんな不思議な読後感があります。

これはまさしく、作者様をおいて誰にも描けない唯一無二の作品です。ぜひ全身総毛立つあの世の世界大戦を見届けてください！

あとクリスティーナ姉ちゃんマジ天使。これマメな。

——世津路　章

紡いでいく一つずつの輪、その答え

「七つ輪」

著者	風城国子智
価格	300 円
ジャンル	ファンタジー
ブース	ファンタジー 4 「WindingWind」

推薦文

「紡いでいく一つずつの輪、その答え」

〝ライ〟と向かい合う人々と幻獣。
本人が幻獣となりいくつもの苦難を越え、亡き父と対等でありたいと願う。
古えからの呪縛に解き放たれるために戦う〝ライ〟。
ライが七つの輪をこの手につかむために紡ぐストーリー。

――試し読み会感想

これは作者の魂の破片

「幼神」

著者	孤伏澤つたゐ
価格	750 円
ジャンル	ファンタジー
ブース	JUNE 2 「ヨモツヘグイニナ」

推薦文

「これは作者の魂の破片」

この形になるまでに十五年かかった、と後書きにある。しかも、これは、外伝なのだと。

その言葉どおりの、ずっしりした重みが、この『幼神』にある。

何が起こっているかわからない場面でも、登場人物に迷わずついていける。突然出てきた単語にも、まったく違和感を感じない。巧さをこえて、文章そのものにつたゐさんの息づかいがあり、そこに描かれているのが、つたゐさんの魂そのものだからだろう。こういう書き方ができる人は少ないし、力のある作家でも、すべての作品でこう書けるわけではない。面白い。

ただ、今まで推薦文がなかったのは、仕方がないような気がする。あらすじや世界観を説明したところで、この作品を語ったことにならない。ここに描かれている神は、人が神と呼んできたものそのものだ、などという陳腐な形容も似合わない。読みやすいし、面白いし、泣けるのだけれど、そんな言葉で簡単にくくってしまっていいものではない、と思ってしまうのだろう。

私は自分の中に、調伏しがたい人間を複数飼っていて、もう一人の私が、続き物の夢に出てきたりする。二十代の頃に「僕を書け」と命令してきた某キャラクターは、疑似家族を与えて放り出すのに何年もかかった。それですっかり退治できたかというと、別の形で再登場してきたので、今も仕方なくつきあっている。創作活動は、つまり業みたいなものなのだと思う。『幼神』を読みながら、それを思い出した。作品の底を流れている、一種の「諦念」が心地よかった。どうにかできるものと、どうしようもないもの――ほとんどは、どうしようもないのだということが――。

――鳴原あきら

テンション高め

「それはいわゆる死亡フラグというものでして。」

著者	夕凪悠弥
価格	500 円
ジャンル	ライトノベル
ブース	ライトノベル３「オービタルガーデン」

推薦文

「テンション高め」

内容が内容なのにあっさりとテンション高めで
進行する物語、キャラクター。
ゆるいのにギリギリ。
ギリギリなのに何故か不安さはないという
そんな空気が楽しいです。
これ以上ない程に完結していますが
また別の物語でこの二人を読みたくなります。

――試し読み会感想

店員さんと現実世界で信頼関係を築くには！？

「君とデートをしてみたい。」

著者	実駒
価格	500 円
ジャンル	JUNE
ブース	詩歌１「夜間飛行惑星」

推薦文

「店員さんと現実世界で信頼関係を築くには！？」

そこでコウという青年にサービスされる立場になり、リードの巧みなコウに惹かれていく。次回必ず店に行くと約束していたある雨の日、コウが同級生らしき若者とはしゃいでいる姿を目撃してしまう。

自分の知らない、コウの学生らしい姿を見て、祥は「自分は知り合いですらない」と落ち込んでしまう。いっそのこと、店で働いていないコウを見ればあきらめられるのではないかと思い至り、コウの通う大学で確かめようとするが、そこでコウに見つかってしまい――。

とても読みやすい文章で、文字がすっと頭に入ってきます。以前、実駒さんの小説を読んだ時にも感じたのですが、「人に読ませる」ということを前提に作られている文章・お話だなぁ、と思いました。

冒頭からはじまるラブシーン（Hシーン）はサービスたっぷり。

その後、コウのことをなにも知らないけれど、あれこれ想像して幸せな時間を過ごすところから、コウの普段の学生の姿をみて疎外感を覚えるシーンの落差が大きいです。

コウといい雰囲気になり、夢を見ていたのにいきなり「ただの客と店員」だった自分たちの現実を突きつけられてショックを受けるところ、とても共感しました。お話が上手な職業のひと（美容師さんなど）と話すと、私も錯覚しますから。

祥が「コウと友達になりたかった」と自覚するまで、長い道のりだったなぁ、と思いました。

全部読んで見ると祥はダメダメですが、まっすぐで応援したくなるキャラ、（もちろん、コウも必死だった、と後でわかります）世間に出ていないせいなのか、孤独で懸命に愛・友情をほしがる祥を応援したくなります。

体のつきあいから始まる友情というのもあり！？　なエンドですし、コウが乗り気なのところが、BL好きとしては嬉しいです。

この二人の行く先が、幸せなものでありますように！

――きよにゃ

「サッカと居たこと。」

著者	珠宮フジ子
価格	200 円
ジャンル	JUNE
ブース	掌編 1「ふじ文庫」

推薦文
「描写の１２ヶ月」

「わたし」とサッカの関係を
１２ヶ月のタイトルにした数ページずつの
短編で描いている作品です。
表現がしっとりとしていて、フォントとも合っています。
この空気、感じて欲しい。

――試し読み会感想

金髪王子 × 黒髪人魚、B の L はそうこなくっちゃ！

「人魚姫の末裔」

著者	きよにゃ
価格	600 円
ジャンル	JUNE
ブース	JUNE 1「午前三時の猫」

推薦文
「金髪王子 × 黒髪人魚、B の L はそうこなくっちゃ！」

えっちなＢＬが好きです。攻めが魅力的なＢＬが好きです。圧倒的にかっこよくて、しかしパーフェクトでない攻め、それに翻弄される受け。そういう関係性にドキドキします。そして受けには何か決定的な欠落や弱点があるとなお好きです。互いを補い合うような、そしてその引力ゆえにさっさとセッ…は済ませてしまうような、そういうＢＬにドキドキムラムラしたいです。ですので『人魚姫の末裔』には転げまわりました。金髪の王子様 × 黒髪人魚の男の子！！！ それはもうえっちで、素敵なＢがＬしっぱなしなドキドキ小説でした。

攻めの金髪王子様・フェルナンドがかっこいいです。よく考えたらとんでもない男な気はします。婚約者の弟（主人公・ビート）に手を出しちゃって、好きになったからとビートを妾にしちゃう。それでいて婚約者（主人公の双子の姉）とは表向きに結婚して世継ぎをもうけようと？？ つまり両方とえっちはしちゃう。おそるべきマイペース。けれどフェルナンドはかっこいいのです。いつだってビートのために一所懸命で、自分の思いを貫き通します。どうにかしてほしいものを手に入れたい、その強引さと愛情深さにドキドキしました。受けのビートはとにかくかわいいです。えろいです。人魚なので「魚とヒトの中間みたい」な肌、涙は真珠に変わり、精液はピンク色。さ、最高かよ…。そのうえ雄っぱいまで…ショタ化まで…！ 個人的にはえっちの際の乳首周辺の描写がたまらんでした。男性の乳首方面に興味のある方は必見です。ジタバタしながら読みました。

えっちなシーンはいっぱいですが、読後感は爽やか。ビートの葛藤には胸が締め付けられるようでした。わーがんばれ、アカンってそれはダメ！、ウッウッよかったね…等、親戚のおばちゃん状態になりながら読みました。二人が絆を深めていくさまが丁寧に描かれていて、作者さんがキャラクターに愛情を注がれているのが伝わってきます。また、素敵でかわいい表紙絵・挿絵だけでなく、巻末やサイトではビートとフェルディナンドの漫画も楽しめます。かわいいキャラクターたちのラブラブえっちな物語に今後もドキドキしていきたいです。

――オカワダアキナ

二人の住む家の壁になりたい

「お義兄さまに愛されて ～僕だけの甘い秘めごと～」

著者	きよにゃ
価格	600円
ジャンル	JUNE
ブース	JUNE 1「午前三時の猫」

推薦文

「二人の住む家の壁になりたい」

帝政ローマ時代をモデルとした時代背景の、厳格で優しい兄と動物好きで妖精のような義理の弟の甘々ラブストーリー。

弟のシャーディーンがとても可愛らしく、健気で、天使！！！　母親に連れられて新しい父のところに来たときも、母が新しい父との子を身ごもったときも、辛い目にあったときも、持ち前の優しさで一生懸命生きて行こうとするところが健気でほんわかします。

シャーディーンが新しく暮らすことになった家の長男のリディウスは、長男らしくしっかり者で、いじわるな実の弟が、シャーディーンをいじめているところに出くわしたときに、本当の弟をひいきせず、公正にシャーディーンに接してくれる素敵な人。二人の出会いのエピソードもほんわかしていていいなあと思いました。

お互いに意識しあっているけど兄弟だし……と遠慮しあっている二人もかわいらしいのですが、思いが通じ合ってからのラブラブ二人暮らしもかわいいです！　この家の壁になって、二人の生活を見守っていたい……

――壬生キヨム

今までにないぐらい、ブン殴りたくなる男が主人公のＢＬ

「The Carpal Tunnel Of Love」

著者	かえこ３
価格	300円
ジャンル	JUNE
ブース	委託販売

推薦文

「今までにないぐらい、ブン殴りたくなる男が主人公のＢＬ」

今までにない感じのＢＬはいかがですか？　主人公のジェシー君は２３歳。アメリカに住んでる２３歳の青年です。ロックバンドのボーカリスト兼、ギタリスト。今度初めてのライブツアーに出ることになりました。

ですがこのジェシー君。ものすごい面倒で、ブン殴りたくなるんです。左腕にはリストカットの跡だらけ。そして躁鬱病。１３歳から発症しています。そう。ジェシー君は今流行の「ヤンデレメンヘラクソ野郎」なのです。そして幼馴染でバンド仲間のロブとセックスするのが大好きなくせに、女の子ともセックスが大好きな、ほんっとうにだらしないクソ男です。

ツアーに出るまでの仲間たちのやりとりだけで終わるこの話。ジェシー君や、仲間たちはこれからどうなっていくのだろう？　という不安と、少しの希望があるラストで終わる話です。特に何が起こるでもないんですが、突き抜けた内容のＢＬがお好きな方はぜひ！

題名は「カーパル・トンネル症候群」という意味です。

――自薦

滅多に口に出来ないお菓子を丁寧に食べるように、
少しづつ読みたい本。

「ピアニストの恋ごころ」

著者	高梨　來
価格	600 円
ジャンル	恋愛
ブース	JUNE 1「午前三時の猫」

推薦文

「滅多に口に出来ないお菓子を丁寧に食べるように、
少しづつ読みたい本。」

高校生の桐緒が付き合っている人は、うんと年上のジャズピアニストだ。敬語で話す桐緒に、荘平さんはコーヒーを飲みながら色んな話をしてくれる。笑う時は顔をくしゃくしゃにして笑う少年のような人。ある時はバレンタインのチョコを一緒に選び、ある時は呼び捨てにし合ったり、ある時は百年後の自分たちの未来について語ったり。そういうふたりで過ごす大事な時間――親友のマキちゃんに言わせると「ノロケ」以外の何者でもない――を切り取り、数編のお話が成り立っている。機知に富んだ会話に「武勇伝のような夏の思い出話をする」同級生など現実を感じさせる描写の細かさが特徴的で、読者を女性向けのファッション誌をのぞいたような、おしゃれで夢見心地な気分にさせてくれる。

ところで、二十五の男性と付き合っている女子高生と聞くと、ぞろっとしたつけまつげに短いスカートを穿いているイメージがわくが、「ピアニストの恋ごころ」の桐緒はまったく違う。むしろクラスの女の子たちが年上の彼氏のことを「得意げにブランドもののアクセサリーを見せびらかすみたいに自慢」する中、居心地悪そうにしている、おとなしくて清楚な子だ。荘平さんは桐緒のことがどうしようもなく可愛いと思っているし、桐緒は桐緒で、きちんとした身なりのこぎれいな荘平さんを、クラスの誰にも見せたくないほど夢中になっている。いつも家に来てくれて悪いから、と彼氏である荘平がSuicaをチャージしてくれる話があるように、たぶん学校帰りに彼氏の家に寄っているのだろうと想像されるが、二人はいたって清い交際で、ミントタブレット味の淡いキス止まりだ。周りを固めるキャラクターも生き生きしている。教師と付き合っているという噂がある木崎さん、そんな彼女が調子の悪いときに男子に威勢のいい啖呵を切って黙らせた、桐緒の親友のマキちゃんなど。

マキちゃん視点は、やや辛口だけど、恋していない人からみた「荘平さん」の姿がわかりやすくていい。

２０１４年度発行の本に、二編の書き下ろしを加えたリニューアル版。

――きよにゃ

身近に感じる恋愛

「真夜中のころ」

著者	高梨　來
価格	400 円
ジャンル	恋愛
ブース	JUNE 1「午前三時の猫」

推薦文

「身近に感じる恋愛」

ファミリーレストランで出会う2人。
お互いを意識しながら少しずつ距離を縮める。
不器用ながらのストーリーは現実にある自分を重ねる人もいるかもしれない。
流れる普通の恋愛話が読みたい方はオススメ

――試し読み会感想

合唱曲モチーフの小品集

「混声合唱曲のモチーフによる 少女礼賛」

著者	珠宮フジ子
価格	200 円
ジャンル	掌編
ブース	掌編 1「ふじ文庫」

推薦文
「合唱曲モチーフの小品集」

静かでほのぐらい文体が美しい
短編集です。
決して明るくはありませんが
深く入り込んでしまう作品でした。

——試し読み会感想

エッセイは片道書簡の楽しみ

「その程度の濃さの約束」

著者	よしざわ　るみ
価格	800 円
ジャンル	掌編
ブース	委託販売

推薦文
「エッセイは片道書簡の楽しみ」

日常を綴るエッセイほど、著者を丸裸にする文学はあるのだろうか。

ちょっと遠出したり、いつもより長く……とはいえ二、三日だが隣県に帰省した話はあれど、日常の枠に収まるもの。評論臭さが鼻につくこともなければ濃さ際立つテーマもない。あるのは、生活の中で体験したこと、そこから思ったこと。それだけである。

このエッセイが好きなのは、著者のニュートラルな視点や冷静な文章が浮き彫りにしているもので、著者の人柄、人物像と呼べばいいだろうか。つまるところ私はこの著者をとても好きなのだと思う。著者としてである以上に人間として。

実際に知る人物であるがゆえの加点もあるだろうが、ここに書かれているような話を本人と直接話すことはない。頻繁にではないが会って食事でもしながら話すことも日常の他愛もない話だから、もしかしたら同じ話を口頭で聞いたことがあるかもしれない。なのに改めて本著で著者を知るのは、人が一人で書き綴るところに内省が生じるためだろうか。口頭よりも手紙のやりとりに近いのだと思う。堅苦しくなくくだけ過ぎもせず、感覚的には面識のない相手とするふみのやりとりのよう。それを往復書簡と呼ぶならばこのエッセイは片道書簡、特定の相手に向けたものではない。その分冷静で、気遣いも謙虚さも著者その人を浮き彫りにしている。独り相撲と呼べば語弊があるが、相手の出方に応じて型を変える必要がないことが中庸さが際立たせる。

個人的に推薦者は幸田文が大好きである。幸田文の「あや」もそう言えば、ふみ、手紙とも解釈できる名前だ。これこそ本当に「見知らぬ人との片道書簡」である。

幸田文のエッセイ、いや随筆と呼ぶべきか、時代が違うのに今なお瑞々しく近くて遠く佇まいが美しく、立ち止まりながらしか読めない。好きだから読めない。涙が落ちることも多々ある。エッセイで涙が出るのは、今のところ幸田文とよしざわるみの二人である。

よしざわるみを知らない人にこそ中庸な片道書簡を楽しんでいただけるはず。一頁に一話のボリュームなので、立ち止まりながらでも一日一話ずつでも、質量のプレッシャーに手が止まることなく心に爽やかな風を、しっとりした雨を取り込んでいただけると思う。

——正岡　紗季

絶対に行きたくない！（笑）

「中華人民共和国で満州国の面影を訪ねる」

著者	りりあ
価格	600 円
ジャンル	評論
ブース	評論A「Re.set」

推薦文

「絶対に行きたくない！（笑）」

旧・満州に再度行きたいという祖父のため、写真を撮るため中国に渡った著者・りりあさん。だが、言葉もほとんど通じない・観光地化されていない土地なせいか、その旅は過酷です。

ざっと一例を挙げると……。

・トイレにドアがない！
・銀行で両替をしようと試みるとボカンとされる。あとで偉いさんたちが出てくるが、紙幣をコピー（犯罪）したりする。
・スーパーに行くと、万引き対策でバッグを鍵付き袋に入れられる。当然会計時にもめることになる。
・掃除されていないホテル。
・突然繋がらなくなるネット（友人が余計な言葉を書いたせいかも、と疑心暗鬼に陥るりりあさん）。

とくにいろんな場所で「汚ぇ！」と明記されているとおり、中国の衛生状態はかなりのもののようです。乗り換えのため訪れた韓国の空港で、清潔さに感動してトイレの個室を激写してしまうのもやむをえないかと思われます……。

（のちに、そんな精神状態ってどうよ、と冷静になっています）

そんな中、道を聞いただけなのに案内をしてくれる三兄弟に出会い、帰りはその母親が迎えに来てくれるというエピソードが挟まっていたのは僥倖でしょう。中国人民は優しいのだ、としんみりきます。

りりあさんの軽くてツッコミ多めの文章が、悲惨な旅を笑いに変換してくれます。写真も数多く収録されており、田舎の中国の実情を知るには、あるいはとんでもない旅行体験をした人の実録をみるためには必見の書でしょう。

——きよにゃ

もし見えない世界に興味があって
一歩が踏めないようでしたらお手伝いします。

「タロットカードの始め方」

著者	翠　あんず
価格	200 円
ジャンル	評論
ブース	委託販売

推薦文

見える世界だけ見てても人生心もとない。見えない世界も興味あるけど、周りに話の合う人がいないので話しにくい。占いのカードに興味あるけど、どうやって触っていったらいい？　そんな世界に興味あるけど、どうすればいいか分からない人のためについにそのタイミングがやってきました。この本は占いのカードの中でもメジャーな「タロットカード」を買い方から一人で一枚引き占いができるまでを簡単に解説しています。一見怖そうな世界もきちんとのぞいてみると案外ちゃんとした現状だったりします。もし興味がある方ならこれが世にいう「タイミング」だと思って一冊手に取ってタロットカードを買いに行ってみませんか？　人生がより一層深まりますよ。

——自薦

あるのは味覚としての甘さ。そして日常。

「最果て食堂」

著者	七歩
価格	400 円
ジャンル	ファンタジー
ブース	白昼社セレクト

推薦文

想像してたほのぼのじゃなかった！　いい方に裏切られました。

死を望む心と生きるための食事が平行して矛盾しない世界。

続きでるのかなー

――まるた曜子

6人の本の虫たちによる本を題材にしたアンソロジー。

「僕らはいつだって本の虫なのサ６」

著者	ひじりあや
価格	500 円
ジャンル	大衆小説
ブース	委託販売

推薦文

文芸部の同人誌原稿のため、千尋は校舎裏の桜について調べることにした。『人喰い桜』との謂れのあるその木に、親友二人が翻弄されながらも挑む様を妖艶な描写で綴った「魔櫻」。普通の女性と、テディベアを恋人だと言う美しい少女のやり取りから、孤独と純愛を滲ませる「サンドイッチとテディベア」――。

既存の本を作品内に登場させるという条件で書かれた、六人の作者によるアンソロジーです。書き手によって取り上げる本も、その解釈も、作品ジャンルも異なりますが、しかし、どの作品もどこか物寂しい雰囲気を纏っています。それは、人が小説や映画、詩などの物語に接する時、自分の内側のやわらかい部分に触れてくるような哀愁を求めているからではないか、などと考えてしまうほど、それぞれに美しく繊細に描かれています。と言っても、ひとつひとつの作品カラーは六者六様。飽きることなく最後まで読み進められることは間違いありません。上記以外にも、やわらかな方言が印象的な「魔法が生まれるとき」や、嫌な男の感情の機微を描きつつ、ラストでハッとさせる「ひとり」など、六人の作者が六つのアプローチで「本」に向き合った、ペーソスと時にユーモアの漂う素敵な作品集です。

――zooey

肉眼で、世界を見つめる

「色めがね（愛猫ミーコ）」

著者	ちあの
価格	400 円
ジャンル	詩歌
ブース	JUNE 2「ヨモツヘグイニナ」

推薦文「肉眼で、世界を見つめる」

『色めがね（愛猫ミーコ）」とはかわいらしいタイトルである。作者の名は「ちあの」という。これもまたかわいらしいし、薄緑の背景にピンクのめがねの表紙。きっとかわいらしい短歌なんだろう。そんな期待の色めがねをかけて、ページをひらく。

そうして最初に飛びこんでくるのは、連作「承認欲求」。

振り下ろす力加減が下手くそでまだ壊れないメールボックス

メールボックスはなかなか壊れないらしいが、こちらの色めがねは、一瞬で粉砕される。

ビビビと繋がってしまったことですし同じ車両に乗れません、もう
足してから割ったらきっとふつうです　あなたの部品としてのことばは
たべたいがたべてしまうとあえなくてあえなくなるとたべられません

やわらかい言葉や、ひらがなにひらいてつづられる言葉のひとつひとつに、ぐらぐらとあたまが揺れる。殴りつけられた直後には痛みも衝撃もわからないのに、数秒後に肉体が受けた攻撃を認識するような感覚が間髪おかずにくりかえされて、こちらの色めがねは粉々に砕かれつづける。そうして、最後の連作「畏れ」にたどりつくころには、手持ちの色めがねはうしなわれているような気分になっているのだが……

こんな夜にはありうることだ　遠くからおういおういと近づいてくる
怖いことを怖いことだと知りながら怖がらぬのは怖いことです
四国では小さな箱の中身には興味を持つな　じっとおそれよ

目には見えぬけれど、たしかに存在する、「なにか」――暗闇に、というよりはわたしのなかのうすぐらい部分に、息をひそめている声、足音、気配。その生々しさに寒気がして、ページから顔をあげて何度も部屋のすみを睨みつけてしまう。なにも見えませんように、と祈っているくせに。そうだ、これは色めがねだ、と思う。「わたしの目はこわいものを見たりはしない。目に見えぬものを、見てはならないものを決して見たりはしない目だ」という、色めがね。だけどこれまでの色めがねは粉々になってしまっている、これだって壊されてしまうことはもうわかっている。タイトルを思い出してほしい。

『色めがね（愛猫ミーコ）』。

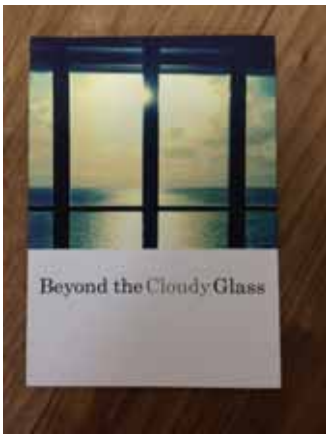
カッコ書きにかくされたものを、色のついたレンズで、そうして肉眼で、じっと見つめれば、見えないものが見えてしまう。

――孤伏澤つたゐ

手を引かれるままに誘われる、
「視界」を飛び越えたその先の世界

「Beyond the Cloudy Glass」

著者	詩架
価格	300 円
ジャンル	恋愛
ブース	委託販売



推薦文
「手を引かれるままに誘われる、
「視界」を飛び越えたその先の世界」

登場人物の視点に入り込んで、カメラの瞳になってぐんぐんと物語世界に入り込んでいくかのような、切り開かれた視界のその先へと誘われる連作二篇で構成される一冊。

容さん
鏡の向こうの、その先の
Beyond the cloudy glass

サバサバ系美人（中身はキュート）な美雨さん、同居人のハイスペックなのにいまひとつ頼りない智久くん、美雨さんの同僚のキラキラキュート女子まゆりちゃん（内面は智久くんよりもイケメン）まゆりちゃんが加わったことでふたりのどこかいびつな関係は視界が開き、新しい場所へと進み始める。テンポのよくセンス溢れる会話と流れるような小気味良い文章はハイセンスなドラマを見ているよう。くるくると視点を移動しながらつづられる彼ら三人のおかしくていとおしい関係性をずっと眺めていたくなります。

水無瀬さん
Love nest,Polestar,Never Ever

ＢＬです！　とは著者である水無瀬さんの談。確かにBLなんだけど僕の知ってるＢＬと違う！笑「彼」の視点が映し出す「アイ」のやり取りは濃密でうっとりするほど官能的。言葉の魔法に溶かされ、息を吐く一時すら忘れさせてしまうほどにスリリング。パズルのピースが噛み合うように、バラバラだった星と星を結んで大空に星座を描くように、「彼ら」の描く軌跡が繋がりあった末に見えた絵にハッとさせられます。ここにあるのは、触れ合ったその先から伝う愛のありか。

不思議な高揚感と魔法がするするとこちらを捉えて離さない、ふわふわと浮遊するような読後感。さて、これで推薦文になっているのかというのがとても情けないやらお恥ずかしいやらなのですが、読んで、そして、体感して！としか言えないのです。新しい視界を手に入れられるような魅惑の読書体験をあなたにも。

――高梨來

「プエラの肖像」

著者	キダサユリ
価格	500 円
ジャンル	掌編
ブース	白昼社セレクト

推薦文

「「少女」が見せるもの」

少女とは、七歳前後から十八歳前後の女子を指すという。その十年弱の間にどんなことが起こるのだろうと考えたとき、女性の一生を形作るような転機と呼べるものがこの期間に集中している。それは私たちが意識していようといまいと、誰のもとにも平等にやってくる。少女は、ある意味ではいくつもの通過儀礼の象徴であると考えられる。

本作『プエラの肖像』は、キダサユリさんによる「少女性」をテーマにした短編集だ。わたしがまず心を惹かれたのは、物語を追うごとに、「少女」が変化していくということ。全五話から成る物語のなかで、少女は、幼く庇護から抜け出せない存在、自我を持ち始めた存在、第二次性徴を迎えた存在、受胎する存在、そして愛に目覚める存在と、いわば成長していくのである。

また、キダさんは「ヒトでないものとの交わり」を描くことに長けた作家であり、それは本作でも遺憾なく発揮されている。少女の成長の過程にかかわってくるのは例えば卵であったり、鳩であったり、ウサギであったり、またはミュージシャンへの憧れというかたちないものであったりする。注目してほしいのは、ここに「生身の男性」という存在がないということ。ヒトでないものによって、少女は大人になっていく。

これは何を意味するのだろう。それを考えたとき、わたしのなかに、ある本質的な問いが浮かんだ。

それは、少女を規定するものは何であるのか、あるいは、少女とはそもそも規定され得るものなのだろうか、ということだ。わたしたち女は、もしかするとヒトの力が及ばないところで「少女」であったのではないか。それはある種、現実から離れたところにいる時間、ひょっとすると、絶対的に聖なる存在であった時間。キダさんはそれを示しているのではないか。ここに描かれているのはぎりぎりまで突き詰められた少女性であり、この本によってわたしたちは、否応にも自分がかつて少女であった時間のことを考えずにはいられないのだ。

大人になったわたしたち、少女から抜け出たわたしたちは、今、どこにいるのだろう。

迫ってくるのは、手に入れたものは、成長か、現実か、あるいは、破滅か。

——きりちひろ

ぼくが失敗作で、彼が成功品だ。神様は
あたえをつくろうとして、ぼくができてしまった

「ツーピース」

著者	霜月ミツカ
価格	500 円
ジャンル	純文学
ブース	白昼社セレクト

推薦文

夢中になって読んだ。"シーアネモネ"という作品がとても好き。
「ぼくが失敗作で、彼が成功品だ。神様は
あたえをつくろうとして、ぼくができてしまった」
実物として満たされているようで欠けている宝良と
はじめから何も持っていなかったあたえの関係が切なくて愛しい。
霜月さんの物語は寂しさをすこしずつ汲みとって
くれて大好きです。

——試し読み会感想

後に奥州藤原氏第二代当主・藤原基衡の妻となる、
那津（宗任女）の生涯を描いた長編小説。

「わだつみの姫 奥州藤原氏～安倍宗任の娘～」

著者	ひなたまり
価格	800 円
ジャンル	大衆小説
ブース	委託販売

推薦文

奥州藤原氏の二代目・基衡とその妻・那津、基衡の乳兄弟・佐藤季春、三人の十代から晩年までの物語。

読んでいて特に印象的だったのは二点です。

那津の章、冒頭の「遥かなる故郷」での筑紫の大島の描写、十三歳の少女のまだ見ぬ父の故郷へのおそれと憧れに引き込まれました。

基衡の章「北を継ぐ者」で語られる、中尊寺金色堂を建立した父・清衡のこと。また「あらたまの命」で、それぞれの寺院建立について語る基衡・那津の場面。血縁同士の内乱を経て君臨した奥州藤原氏の人々が、なぜ莫大な財産を注ぎ込んでまで寺院を建てたのか思いの一端を見たように思います。

安倍宗任というと「奥州安達ヶ原」で人形浄瑠璃や歌舞伎に取り上げられる有名な人物ですが、その宗任の娘の物語もまた波瀾万丈で一気に読みました。

――庭鳥

孤独を必要とする君へ

「夜さりどきの化石たち」

著者	佐々木海月
価格	300 円
ジャンル	純文学
ブース	純文学 1「エウロパの海」

推薦文「孤独を必要とする君へ」

マリンスノーが降る海の底に喩えられた、雪の夜の中を歩くふたりの少年のおはなしです。

文体が、ひっそりと静かで、ひとつひとつの表現が、とても丁寧に書かれていて、昼間の慌ただしさや、他人との同調、日常の雑多から隔離されて、自分の呼吸のペースを思い出せるような時間が、しんしんと流れていきます。

「孤独」を必要とするひとの心に、ひとひら、ひとひら、おりていく、雪のようなお話です。

――咲祈

それでも、『希望』という名の光はここに

「星の指先」

著者	佐々木海月
価格	500 円
ジャンル	純文学
ブース	純文学 1「エウロパの海」

推薦文「それでも、『希望』という名の光はここに」

死の世界として荒廃した地上を追われ、変化の無く平穏な、まがいものの幸福で形作られた世界に生きていた「私」は祖母の部屋で見つけたかつての荒廃する前の世界の地図と、彼女の記憶の中でだけ生き続けていた失われた世界を探し求めるため、あてのない旅に出る――

物語は、厄災が溢れ、荒廃していた「まがいものの幸福」で守られる現代を遡り、過去へと巻き戻される。人を寄せ付けない「死の森」へと降り立ったリシュームはそこでひっそりと生きる人々、彼等が森の奥に覆い隠し、守ろうとしてきた物の存在を知る。どこかもの悲しく、それぞれ固有の寂しさを抱えた彼等の交わす言葉のひとつひとつは、本音を覆い隠したような余韻と心の色を読み手に映し出す。静かな寂しさを滲ませる彼等の紡ぎ出す言葉や、そこに潜んだ感情の欠片たちは滅び行く世界を、やがて否応なしに訪れるであろう「死」を、「最期」を目を逸らさずに見つめながらも、凛とした美しい魂のありかを示す。

「ここではない世界」

秩序のあり方も、社会の成り立ちも、そこで生きざるを得ない人たちに去来する思いもわたしたちが生きる「いま・ここ」とは違う場所を、そこに息づく人たちの移ろう魂のあり方を、澄んだ力強い筆致は色鮮やかに克明に描き出す。それはまるで、この宇宙が生まれた一三七億年の年月の中で照らし出された光のほんの一瞬のきらめきを切り取ったかのように力強く、どこか儚い。

感情を切り開き、見たことがない景色・感じたことのない思いへと連れ去ってくれることを楽しみに書物を開くわたしにとって、この物語の開く世界に導かれている時間はまるで、降り立ったことのない星に招かれ、長い長い時間をかけて彼らが紡いできた軌跡の一端をほんの僅かにだけ覗き見ることを赦されたような、そんな不思議な感覚を残してくれました。物語の結末、「城」の中に閉じこめられることを選んだ彼が自らを捕らえた檻を抜け出した後、託された「希望」が息づいていたことを、長い長い時間をかけてバトンを受け取った「私」は自らの目で確かめる。

地上を食いつぶし、まがいものの平穏な世界を守ることで生きながらえた人間たちの力の及ばないところで「生命」はその根を絶やさずに生き続けていた。指先で僅かに触れた星のあとさき。そこに潜んだ光のきらめきとあたたかさに、胸を掬われるかのような余韻をいつまでも残す一冊。――高梨來

はらはらと散る

「ダンスタブル嬢への幻想書簡 ― 金華青楼化鳥娘 ―」

著者	篠崎琴子
価格	100 円
ジャンル	掌編
ブース	June 3「温室」

推薦文「はらはらと散る」

まず目を引くのはつくり。
まさしく手紙。ざらりとした便せんに綴られる手記。
不思議な体験は不思議なまま、その一瞬を伝える。

――まるた曜子

どこかへいってしまったものたちへ

「追憶のための習作」

著者	実駒
価格	300 円
ジャンル	掌編
ブース	詩歌 1「夜間飛行惑星」

推薦文

「どこかへいってしまったものたちへ」

実駒さんの言葉はいつも、ふわふわきらきらとした青色の惑星を浮遊するようにきらめいている。

言葉の上を青色の蝶の影がふわりと横切っていく美しい表紙で彩られた掌サイズの文庫本を開けば、そこに綴られる文字は活版印刷風のクラシカルなフォントで刻まれている。

旧漢字で綴られた言葉を目と心の両方で追ううち、わたしたちの心はふわりとここではない物語の世界の中へと引きずり込まれる。

綴られた五つの小さな物語はいずれも、切り取られるモチーフは異なれど、「喪われていくもの」に目を向けた光景だ。

「別れ」とは小さな死だ。

離ればなれになった、もう二度と会えないであろう相手が、手放してしまった思いが幾つもある。私の中で彼らは――彼らの中の私もまた、「死」を迎えているのとまるで変わらない。人は誰も皆、たくさんの亡骸を引きずり、引きずっていることすら忘れて生きている。

小さな死をたくさんこの身に抱えながら、私たちはそれでも、朽ち果てることなどなく、生きているのだ。

「追憶のための習作」

と冠された通り、ここに詰められているのは、喪われていくもの・喪ってしまったものを優しく見守るかのような穏やかな想いだ。

表紙をめくってすぐに目に入るメッセージ。その一言の祈りは、読み手の心をまっすぐ照らし出す。

そこに刻まれた言葉と、その先に続く光景がなんなのか――それは、実際に本を手にしたあなたに確かめてほしい。

――高梨 來

ドラマを見ているような練りこまれた設定

「世界の終わりのお伽噺 2」

著者	早生しあ
価格	500 円
ジャンル	ファンタジー
ブース	ファンタジー 1「ます@レインボー」

推薦文

「ドラマを見ているような練りこまれた設定」

よく練りこまれた世界観とわかりやすい文章に、物語を通してのキャラクターのしっかりとした動機や意見が魅力的です。

またキャラクター同士の掛け合いにほっこりします。

まだまだ謎が残っているので、続刊を楽しみにしています。

――メロディアン

三分程で読める短文小説

「三分間読書」

著者	綾月　宮司（夜月書房）
価格	500 円
ジャンル	掌編
ブース	大衆小説３「夜月書房」

推薦文

「タイトル同様三分程で読める短文小説」

１０作品からなるショートショート。
辛口から甘口までジャンルは幅広い。
そこのキミ、しっかり読まないと、オチが
わからないよ！

――試し読み会感想

痛みに寄り添うこと、その光

「Hello World」

著者	いずみさや
価格	300 円
ジャンル	大衆小説
ブース	大衆小説Ａ「ザネリ」

推薦文

「痛みに寄り添うこと、その光」

みずみずしい情景がクールで明晰な文章で描かれた、少女たちの鼓動に触れる短編集。窓ハルカさんによる表紙イラストも素敵な一冊です。プロローグの一文、「放課後の世界は、今日もキラキラと荒廃している」、これに尽きるのでしょう。苦しくて、泣き出したくて、ヒリヒリして。安易な救済はない、でもそれこそが光たり得るのではないか？？　そんな切実で誠実な物語群です。

九編の物語は、いずれも少女たちによって語られます（ちょっと大人の女の子のお話もあります）。彼女たちを取り巻く環境は明るいものではありません。学校に行かない子や父親を亡くした子。けれどつらいのはそういう表層や事象そのものではないでしょう。またしてもプロローグから引用しますが、「自分も、世界も好きになれないけど、絶望的なのは、生温い退屈と失意の中で、絶望しきってすらいないということだ」ということ。彼女たちの抱える痛みや不安はどこにでもありながら、どうあっても解消できない何かです。世界が終わってしまうほどの、自分を決定的に変えてしまえるほどの絶望や希望はもはやない。現代的といえばそうかもしれません。そういう中でどう生きるのか、生きねばならないのか。9編の物語は、その絶望を徹底的に、しかし乾いた筆致で突きつけます。とはいえただ痛みをえぐるわけではありませんし、無理に救いを差し伸べるでもありません。短い物語のなかで痛みを痛みとして描き、そっと寄り添う佇まいは見事で、稀有な読書体験でした。

個人的には『ネガティブサニーサマーデイ』が刺さりました。これのみ主人公がちょっと大人です。母親から届くカニ、というモチーフが示す「絶望しきれない日常感」。その悲しさとオカシミ。なんとも絶妙です。

短い物語たちはどこか淡々と流れ、しかしいろいろな風景をみせてくれます。物語をたどった読者にそっと提示されるエピローグが沁みます。最終ページ、ラスト二行のことばが手渡してくれるもの、その光。ぜひ読んで、裏表紙に描かれた少女と視線を交わしてほしいです。女の子の表情にあーってなる。お守りみたいに、そっとポケットに忍ばせたい一冊。紙の本をめくって読むよろこびのひとつってこういうところにあるのかも、なんてちょっと大げさな言い方ですけどそんなふうに思いました。

――オカワダアキナ

衣ほしたる天の香具山と謎の女王

「明日香風、吹く」

著者	庭鳥
価格	400 円
ジャンル	大衆小説
ブース	大衆小説B「庭鳥草紙」

推薦文

「衣ほしたる天の香具山と謎の女王」

万葉集に材をとり、その時代の人々を雄大な世界観とともに生き生きと描いた二つの物語が収録されています。

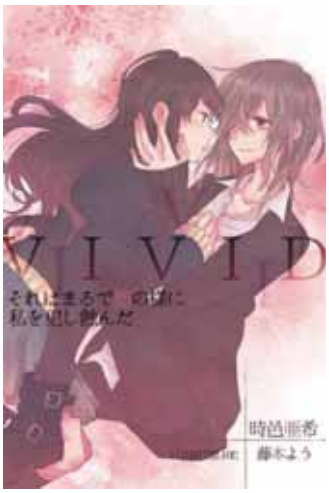
表題作では、持統天皇の有名な「春過ぎて夏きたるらし」の和歌を主軸に、この歌にまつわる、その夏、その場に生きていた人の思い出が、元明天皇によって懐かしく語られます。あたらしい平城京で新たな天皇として立つ氷高皇女への期待が清々しく、装丁やタイトルとも雰囲気がぴったりです。

さて、万葉集にはたくさんの詠み人しらずの歌があり、また、詠み人の名はわかってもその詳細が不明という場合も多くありますが、本誌の二篇ともに主要人物として登場する檜隈女王もそのひとりです。本作では、残されたただひとつの歌から、この謎の女王の人となりを豊かに想像して物語を彩らせています。控えめで聡明で誇り高い女王はとても個性的で魅力あふれるキャラクター。「わからない」ということが、古代へのロマンをさらに掻き立てるのです。

万葉の時代に興味がある人にはいっそう面白く、そうでない人にも古代日本に興味を持つ良い導入になることでしょう。

——並木 陽

百合と伝奇の味付が絶妙な一作



「VIVID　それはまるで恋の様に私を犯し蝕んだ」

著者	時邑亜希
価格	600 円
ジャンル	JUNE
ブース	ライトノベル１「猫舌連盟」

推薦文

「百合と伝奇の味付が絶妙な一作」

不器用な女の子が、人生の先輩のお姉さんに導かれ、ゆっくり成長していく物語です。

トゲトゲしていた一依ちゃんがゆるっとした雰囲気をもつあざみさんにじっくりほだされていく様子がとにかく可愛い。

はっきりした女性同士の恋愛というよりも、出会いから信頼関係がしっかり積み重ねられ、友人以上へと一歩踏み込む。そんな初々しさと温かさのある百合です。

そして、そんな二人が街で、学校で事件に巻き込まれていき……伝奇と冠するにふさわしい終盤の怒涛の展開は息もつかせません。

文も読みやすく、百合好きでない人にもおすすめしたい、芯の通った面白さのある作品です。

——試し読み会感想

確かに。

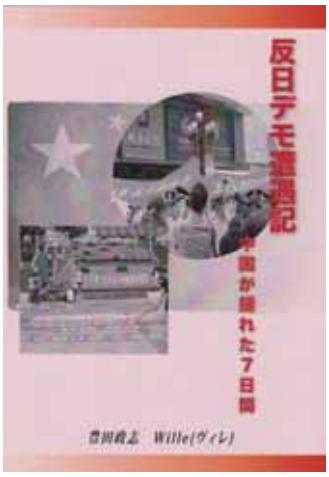
「ぼくらはここに。」

著者	夕凪悠弥
価格	100 円
ジャンル	ライトノベル
ブース	ライトノベル３「オービタルガーデン」

推薦文
「確かに。」

雰囲気が梅雨と初夏と
何か分からないじめじめしたものに
包まれるようで味のある作品です。
内容は暗い、のに空気は暗くない。
かといって軽くない。
心の混沌がぐちゃぐちゃのまま表現されていて
不思議感覚でした。

――試し読み会感想



デモとは？　扇動とは？　暴動とは？

「反日デモ遭遇記
～中国が揺れた７日間」

著者	豊田　政志
価格	200 円
ジャンル	そのほか
ブース	その他３ インディーズ出版 Wille（ヴィレ）

推薦文
「デモとは？　扇動とは？　暴動とは？」

私は中国に行ったことはありませんが、このルポを読むと臨場感がひしひしと伝わってきます。たまたま著者が２０１２年９月中国へ旅したときに反日デモに遭遇したとのことですが、ちゃんと日付が記された日記調の文もリアルです。
マスコミやネットでは伝わらない反日デモの実態。これを読むとなんとなく分かる気がします。
平和ボケしている日本人。コレを読んで怒りを呼び覚ますのか、それとも冷静に対処すべきなのか？
おそらく後者でしょうね。

――桜田門

死しての町民の心の中に生き続ける

「正助走る
第一部　大塩平八郎の乱」

著者	中西　廣全
価格	400 円
ジャンル	大衆小説
ブース	その他 3 インディーズ出版 Wille（ヴィレ）

推薦文

「死しての町民の心の中に生き続ける」

意外にも取り上げられてこなかった大塩平八郎を題材にした物語。

江戸後期、大坂の町で飢餓に苦しむ民を救うために立ち上がった元・町奉行の与力だった平八郎。その彼の弟子のような存在である実在の主人公、松田正助の視点から描いた話はとてもユニーク。さらに正助の伴侶となる女性、カヅの存在も目を離せません。

幕府という巨大な権力に立ち向かう大塩平八郎はもともと権力側の人間だったが、

江戸時代にもこんな人がいたのには痛く感動します。

大塩平八郎は死しても町民の心の中に生き続けるのだ。

「武士の江戸中央権力」と「大坂町民の救世主」の構図は今も関西人の心に響くのではないでしょうか？

――桜田門